ら

ら 五十音圖にて第四十一、卽ち、良行阿列の假名。伊呂波歌にて第二十二の假名。【字體】一【萬葉假名】兩・羅・邏・囉・攞・良・浪・郎・朗・樂・等。【平假名】ら・ら・ろ・ろ・ろ（良より出づ）。ら・ら（羅より）。ら・ら（蘭より）。【片假名】ラ・ラ・フ・ー・フ・ら・ら・ら・ら（良より）。

【表はす音】羅・邏・囉・攞は漢吳音ラ、良は漢音リャウ又はラウ、浪・郎・朗は漢吳音ラウ、樂は漢吳音ラク、蘭は漢吳音ラン、等は訓ラなり。これらを假りてラの音を表はせり。今らの表はす音は

一、表音的假名遣にては（イ）子音rと母音アとより成る音節。子音rは咽喉より鼻腔への通路を閉ぢ、舌の尖端を上門齒の後方なる齒槽突起の後部に當て、且つ舌の緣邊をすべて硬口蓋に密著せしめて閉鎖を作り、聲帶の振動を帶びたる氣息を以て、舌の尖端の部分に於て其の閉鎖を破る時に發する顫音なり。音の分類上より云へば、齒音に屬する有聲破裂音なり。此の音を以て西洋のr音（舌の尖端を高めて齒槽突起の後部に接近せしめ、其の間より聲帶の振動を帶びたる氣息を出して發する音）に比するものあれど、恐らく正しからざるべし。ら行音は此の音に種種の母音を附したるものなり。この音は多行濁音を構成する子音dに類似す。ただrは舌尖の口蓋に觸るる位置dよりも後方にあるを異なりとなす。故に地方によりては之をdと發音するものあり。又之をl音又はr音に發音する地方あり（l音は舌の尖端を齒槽突起の後方に當て、舌の緣邊と口蓋との間隙より聲帶の振動を帶びたる氣息を出して發する音、又、捲舌のrはr音を發する時、氣息を强く出し舌尖を振動せしめて發する音なり）。此の音、本來の國語にては語頭に來る事なし。又、古くはヤ行に轉ずるものあり。「いはる」（所謂）の「いはゆる」となり、「のられ」（所謂）の「のらえ」となれる如し。（ロ）一語中にあるらあ又はらーは子音rとアの長音とより成る音節を表はす。「からー」（瘳）の如し。

二、歷史的假名遣にては（イ）一の（イ）に同じ。（ロ）一の（ロ）に同じ。但しらーは用ひず。（ハ）一語中に於けるらう・らふはローと發音するを常とす。「らうじん」（老人）・「まらうど」（客）・「らふそく」（蠟燭）・「あつらふ」（誂）の如し。但しらふのふが波行四段の活用語尾なる時はラウと發音する事多し。「きらふ」（嫌）・「あらふ」（洗）の如し。

ら ―羅（名）一薄く織りたる絹布。うすもの。うすぎぬ。うすはた。和名抄十二「羅（此間云、良。一云、穀紗）」紫式部日記「へうしはら、ひも同じからのくみ」二とりあみ。あみ。爾雅釋器「鳥罟謂二之羅一」三まら（麻羅）に同じ。皇極紀抄七（承元元年二月十八日）「搦二取上人等一、或被レ切レ羅、或被レ禁二其身一」

ら ―騾（名）【動】らば（騾馬）の略。

ら（助）るはの約。「見てら」「讀んでら」

ら 等（接尾）一其の物事の複數を表はす語。記中「みづみづし、くめのこ良（ラ）が」萬五「少女良（ラ）がさなす板戸をおし開き」二語の末に添ふる意味なき語。記中「うま良（ラ）にきこしもちをせ」應神紀「しづえ羅（ラ）は人皆とり」萬廿「伊香保ろにあま雲いつぎ、かぬまづく人とおたはふいざ寢しめと羅（ラ）」字鏡「稀（良豆）」

らーけん（蘭 Laken）（名）昔時、船來の羅紗。らんけん。昆陽漫錄「和蘭にては羅紗をらあけん・といふ」

らい（名）【動】あはうどり（信天翁）の異名。

らい ―耒（名）すき（鋤）に同じ。易經繫辭「揉レ木爲レ耒」

らい ―來（名）未來。將來。易經繫辭「神以知レ來、知以藏レ往」同同「易、彰レ往而察レ來」

らい ―雷（名）いかづち。かみなり。續紀十九（天平勝寶八年十二月朔日）「去月廿六日雷」文德實錄一（嘉祥三年六月己酉）「雷震二西寺刹柱一」易經上經「澤中有レ雷、隨」

らい ―罍（名）水を盛る器。雲雷の形を刻みたるもの。又、酒器にも用ふ。雜式「洗所三人（中略）[illegible]」正字通「[illegible]」

らい ―籟（名）風の物に當たりて發する音。[illegible]「天に色めき地に響く籟の聲もおびただし」

らい ―癩（名）らいびやう（癩病）に同じ。

らーい ―羅衣（名）うすものにて仕立てたるころも。朗詠「外人不レ識承レ恩處、唯有二羅衣染一御香一」後漢書（[illegible]）「羅衣飄颻」

らーい ―羅衣（名）一【植】地衣類の總稱。二こけごろも（苔衣）に同じ。

らい ―來（接頭）次に來たるべき年月日などをいふ語。きたる。こん。「來年」「來春」

らい 來（接尾）このかた。以來。「昨年來」「數日來」

らいーい ―來意（名）來たりたる趣意。來たりたるわけ。甲陽軍鑑十「御返事の御書は、度度來意珍珍重重候」後漢書（公孫述傳）「來意厚矣」

らいーいう ―來由（名）來たりたる理由。因って來たりし理由。由來。來歷。由緖。白居易詩「先遣二和風報二消息一、續教二啼鳥說二來由一」同「何事遣二君居二此地一、天高無レ處問二來由一」

らいーいう ―來遊 來たり遊ぶこと。運步色葉「來遊」

らいーう ―雷雨（名）かみなりとあめと。雷鳴り雨ふること。續紀廿（天平寶字二年六月壬午）「雷雨、神祇官屋災、往往人畜震死」易經上經「雷雨作、而百果草木皆甲拆」

らいーうん ―雷雲（名）せきらんうん（積亂雲）の異名。

らいーえつ ―來謁 來たりて面謁すること。史記留侯世家「張良從レ外來謁」

らいーえふ ―來葉（名）のちのよ。後代。後世。來世。陸機文（文賦）「俯貽二則於來葉一」

らいおん（英 Lion）（名）【動】しし（獅子）に同じ。

らいーが ―來駕 來たり訪ふことの敬語。若風俗（長）「十日も前より、御來駕を待つ事なれ」

らいーが ―來賀 來たりて悅びを述ぶること。詩經大雅「受二天之祜一、四方來賀」

らいーかう ―來航 外國より船にて來たること。渡航し來たること。

らいーかう ―來降 きたりて降服すること。後漢書東夷傳「因二其來降一、羈二縻畜養一」

らいーかう ―來港 船が港に入り來たること。

らいーがう ―來迎 一佛語。彌陀を念ずる者の臨終の時、佛菩薩の影向・來現して之を極樂へ迎へ導くこと。著聞三「宿願にまかせて、遂に聖衆の來迎に預かる」五會法事讚「但有二稱名一皆得レ往、觀音勢至自來迎」二高山の頂上より見る日の出。笈埃隨筆二（富士山）「八合の上に至らざれば、あくる曉天の來迎といふを見難し」三ごらいがう（御來迎）に同じ。

らいがう いんぜふ ―來迎引接 佛語。佛菩薩が極樂淨土より來たりて、念佛の行者を極樂淨土に導き誘ふこと。平家三（燈籠）「來迎引攝の悲願も此の所に影向を垂れ」

らいがうーらうり 來迎寶（名）ごらいがうらうり（御來迎寶）に同じ。還魂紙料上「來迎寶」

らいがうーばしら 來迎柱（名）佛堂にて佛像を安置する位置の附近に在る圓柱。須彌壇の四隅にあり。新永代藏二「本堂の來迎柱ゆがみ」

らいがうーゑ ―來迎會（名）佛語。二十五菩薩の來迎に擬してなす遊戲の法會。東都歲事記四（[illegible]）「十七、十八日淺草新島越念佛院法會（中略）來迎會を行ひける、其の頃は本堂の前に廊を構み、二十五菩薩の假面をかけ菩薩の出立ちにて、衆僧音樂をなし、ねり供養ありしが」

らいーかく ―來客（名）らいきやく（來客）に同じ。張籍詩「公事稀疎來客少」

らいーかく ―來格 來たりいたること。神靈の祭祀に、神靈の降り來たること。神靈の復蹤せらるること。盛衰記四十五（[illegible]）「云云鏡誓來格之報賽一云云寶劍可レ歸之謂新、思其元始、已在彼社一」書經益稷「戛二擊鳴球一、搏二拊琴瑟一以詠、祖考來格」

らいーがくき ―來學期（名）此の次の學期。

らいーがくねん ―來學年（名）此の次の學年。

らいーかん ―來翰 來簡（名）らいしよ（來書）に同じ。宋書吳隱之傳「忽獲二來翰一」

らいーぎ ―來儀 一來たり到ること。太平記二（[illegible]）「舞童回雪の袖を飜せば、百獸も擧し舞ひ、鳳鳥も來儀する計りなり」二來たることの敬語。書經益稷「簫韶九成、鳳凰來儀」

らいーきやく ―來客（名）訪ひ來たれる客。らいかく。來賓。

らいーきよ ―來去 きたることとさることと。去來。杜甫詩「巴童蕩レ槳欹側過、水鳥銜レ魚來去飛」

らいぎーらく ―禮義樂（名）ごじやうらく（五常樂）の異稱。樂家錄廿八（中略）「五常樂（中略）一名、禮義樂」

らいーくわ ―雷火（名）落雷により起こる火災。紀略十三（萬壽四年五月廿四日）「豐樂院西第二堂、爲二雷火一被レ燒」北史（[illegible]）「雷火遂滅」

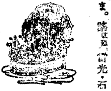
らいーくわい ―來會 來たり會すること。參會。左傳昭公十二年「諸侯之賓、能來二會吾喪一」

らいーくわい ―磊嵬（副）〔らい（磊）は多くの石、くわい（嵬）は岩山〕けはしく高きさまにいふ語。韓愈詩「陸梁斂傑磊嵬、天風飄飄吹レ我過」

らいーくわい 磊塊 磊磈（副）一石塊の重疊してけはしきさまにいふ語。又、石のかたまり。成公綏文（天地賦）「山嶽磊磈而羅峙」陸游詩（[illegible]）「胸中磊塊無」二胸中の鬱勃たるさまにいふ語。世說「阮籍胸中磊塊、故須二酒澆一之」

らいーくわう ―雷光（名）雷のひかり。いなびかり。いなづま。謝惠連（[illegible]）「雷光・石火の光りの陰」

らいーくわん ―禮冠（名）禮服を著くる時に用ふる冠。漆地の冠に透彫にしたる金輪を篏め、其の上に金銀・珠玉の飾りを施したるもの。品位によりて其の裝飾に差違あり。儀式六（元正朝賀儀）「鉦鼓師、禮冠、皂緌、緋大袖袍」森寄坊式（[illegible]）「東宮冠帶以下出（中略）就レ次、著二禮冠一禮服二」


らいくわん

らいーくわん ―雷管（名）銃砲に裝塡する彈藥を炸發せしむる爲めに裝置する小さき管。

らいーくわん ―來觀 來たり見ること。漢書武帝紀「作二角抵戲一、三百里內皆來觀」

らいーげ ―來下 おり來たること。下だり來たること。盛衰記四十四（[illegible]）「天人來下して告げて云はく」詩經大雅「公尸燕飮、福祿來下」

らいーけい ―雷雞（名）【動】らいてう（雷鳥）に同じ。

らいーけい ―來詣 來たりて參詣すること。太平記廿九（[illegible]）「來詣參入之類、散花合掌之聲」

らいーげつ ―來月（名）今月の次に來たるべき月。次の月。榮華花山「此の月（中略）來月ばかりにとなん思ふ」

らいーけん ―來獻 來たり獻ずること。太平記廿九（[illegible]）「來獻の報酬とて、駿馬十匹鎧二領」漢書文帝紀「令二郡國無一レ來獻二」

らいーげん ―來現 來たり現はるること。現はれ來たること。略白鏡「湖水の面に鳴動するは、天燈・龍燈の來現かや」

らいーこ ―雷鼓（名）一雷鳴を鼓と見立てたる語。朱慶餘詩（[illegible]）「晴雲噴レ山雷鼓響」二八面のつづみ。一說、六面の鼓。

らいーこう ―雷公（名）かみなり（雷）に同じ。紀略十三（萬壽四年五月廿四日）「雷公墮二於所所一」杜甫詩「安得レ鞭二雷公一、滂沱洗二吳越一」

らいーこう ―來貢 來朝して貢物を奉ること。郝經詩「往歲見二沙陀一、回鶻正來貢」

らいーこう ―來寇 きたりてあだすること。來たり攻むること。

らいこうーさい ―雷公祭（名）陰陽家にて、雷公を祀りて雨などを祈る祭。政事要略廿六（[illegible]）「雷公祭、年來有レ驗、不レ闕之」禁祕抄下「祈雨（中略）雷公祭雖レ有レ驗、頻絕畢」

らいこうーしき ―雷公式（名）陰陽家にて用ふる占法の一。職制律「太一・雷公式、私家不レ得レ有」唐六典四「凡式占辨二三式之同異一、一曰雷公式、二曰太乙式」

らいーこん ―來今 今よりのち。今後。自今。淮南子齊俗訓「往古來今謂二之宙一」

らいーさい ―來歲（名）次に來たるべき年。來年。運步色葉「來歲」周禮（[illegible]）「社之日、涖卜二來歲之稼一」

らいーさう ―癩瘡（名）癩病のかさ。癩病。醒睡笑二「我が身に癩瘡いできたるていを見」

らいーさつ ―來札（名）らいしよ（來書）に同じ。杜甫詩「會面思二來札一」

らいーさん ―禮參（名）神佛に參りて禮拜すること。曾我十二（[illegible]）「日中のらいさんの勸め」

らいーさん ―禮讚 佛語。三寶を禮拜し其の功德を讚嘆すること。又、其の文。盛衰記十七（[illegible]）「六時の禮讚澄みて、朝暮の念佛いと貴し」

らいーし ―禮紙（名）一書狀の文言を記したる紙の上を卷く別の白紙。其の上に更に包紙を用ふ。七紙禮（シチシライ）・五紙禮（ゴシライ）・三紙禮（サンシライ）の別あり。七紙禮は、紙三枚を重ねて狀を書き、禮紙二枚、包紙卽ち立紙を二枚にすることにて、最上の禮とす。之に次ぐものは五紙禮にて、二枚の紙に狀を書き、禮紙一枚に卷きて、包紙を二枚にするもの。三紙禮は一枚に書きて、禮紙一枚を卷き、一枚を橫に折りて卷くもの、是れは普通の例とす。平家三（足摺）「僧寬と云ふ文字はなし、禮紙にぞ有るらんとて、禮紙を見るにも不レ見」桃華蘂葉「晴禮以二二枚一書レ之、以二二枚一爲二禮紙一、其文又加二禮紙一枚一、以二二枚一爲二立紙一、初度などは如レ此嚴重可レ然」二書狀の端に更に書くこと。おってがき。なほなほがき。

らいーし ―禮師（名）佛語。さんらいし（三禮師）に同じ。

らいーし ―來旨（名）他より申し來たれる趣旨。徐陵文「若鄙言爲レ戲、來旨必通」

らいーし ―耒耜（名）〔らい（耒）は耜（スキ）の柄、し（耜）はすき〕農業の具。すき。禮記月令「命二農計二耦耕事一、修二耒耜一、具二田器一」後漢書章帝紀注「耒其柄、耜其刃」

らいーし ―雷師（名）らいこう（雷公）に同じ。楚辭離騷「雷師告レ予以レ未レ具」

らいーし ―雷子（名）男子の髮の結び方の一種。膝栗毛下「久しうのんこ髷に結うてぢやあったが（中略）雷子にゆうて貰うたが、えらう氣持が善うてたまらんはい」

らいーし ―櫑子（名）菓子などを入るるもの。高坏に似て緣高く、蓋桶の蓋をあふのけたるさまのもの。內部は朱塗、外部は黑塗にて、螺鈿などにて飾る。和名抄十三「櫑子。唐韻云、櫑（[illegible]）酒器也」源氏宿木「御まへ近きらいしどもを、なぞあやしと御覽ずるに」

らいーし ―賚賜 たまはること。又、そのもの。たまもの。唐書（[illegible]）「酒酣、帝起舞以屬二群臣一、在位皆舞、賚賜有レ差」

らいーし ―來至 來たり至ること。太平記廿四（[illegible]）「聖衆此の中に來至し給へば、人天大會悉く渇仰の頭を傾けける」詩經「何時當二來至一哉」

らいーし ―來示 書狀にて言ひ來たりたることの敬語。仰せ。御申越し。來諭。

らいーしう ―來週（名）次に來たるべき週間。次の週期。

らいーじう ―雷獸（名）【動】きてん（木貂）に同じ。甲子夜話十「後晁本鄕に雷獸を畜ふものありと聞き」山海經「東海中有二流波山一（中略）其上有レ獸、聲如レ雷、其名曰レ夔、黃帝得レ之、以二其皮一爲レ鼓、打以二雷獸之骨一、聲聞二五百里一、以威二天下一」

らいしーじやう ―禮紙狀（名）禮紙を用ひたる書狀。東鑑六（文治二年四月卅日）「禮紙狀云、追

啓、如此之次第、自攝政家令觸中給歟、朝之要樞也、必可竭忠節給候也」

らいしつ 〔癩疾 （名） らいびやう（癩病）に同じ。東雅（蟲獸）「癩疾の人をかはらものといふは迦隷耀也、翻して癩病といふ」

らいじつ 〔來日 （名） 今後來たるべき日。未來の日。和爾雅（二）「明日（中略）來日」韓愈詩「年高過半百、來日苦無多」

らいしふ 〔來集 來たり集まること。盛衰記（廿八、經正參詣竹生島）「諸僧來集して遊宴するに」禮記（月令）「四方來集、遠郷皆至」

らいしふ 〔來襲 來たり襲ふこと。

らいしや 〔癩者 （名） 癩病にかかりたる人。なりんぼ。かったゐ。元亨釋書（十三、忍性）「有癩者、手足緩戾、難于行乞」

らいしや 〔來者 （名） ❶來たる人。來訪の人。禮記（曲禮）「使人立于門外、告來者」❷將來に出で來る人。未來に於ける人。論語（子罕）「後生可畏、焉知來者之不如今也」

らいしや 〔來車 車に乘りて來たり訪ふこと。轉じて、來訪の敬語。來駕。

らいしや 〔來謝 來たりて謝意を述ぶること。

らいじやう 〔來狀 （名） らいしよ（來書）に同じ。

らいしゆん 〔來春 （名） 來年の春。明春。翌はる。醒睡笑（三）「來春はおぼしめすままの御しらぎ申さん」漢書（張敞傳）「況至來春」

らいしよ 〔來書 （名） 送り來たりたる書狀。來狀。來札。來信。來翰。運歩色葉「來書（ライショ）」杜甫詩「各逐萍流轉、來書細作行」

らいじよ 〔雷序 來序 （名） ❶能・狂言にて、神・王・天狗等、神聖・莊重なる仕手の進退する場合に用ふる囃子。狂言（唐相撲）「行幸有ったらば中略知らせて給はり候へや（來序にて王出で臺へ上り、皆々座に着くと、來序打上げ）」❷芝居にて、人間に化けたる獸類の急に其の姿を現はす場合等に遣ふ鳴物。笛・大小鼓・太鼓の四種。

らいしん 〔來信 （名） 他より報じ來たりたる書狀。送り來たりたる音信。運歩色葉「來信（ライシン）」皮日休詩「釣公來信自松江、三尺春魚潑刺霜」

らいじん 〔雷神 （名） らいこう（雷公）に同じ。盛衰記（卅四、南都燒失）「雷神磐石を碎きて船筏を下しき」宋史（禮志）「州縣祭社稷、祀風伯雨師雷神、爲小祀」

らいじん 〔癩人 （名） 癩病に罹かりたる人。かったゐ。癩者。盛衰記（四十四、癩人法師口說）「年闌けたる癩人の鼻聲にて語る」

らいしんし 〔賴信紙 （名） でんしんらいしんし（電信賴信紙）の略。電報規則（第三十三條）「發信人は自己の居所氏名の傳送を要するときは賴信紙中本文の末尾に之を記載すへし」

らいす 禮 （自動變） 禮拜す。敬禮す。平治（來朝）「和尚和尚と禮す」同（常盤落）「唐の太宗は佛像を禮して、榮華を一生の春の風に開き」

らいすかれー （英 Rice curry） （名） 西洋料理の一。肉と、かれー・の粉と、饂飩粉とをまぜて煮たる汁を、飯にかけたるもの。

らいすぺーぱー （英 Rice-paper） （名） ❶麻布・襤褸を原料として製したる一種の薄紙。卷烟草を卷き、又は花瓣の擬などを造るに用ふ。❷【植】つうだっぽく（通脫木）の異名。

らいせ 〔來世 （名） 佛語。みらいせ（未來世）に同じ。宇津保（藤原の君）「らいせ未來の功德なる（りイ）」

らいせい 〔雷聲 （名） 雷のなる聲。雷鳴。類聚國史（七十三、天長七年七月戊子）「雷聲乃止」

らいせい 〔來世 （名） 未來の世。將來の世。書經（仲虺之誥）「恐來世以台爲口實」

らいせいもん （名） らしやうもん（羅城門）に同じ。宇治大納言物語（中）「らいせい門の邊にて、御輿をとめて」

らいせがね 來世金 （名） 死後の冥福を祈る爲めに佛へ上る金。夕霧阿波鳴渡（下）「あったら金をあの世へ遣る、是れがほんの來世（金ぢや）」

らいせき 〔磊石 （名） ごろごろしたる石。石くれ。石塊。太平記（廿二、畑六郎左衞門）「輪寶の山を崩し、磊石の卵を壓す」

らいせき 〔雷石 （名） 【鑛】砂地にて、落雷のため熔解せられたる砂粒の合成して管狀をなしたるもの。

らいぞく 〔來屬 らいふく（來服）に同じ。

らいそん 〔來孫 （名） 玄孫の子。和名（三）「來孫。爾雅云、玄孫之子爲來孫、言只有往來親耳。今按五代之孫也」爾雅（釋親）「玄孫之子爲來孫」釋名「來孫此在無服之外、其意疎遠、呼之乃來也」

らいだ 〔懶惰 らんだ（懶惰）の訛り。

らいだう 〔禮堂 （名） らいはいだう（禮拜堂）に同じ。文德實錄（十、天安二年四月庚子）「寶皇寺（俗名鳥戸寺）火、金堂・禮堂、盡爲灰燼」蜻蛉日記（中）「だらにいと尊くよみつつ、らいだうにたたずむ法師ありき」

らいたく 〔來宅 人の、我が家に來たること。

らいだん 〔來談 來たりて話すこと。訪ひ來たりて談話すること。

らいち 〔畾地 （名） 餘りの地。あき地。餘地。狂言（大藏流富士松）「松を植うる程のらいちがある」曾我扇八景（上）「此の石塔は此方、隣りは河津の墓、らい地せまって」

らいちやう 〔來聽 來たりて聽くこと。宋史（[illegible]）「予以奠之、庶幾來聽」

らいぢやう 〔來場 その場所に來たること。

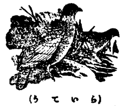
らいちやく 〔來著 きたりつくこと。到著。

らいつゐ 〔雷鎚 （名） らいふせき（雷斧石）に同じ。

らいてい 〔雷霆 （名） いかづち。かみなり。太平記（十二、公家一統政道）「群俗歸風若披霜而照春日、中華懼軌若履刃而戴雷霆」易經（繫辭）「鼓之以雷霆、潤之以風雨」

らいてい 〔來庭 らいてう（來朝）に同じ。〔王庭に來たる義〕詩經（大雅）「四方既平、徐方來庭」

らいてう 〔雷鳥 （名） 【動】鳥類中、鶉雞類の一種。體の長さ六七寸。高山に棲み、夏は草色の羽毛を有すれども、冬は白色に變ず。松雞。



（らいてう）

らいてう 〔來朝 外國人の、我が朝へ來たること。來聘。入朝。書經（旅獒）「巢伯來朝」

らいてん 〔來店 人の、店に來たること。

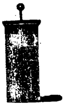
らいでん 〔禮殿 （名） はいでん（拜殿）に同じ。百練抄（十四、文曆元年二月十四日）「北野宮神殿・禮殿・小社・廻廊」康富記（文安元年四月十三日）「天滿北野御在所幷禮殿燒亡」

らいでん 〔雷電 （名） かみなりといなづまと。三代實錄（廿三、元慶二年六月十六日）「雷電、雨下如倒井」易經（上經）「雷電合而章」

らいでん 〔來電 電報の、他方より到著すること。又、その電報。

らいでんぎり （名） 【植】きささげ（梓）の異名。

らいでんびん （英 Leyden jar） 〔――瓶 （名） 【理】一種の蓄電器。硝子瓶の上方を少しく殘して、內外に錫箔を貼附したるもの。蓋を貫く金屬棒の端に鎖ありて內箔に通ず。此の棒を發電機に連ぬる時は多量の電氣を蓄ふることを得。



（らいでんびん）

らいでんぼく （名） 【植】きささげ（梓）の異名。

らいどう 〔來同 來たり集まること。詩經（魯頌）「淮夷來同、莫不率從」

らいどう 〔雷同 〔雷が聲を發すれば、物の同時に其の響きに應ずる義〕自己の定見なくして、妄りに他の說に附き從ふこと。是非の分別なく、他に同意すること。太平記（廿四、依山門嗷訴公卿僉議事）「三千學侶忽爲雷同一紙表奏、果奉驚天聽」禮記（曲禮）「毋勦說、毋雷同」

らいどう 〔雷動 雷の鳴り渡る如く、どよめき騷ぐこと。太平記（廿四、依山門嗷訴公卿僉議事）「山門の大衆忿りをなし、夜夜の蜂起、谷谷の雷動無休時」

らいどう 〔耒耨 すきにて田を耕すこと。易經（繫辭）「耒耨之利、以敎天下」

らいなふ 〔來納 來年の年貢を今年に納むること。庭訓往來（十二月）「來納過上准據」運歩色葉「來納（ライナフ）」

らいなんよけ 雷難除 （名） らいよけ（雷除）に同じ。東都歲事記（三）「別雷神窟富加牟豆美神を祭り雷難除を祈る、今日より晦日まで雷難除の守札を出す」

らいにん 〔癩人 （名） らいじん（癩人）に同じ。

らいねん 〔來年 （名） 次に來たるべき年。來（こ）ん年。明年。翌年。宇津保（藏開下）「來年こそはつかまつり給ふべき年なれば」枕（三）「來年の國國を、手を折りて數へなどして」孟子（滕文公下）「何待來年」

（諺）來年の果報は今年の稻で待つ　翌年の苦樂は、其の年の稻作の豐凶によりて豫想せらる。仲人氣質（五）「來年の果報は今年の稻で待つといふも、古き譬へにあり」

（諺）來年の事をいへば鬼が笑ふ　來年の事は豫知すべからず。役者氣質「人の命は明日をも知らず、來年の事をいへば鬼が笑ふ」

らいのとり 〔雷鳥 （名） 【動】らいてう（雷鳥）の異名。

らいはい 〔禮拜 禮して拜むこと。特に佛道にて、兩膝・兩肱を地に著けて、低頭・合掌すること。宇津保（俊蔭）「七人の人みな禮拜して申さく」宇治拾遺（十二）「上人涙をおとして、三度らいはいす」

らいはいかう 〔禮拜講 （名） 佛語。三月の十二・十三の兩日、叡山の大宮の社前にて行ふ法華八講。本禮拜講。同月廿四・廿五の兩日に同所十禪師の社前にて行ふを新禮拜講といふ。續詞花集（物名）「日吉社の禮拜講といふことに、定誓律師かはらけとりて」

らいはいだう 〔禮拜堂 （名） 寺院にて本堂の前にありて、本尊を禮拜する堂。禮堂。

らいはう 〔來報 ❶來たり報ずること。又、その報知。到來せる報知。❷來たるべきむくい。沈約文（懺悔文）「得忘己於茲日、豈期心於來報」

らいはう 〔來訪 我が家へ、人の來たり訪ふこと。運歩色葉「來訪（ライハウ）」

らいはる 來春 （名） 來たるべき春。來年の春。翌春。らいしゆん。天網島（上）「來春二三月の頃」

らいばん 〔禮盤 （名） 佛語。導師が佛を禮拜し誦經する時に昇る臺座。枕（六）「らいばんにむかひて、ろぎ誓ふも」江次第（十一、佛名）「御導師就禮盤禮佛」

らいばん 〔擂盆 （名） すりばち（擂鉢）をいふ。奧州の方言。物類稱呼

らいびやう 〔癩病 （名） 【醫】遺傳又は傳染によりて生ずる最も醜き皮膚病。赤き斑點を生じ、毛髮脫落して醜れ、乾きて白き痂（カサブタ）を生じて次第に全身腐爛するもの。かたゐ。かったゐ。ものよし。ふくよし。天刑病。盛衰記（四十四、實盛謠）「身に癩病を受けて、療治に力を失へり」

らいびやうやみ 癩病病 （名） 癩病に罹れるもの。かったゐ。癩者。

らいひん 〔來賓 賓客の訪ひ來たること。參會せらるる賓客。來客。班固文（東都賦）「莫不陸讋水慄、奔走而來賓」

らいびん 〔來便 （名） 人より寄せ來たりたる音信。運歩色葉「來便（ライビン）」

らいひんきやうそう 〔來賓競走 （名） 學校などの運動會にて、來賓中の有志者のなす競走。

らいひんせき 〔來賓席 （名） 來賓のつく席。

らいふ 〔雷斧 （名） かみなりのまさかり（雷斧）に同じ。

らいふ 〔來附 來たりてつきしたがふこと。淮南子「舜女智、正女度、神將來舍、德將來附」

らいふく 〔禮服 （名） ❶即位・大嘗會・元日節會などの大禮に用ふる服裝。其の具には玉冠・大袖・小袖・單・表袴・大口袴・裳・綬・玉佩・笏・錦襪・烏皮舃等あり。內裏式（上、元正受群臣朝賀式）「皇后服禮服、後、就御座」內藏寮式「元日御禮服、玉冠牙笏等」❷おほそで（大袖）の稱。

らいふく 〔來服 來たりて服從すること。來屬。國語（吳）「嶽濱諸侯、莫不來服」

らいふく 〔來復 かへり來たること。易經（上經）「七日來復、利有攸往」

らいふくぐら 禮服倉 （名） 昔時、內藏寮にありて、天皇の禮服などを納れ置きたる倉。光明院御記（延元二年十二月廿八日）「內藏寮禮服倉回祿、累代儀服成灰燼了」

らいふくごらん 〔禮服御覽 （名） 昔時、卽位式の行はるるに先だち、豫め其の當日、天皇の著御せらるべき冠服を天覽に供したること。山槐記（永萬元年七月十八日）「今日可有禮服御覽也（中略）右中辨成賴朝臣・藏人右少辨長方向內藏寮」

らいふせき 〔雷斧石 （名） かみなりのまさかり（雷斧）に同じ。

らいふる （英 Rifle） （名） しでうじゆう（施條銃）に同じ。

らいへい 〔來聘 らいてう（來朝）に同じ。左傳（桓公三年）「齊侯使其弟年來聘」

らいほふ 〔禮法 （名） れいはふ（禮法）に同じ。著聞（三）「禮法を嚴くしてせめさいなみて、人よりもことに痛めければ」

らいほん 〔來奔 逃げ來たること。左傳（莊公八年）「管夷吾召忽、奉公子糾來奔」史記（吳世家）「楚之亡臣伍子胥來奔、公子光客之」

らいぼん 〔擂盆 （名） すりばち（擂鉢）に同じ。運歩色葉「擂盆（ライボン）（森家本「擂粉鉢」）」

らいまんかいりう 〔――海流 （名） 【地】寒流の一。おほーつく海より西方大陸に沿ひて黃海に出づるもの。

らいむぎ （英 Rye） 〔――麥 （名） 【植】禾本科、らいむぎ屬の一年生或ひは二年生草本。南部歐羅巴及び中央亞細亞に自生するやまらいむぎより變化したるもの。高さ四五尺に達す。葉は狹長にして尖り、葉鞘は莖を圍みて二縱列に排列す。二箇の具備花より成る小穗狀花序多數集まりて複穗狀花序をなす。種子を粉末として麵麭を製するに用ふ。なつこむぎ。

らいめい 〔來命 （名） 他人より申し越されたる言の敬語。來諭。陳琳文（爲曹洪與魏文帝書）「來命陳彼妖惑之罪」

らいめい 〔雷名 （名） ❶世に鳴りわたる名。❷他人の名聲の敬稱。

らいめい 〔雷鳴 ❶雨雲の如き多量の電氣を有せる雲と、他の雲又は地との閒に放電の起こるとき發する音。かみなり。新儀式（五、雷鳴陣）「雷鳴之時、左右近衞將監已下、挾南階而陣」❷大なる音響。譬へていふ語。楚辭（卜居）「黃鐘毀棄、瓦釜雷鳴」陸游詩「不妨鼻息似雷鳴」

らいもん 〔雷文 雷紋 （名） 屈折線より成れる模樣。奈留美加多「支那に雷文と云ふ者、形狀數體あり、近來世俗の雷文と唱ふる物を觀るに、多く方形の旋紋のみをいへども、圓環異體のものは雷文とはいはず、渦卷・蕨手・蛇之目・紗綾形等種種の異名を俗稱す、方形は稻妻形と云ふ、是れを好事家にて雷文と通稱す」

らいやう 〔來陽 （名） らいしゆん（來春）に同じ。

らいゆ 〔來諭 （名） 他人より申し越されたる言の敬語。來命。劉孝綽詩「來諭昜雕金、比質非所任」

らいよけ 雷除 （名） ❶かみなりよけ。又、其のまじなひ。避雷。寶曆集成絲綸錄（十八、延享四年九月）「疱瘡・雷除之札」武江年表（七、文化年間記事）「淺草寺七月十日の四萬六千日參りに、赤き蜀黍を雷除とて商ふ」❷ひらいしん（避雷針）に同じ。

らいら 〔磊砢 （副） ❶石などの多く重なれるさまにいふ語。司馬相如文（上林賦）「蜀石黃碝、水玉磊砢」❷木はだ等の節くれだちたるさまにいふ語。世說（賞譽上）「庾子嵩目和嶠、森森如千丈松、雖磊砢多節目、施之大廈、有棟梁之用」❸胸中の磊落なるにいふ語。世說（言語）「其人、磊砢而英多」

らい-らい ⌐磊磊 礌礌 (副) ㊀石の多く重れるさまにいふ語。楚辭（九歌）「石磊磊兮葛蔓蔓」 ㊁らいらく(磊落)に同じ。劉因詩「平生磊磊、一物無ㇾ停」

らいらい らくらく ⌐磊磊落落 非常に磊落なるさま、胸中の開豁なるさまにいふ語。晉書（石勒載記）「大丈夫行ㇾ事、當二礌礌落落如二日月皎然一」

らいらい-せせ ⌐來來世世 (句) 未來世のまた未來世。謠山姥「來來世世の迷ひたり」

らい-らく ⌐磊落 (副) 〔らい(磊)もらく(落)も石のごろごろしたるさま〕 氣象の開豁にして小節に拘泥せざるさま、さっぱりとして細事に頓着せざるさまにいふ語。北史（李渾傳）「雖二氣磊落、觀者忘一ㇾ疲」

らい-りん ⌐來臨 我が家へ來たること、又、其の場に出席することの敬語。謠（西王母）「天仙理王の來臨」 博多小女郎波枕（上）「大盡樣の御來臨」

らい-れき ⌐來歷 (名) 物事の歷來たりたる次第。來由。由來。由緒。又、出典。出所。太平記（四、備後三郎高德事）「敢へて其の來歷を不ㇾ知、思ひ咎むる事も無かりけり」 黃山谷集「杜詩韓文、無二一字沒一二來歷一」

らい-ろ ⌐來路 (名) 通りきたりたるみち。過ぎ來たりし路。白居易詩「夢尋二來路一遶二羊腸一」

らい-わ ⌐來話 來たりて話すこと。又、其の話。運歩色葉「來話ライワ」

らい-わう ⌐來往 往きたり來たりすること。ゆききすること。往來。朗詠「叩ㇾ舷來往月明中」 潘岳文（射雉賦）「蹇ㇾ餌出入、挺ㇾ扠來往」

らい-ゑん ⌐來援 來たり援(たす)くること。

らう ⌐靈 (名) りやう(靈)に同じ。源「故父おとどの御靈（ラウ）」 同（柏木）「陰陽師なども、多くは女の靈（ラウ）とのみうらなひ申しければ」

らう ⌐領 (名) りやう(領)に同じ。榮華（鳥の舞）「御領・御庄さるべき限りは、四五所皆よせ給ひて」

らう ⌐羅宇 喇竿 (名) 〔初めらおす(Laos)國より舶來せる竹を用ひたるよりいふ〕 烟管の雁首と吸口との間を接續する竹の管。らうだけ。らお。浮世（二）「喇竿（キセル）の烟管をらうといふ事、天竺の次に羅宇國といふあり、その所の竹、烟管に用ひてよし、故にらうといふよし」 雞尻志「羅宇即暹羅之國名、而其地產二黑斑竹一、取ㇾ之似二烟筒一故爲ㇾ名」

らうのすげかへ 羅宇箸替 羅宇をすげかふること。又、これを業とする人。近世職人盡詞「らうのすげかへらうのすげかへ、きせるの安うり、鼠や櫻はり、如心でも今戸でも、よく調へたれば、えりどりに召せかし」

らう ⌐老 (名) ㊀年寄りたること。年寄りたる人。老人。年寄。儀制令「凡行路巷術、賤避ㇾ貴、少避ㇾ老」 同「使人知ㇾ尊ㇾ長養ㇾ老之道二」 禮記（曲禮）「七十曰ㇾ老」 ㊁らうちやう(老丁)の略。

らう ⌐牢 (名) 罪人を捕へて籠め置く所。をり。ひとや。牢屋。獄屋。監獄。枕（八、名おそろしきもの）「らうのをさ」 太平記（二、新殿）「中納言のおはします籠の中よ」 史記（太史公自序）「畫ㇾ地爲ㇾ牢、議不ㇾ入、削ㇾ木爲ㇾ吏、議不ㇾ對」 ㊁籠。

らう ⌐勞 (名) ㊀骨をり。いたづき。むづかひ。苦勞。功勞。源（明石）「年月のらう數へられ侍るに」 順集「勘解由判官の勞六年」 易經（上繫）「說以先ㇾ民、民忘二其勞一」 ㊁熟練すること。經驗の積むこと。功者なること。大和物語（下）「玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき」 源（明石）「けしきいとらうあり」 ㊂久しく使用したること。枕（六、硯中略）「硯のかたつ方にしどみなく塵り平めかし、らう多きになりたるが」

らう ⌐郎 (名) ㊀男子の稱。わかもの。唐書「僕固ㇾ人多矣、無ㇾ如二此郎一者一」 ㊁男子の生まれたる順序に從ひて、數字の下に附けて名とする語。「太郎」「次郎」 ㊂婦人より夫又は情夫を呼ぶ稱。晉書（列女傳）「天壤之間、乃有二王郎一」

らう ⌐廊 (名) 古昔の寢殿造にて、對屋と寢殿との間などを連絡するために設けたる細長き建物。壁渡殿・透廊・樋廊・背折廊等の種類あり。わたどの。ほそどの。わたらう。しんでんづくり(寢殿造)を見よ。宇津保（藤原君）「らう・わた殿（中略）いと多くたてたる」 枕（六）「からびさしのこなたのらうにぞ、女房六人ばかりさぶらふ」

らう-あ ⌐諒闇 (名) りやうあん(諒闇)に同じ。榮華（月宴）「らうあだちたれど」

らう-あう ⌐老鶯 (名) 春過ぎて鳴く鶯。殘鶯。

らう-あがり ⌐牢上 (名) 獄より出でたること。又、其の人。

らう-あらため ⌐牢改 (名) らうないあらため(牢內改)に同じ。德川禁令考（役牢二、牢內取締之部、牢屋同心勤方）「牢改之儀、毎月四度、一牢苑囚人牢鞘江出し、見廻り與力、石出帶刀・鍵役立合ひ、小頭・世話役之者、下男を召連れ牢內江這入り、法度之品幷びに破損所に而も無ㇾ之哉、逸逸爲二相改一候」

らう-あん ⌐諒闇 (名) りやうあん(諒闇)に同じ。榮華（鳥邊野）「天の下らうあんになりぬ」

らう-い ⌐老醫 (名) 老いたる醫師。

らう-いう ⌐老友 (名) 老いたる友。老年の友。宋史（蔡元定傳）「聞二朱熹名一往師ㇾ之、熹叩二其學一大驚曰、此吾老友也、不ㇾ當ㇾ在二弟子之列一」

らう-いう ⌐老優 (名) 老年の俳優。

らう-いつ ⌐勞逸 骨折りと樂しみと。勞力と逸樂と。苦樂。左傳（哀公元年）「勤恤二其民一而與二之勞逸一」

らう-いり ⌐牢入 (名) 罪人をひとやに入るること。

らう-いん ⌐老陰 (名) 陰の極まること。積み重なりたる陰氣。大織冠（三）「老陰却って一陽の氣に催されて」

らう-う ⌐老嫗 (名) らうあう(老媼)に同じ。史記（高祖本紀）「人來至二蛇所一、有二一老嫗一夜哭曰、吾子白帝子也」

らう-えい ⌐朗詠 ㊀ほがらかに詠(よ)ずること。孫綽文（遊天台山賦）「凝二思幽巖一朗二詠長川一」 ㊁詩歌又は漢文の中の雅趣ある名句に節をつけてうたふこと。又、其の謠ひ物。中右記（寛治六年三月廿八日）「此間選朗詠、或管絃之在二長曲一句、或指二象魏一而北ㇾ韓句等也」 兵範記（仁安元年十一月十四日）「五位藏人經房朗詠云云、亂舞一遍」

らうえい-はかせ ⌐朗詠博士 (名) 朗詠の節附けをする人。

らう-えう ⌐老幼 (名) 年よりと子供と。老若。史記（樂書）「老幼孤獨不ㇾ得二其所一、此大亂之道也」

らう-えき ⌐勞役 身體の活動によりて役務に服すること。民法（第三百二十四條）「農工業勞役の先取特權（中略）其勞役に因りて生したる果實又は製作物」 隋書（高帝紀）「府藏內充、民鮮二勞役一」

らうえき-しや ⌐勞役者 (名) 勞役に服する人。民法（第三百二十三條）「農業の勞役者（中略）工業の勞役者」

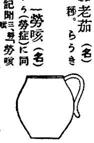
らうえき-ぢやう ⌐勞役場 (名) 監獄に附設して、罰金又は科料を完納する能はざる者を留置する所。刑法（第十八條）「罰金を完納すること能はさる者は一日以上一年以下の期間之を勞役場に留置す」 監獄法（第八條）「勞役場は之を監獄に附設す」

らう-えふ ⌐老葉 (名) ふるき葉。ふかれは。枯葉。朗詠「風荷老葉蕭條」 南史（孔覬傳）「菜不ㇾ食ㇾ心、以二其有二生意一、唯食二老葉一而已」

らう-えん ⌐狼烟 (名) 〔古へ支那にて、狼の糞を雜へ燒けば烟の直上するとて用ひしといふより出づ〕 敵の襲來などを味方に知らするために、藁・生柴等を燒きて打ち擧ぐる烟。のろし。とぶひ。烽火。太平記（一、後醍醐天皇治世）「狼烟翳ㇾ天、鯢波動ㇾ地」 酉陽雜俎「狼糞烟直上、烽火用ㇾ之」 玉海「虜至必擧二狼烟一、諭分遣ㇾ人、擧ㇾ烟直上、虜疑ㇾ有ㇾ伏引去」

らう-か ⌐廊下 廊架 (名) 家の內にて往來に用ふる處。ほそどの。下學集（上）「廊架ラウカ」 安土日記（天正十年正月朔日）「御廊下つづきに參り、御幸之御間拜見仕り候へ」

らう-か ⌐老茄 (名) らうきや。茶入の一種。


（らうか）

らう-がい ⌐勞咳 (名) らうしやう(勞症)に同じ。雜病記聞（三、勞咳）「勞咳は本名勞瘵と云ひ、唯瘵とも云ひ、或は虛勞とも云ひ鬱症とも云ふ、是の勞とは、此の病段段勞れて出づる病なる故に勞と云ふ」

らう-かう ⌐勞效 (名) ほねをり。てがら。運歩色葉「老效ラウカウ」 褒章條例（第二條）「公同の事務に勤勉し勞效顯著なる者」

らう-かう ⌐老巧 經驗を積みて巧者なること。

らう-かく ⌐老鶴 (名) 年老いたる鶴。曾我扇八景（三）「老鶴を檻に込め」

らう-かく ⌐浪客 (名) 浮浪人。浪人。流浪人。

らう-がく ⌐老學 老いて學ぶこと。陸游詩「窮冬短景苦二匆忙一、老學菴中日自長」

らう-がくきう ⌐老學究 (名) 年老いて迂遠にして世用にたたざる學者。正字通「俗儒護二訓故一、不ㇾ能ㇾ經ㇾ世、曰二老學究一」

らう-かこひ ⌐牢圍 (名) 牢屋の周圍のかこひ。

らう-がさ ⌐牢瘡 (名) 久しく獄中にありて、濕氣などのために發したるかさ。

らう-かつ ⌐老黠 らうくわい(老獪)に同じ。

らうか-とんび ⌐廊下鳶 (名) 妓樓などにて、遊客が、廊下などをあちこちとあるきまはること。又、其の人。

らうか-ばし ⌐廊下橋 (名) ㊀險阻なる道路に、廊下の如く高く架したる橋。字節用（言語）「廊下橋ラウカバシ（[illegible]）」 國花萬葉記（二）「通天橋、東福寺の內に有り、廊下橋也」 ㊁城內に設くる橋、常の橋の上に廊下を設け、左右に壁を附け、狹間を切りて橫矢の用とするもの。或は屋根なくして、敵に向かひたる方面にのみ竹束又は屛などをするもの。棧部。部橋。甲陽軍鑑（十六）「廊下橋の事、同引橋の事」

らう-がはし ⌐亂 (形二) みだりがはし。むさくるし。蜻蛉日記（中）「投げ散らし、數珠も卷きて打ちあげなど、らうがはしきに」 源（夕顏）「らうがはしき大路に立ちおはしまして」

らうがはし-げ ⌐亂氣 (副) らうがはしきやう。らうがはしさう。

らうがはし-さ ⌐亂 (名) らうがはしきさま。らうがはしき度合。徒然草「車どものらうがはしきも」

らうか-ばん ⌐廊下番 (名) 江戶幕府の奧向番衆の一。能役者の中より拔擢してこれに補し、苗字を改め勤番せしむるものと。若年寄の支配にて、役料百俵を給せらる。常憲院殿御實紀（九、貞享元年正月十一日）「二の丸番より廊下番にうつるもの一人」 吏徵附錄（御廊下番）「御廊下番、貞享元年甲子正月十二日、御廊下番江、二の丸番より小林半助被二仰付一」

らうかばん-がしら ⌐廊下番頭 (名) 廊下番を統轄する役。若年寄の支配にて、役料五百俵を給せられ、初め貳人、後四人とす。寶永三年武鑑「御廊下番頭、千三百石、高尾阿波守」

らうかばん-くみがしら ⌐廊下番組頭 (名) 廊下番の組頭。若年寄の支配とす。寶永二年武鑑「廊下番組頭、四百俵、秋間新右衛門」

らう-がへ ⌐牢替 (名) 其の囚人の牢獄をかふること。牢獄祕錄（牢屋敷見廻り）「其の當人は牢替（[illegible]）申付け」

らう-かん ⌐老幹 (名) 年を經たる木の幹。老木の幹。程史「老幹參ㇾ天一萬株一」

らう-かん ⌐老漢 (名) 年老いたる男。運歩色葉「老漢ラウカン」 十國春秋「末帝怒曰、憨老漢、不ㇾ足二與語一」

らう-かん ⌐牢監 (名) をり。ひとや。獄舍。獄屋。牢屋。

らう-かん ⌐琅玕 (名) 玉に次ぎて美しき寶石。浦島年代記（浦島太郎入水部）「琅玕の臺を設け」 書經（禹貢）「厥貢惟球琳琅玕」

らう-がん ⌐老顏 (名) 老いて衰へたる顏色。王九思詩「濟愁破二老顏一」

らう-がん ⌐老眼 (名) 老いて衰へたる眼力。老いて遠視となりたる眼。朗詠「老眼易ㇾ迷殘雨裡」 盛衰記（廿、佐殿大）「老眼より涙をはらはらと流して」

らうがん-きやう ⌐老眼鏡 (名) 老眼に適する眼鏡。遠眼鏡。

らう-き ⌐老耆 (名) ㊀老丁と耆老と。㊁大寶の制、六十六歲以上、孝謙天皇の天平寶字二年以後、六十五歲以上の者の稱。調庸を全免せらる。耆老。周防國玖珂郡玖珂鄕延喜八年戶籍公文「戶主秦人今吉、年陸拾陸歲、老耆」

らう-き ⌐老驥 老騏 (名) 年老いたる駿馬。老いたる俊傑に譬へいふ語。(諺)老驥千里を思ふ 英雄の年老いて、英氣の衰へざるに譬ふ。太平記（卅八、太元軍）「老驥の千里を思ふ心未だ屈せざれども、飢鷹の一呼を待つ身となりぬ」 (諺)老驥櫪に伏すとも志千里に在り 「櫪」は馬の飼槽（カヒヲケ）。前條に同じ。魏武帝詩（樂府歌）「老驥伏ㇾ櫪、志在二千里一、烈士暮年、壯心未ㇾ已」

らう-き ⌐老氣 (名) 老いて益壯んなる氣象。人にたけたる氣象。杜甫詩「子雖二軀幹小一、老氣橫二九州一」

らう-き ⌐癆氣 (名) らうがい(勞咳)に同じ。陰德太平記（卅二、杉原忠興死去）「癆氣の樣に、ふらふらと煩ひけるが」

らう-き ⌐牢記 しっかりと記憶すること。强記。

らう-ぎ ⌐老妓 (名) 年老いたる藝娼妓。

らう-きう ⌐老朽 おい朽(く)つること。老いて役に立たざること。又、其の人。「老朽陶汰」 鄭愚文「以二耽沈之利欲一、役二老朽之筋骸一」

らう-ぎう ⌐老牛 (名) 年老いたる牛。(諺)老牛犢を舐る 子の愛情に引かさるるに譬ふ。後漢書（楊彪傳）「愧無二日磾先見之明一、猶懷二老牛舐ㇾ犢之愛一」

らう-きく ⌐老菊 (名) 衰へたる菊。色のあせたる菊の花。朗詠「籬頭更有二蕭條物一、老菊衰蘭三兩叢」

らう-きや ⌐老茄 (名) らうか(老茄)の訛り。

らう-きやう ⌐老境 (名) 年とりたること。晚年。范成大詩「痴絕已甘投二老境一」

らう-きやう ⌐老狂 年老いて物ぐるはしきこと。老いて狂氣じみること。又、其の人。盛衰記（十八、文覺發心）「父入道老狂の餘り、便なき事をのみ振舞ひ候ひし上」

らう-きやく ⌐老脚 (名) 年よりのあし。老人の步み。楊萬里詩「老脚微破牛要ㇾ扶」

らう-ぎよ ⌐撈魚 魚を捕ること。すなどり。いさり。

らう-ぎん ⌐勞銀 (名) 勞働の賃銀。

らう-ぎん ⌐朗吟 ほがらかに詩歌などを吟ずること。鄭谷詩「惟有二朗吟償二晚景一、更無二濃醉壓二春寒一」

らうぎんききん-せつ ⌐勞銀基金說 (英 Wages fund theory. 獨 Lohnfonds-theorie) (名) 【經】ちんぎんききんせつ(賃銀基金說)に同じ。

らう-く ⌐老軀 (名) 老いたる身。老體。王安石文（除二示喬中昭文館大學士一謝表）「以二投ㇾ老之軀一、遭二難ㇾ値之運一」

らう-く ⌐勞苦 くらう(苦勞)に同じ。詩經（凱風）「有二子七人一、母氏勞苦」 史記（項羽本紀）「勞苦而功高如ㇾ此」

らう-くつ ⌐老屈 年老いてかがむこと。運歩色葉「老屈ラウクツ」

らう-くつぬぎ ⌐廊沓脫 (名) 中門より廊への上り口にある沓脫所。

らう‐くわ 浪華 浪花 （名）浪の碎けて華の如くに見ゆるもの。浪のはな。杜甫詩「霏霏雲氣重、閃閃浪花飜」

らう‐くわ 狼火 （名）のろし。とぶひ。狼烟。烽火。

らう‐くわい 老槐 （名）年ふりたる槐の樹。謠曲「老槐悲しむ聲も秋をうるほすや」

らう‐くわい 老獪 久しく物事に經驗を積みて狡猾なること。世故に慣れてずるきこと。老猾。

らう‐くわつ 老猾 前條に同じ。易林「老猾大輸、東行盜レ珠」

らう‐くん 郞君 （名）㊀年わかき男子の稱。わかとの。とのご。李商隱詩「郞君官貴施二行馬一、東閣無レ因得二再窺一」㊁妻より夫、又は情婦より情夫を呼ぶ稱。

らう‐くん 老君 （名）老人に對する尊稱。

らう‐ぐん 老軍 （名）ふるつはもの。老功のつはもの。東鑑（九、文治五年八月七日）「二品内内被レ仰二合于老軍等一」

らう‐げ 勞氣 （名）いたづき。やまひ。所勞。（細流抄）一覽、老氣。老病。（河海抄） 源（夢浮）「母の尼のらうげ仮におこりて」

らう‐けい 老兄 （名）年老いたる兄。又、年上の同輩を呼ぶ敬稱。

らう‐げつ 朗月 （名）光のほがらかなる月。澄みわたりたる月かげ。平家（三、大臣流罪）「朗月を望み浦風に嘯き」魏文帝文「白日既匿、繼以二朗月一」

らう‐げぽう 狼牙棒 （名）そでがらみ（袖搦）に同じ。

らう‐けん 老健 ㊀おいて身體のすこやかなること。蘇軾詩「要將二老健一敵二千鍾一」㊁老巧にして氣象の强きこと。ねれて勢ひのつよきこと。冷齋夜話「句法欲二老健有一英氣一」

らう‐こ 老狐 （名）年老いたる狐。ふるぎつね。金史（白撒傳）「老狐穴レ塚、特レ夜而出、何足レ介レ懷」

らう‐こ 狼顧 狼の如く危み懼れて、常に後を振り返ること。顧みること。史記（蘇秦傳）「秦雖レ欲二深入一則狼顧、恐二韓魏之議二其後一也」

らう‐こ 牢固 けんご（堅固）に同じ。易林「金梁鐵柱、十年牢固」

らう‐ご 老後 （名）年老いて後。老年になりたる時。盛衰記（廿、佐那田大場勢汰）「老後の悦びなり、我が家の繁昌なり」

らう‐ご 浪語 みだりに語ること。むだくち。

らう‐ご 朗悟 明智にしてさとりの早きこと。宋史（高宗紀）「養性朗悟」

らう‐こう 老公 （名）年老いたる貴人の敬稱。

らう‐こう 勞功 （名）こうらう（功勞）に同じ。太平記（卄）「多年の勞功ありとて、超涯不次の賞を被レ行ける間」

らう‐こう 老功 老人の年功。經驗を積みて熟練すること。老練。

らう‐ごく 牢獄 （名）ひとや。をり。牢屋。獄屋。晉書（天文志）「七星天之耳也、主二西方一主二獄事一、中星明、則天下牢獄平」

らう‐ごし 牢輿 （名）囚人を護送する輿。國姓爺後日合戰「牢輿舁かせ」

らう‐こつ 老骨 （名）年老いたる身體の骨。又、老骸。老軀。法書要錄「老骨更當二營造一」

らう‐ざ 老者 （名）らうしや（老者）に同じ。大鏡（上）「いときようある事いふ老者たちかな」

らう‐さい 老妻 （名）年老いたる妻。杜甫詩「老妻畫レ紙爲二棋局一」

らう‐さい 老歲 （名）らうねん（老年）に同じ。凱陣八島（三）「御供の中にては、一の老歲にて渡り候な」

らう‐さい 癆瘵 勞瘵 （名）勞咳の異稱。又、一種の神經病にて、戀の病の類なりと。三代男（四）「下に焦がるる思ひ火動となって癆瘵に身を苦しめ」難病記（三、勞咳）「勞咳は本名勞瘵と云ひ、唯瘵とも云ひ、或は虛勞とも云ひ、鬱症とも云ふ（中略）瘵とは、此の病にかかれば必ず死して祭らるると云ふ意なり」

らうさい‐け 癆瘵氣 （名）癆瘵の病ひ氣あること。三代男（三）「頭痛疾み・癆瘵氣の娘」

らう‐さう 老壯 （名）年よりと若きもの。老人と壯者と。後漢書（王渙傳）「男女老壯、皆賦二斂錢一」

らう‐さう 踉蹌 歩行の足つきのたしかならざること。よろめくこと。蹣跚。

らうさう‐の‐がく 老莊學 （名）老子と莊子との說を祖述する學派。即ち、虛無を天地萬物の本源とし、無爲を教義の極とするもの。

らう‐ざや 牢鞘 （名）江戸時代、牢屋の二重格子の外にある土間。德川禁令考後聚（二、牢内取計之部）「牢改め之儀、毎月四度、一牢宛囚人牢鞘江出し」

らう‐さく 勞作 骨をり働くこと。ほねをりわざ。

らう‐さん 老杉 （名）年久しく經たる杉の木。ふるき杉の立木。白居易文（廬山草堂記）「夾レ澗有二古松老杉一、大僅十八圍」

らう‐ざん 老殘 （名）老丁にて殘疾に罹かるもの。調庸を全免す。老丁殘。

らうざん‐ちやう 老殘帳 （名）大帳の枝文の一。老殘に關する事項を記入するもの。政事要略（五十七）「私案大帳枝文（中略）老殘帳」

らう‐し 羅宇師 （名）羅宇の製造を業とする人。人倫訓蒙圖彙（五）「無節竹師（らうし）、品品塗色・化彩・籐卷・齊具等あり」

らう‐し 老師 （名）としよりたる師匠。老年の先生。史記（荀卿傳）「於二齊襄王時一、荀卿最爲二老師一」

らう‐し 浪士 （名）らうにん（浪人）に同じ。唐書（王播傳）「從二家殘穨一、乃自稱二浪士一」

らう‐し 狼子 （名）狼の子。楊雄檄文「懷二狼子之性一、說二騶虞之仁一」

らうし‐やしん 狼子野心 狼の子は心山野に在りて馴らすべからず、之を養へば必ず人を害すること。害心を挾むものの譬へ。左傳（宣公四年）「狼子野心、是乃狼也、其可レ畜乎」

らう‐し 老死 年老いて死ぬること。盛衰記（廿六、入道得病）「今年は六十四に成り給ふ、老死と云ふべきには非ず」史記（貨殖傳）「至二老死一不二相往來一」

らう‐し 牢死 入牢中に死ぬること。憲教類典（五ノ十四、享保四年二月五日）「一箇月分牢死、幷病人、何人有レ之段」

らう‐し 浪死 いぬじに。徒死。通鑑（隋紀）「王薄作二無レ向二遼東一浪死歌一」（注）「浪死猶二徒死一也」

らう‐じ‐しむ 領占 （他動下二）占領して我が有となす。領有す。源（明石）「入道らうじしめたる所所」

らう‐しつ 老疾 （名）年老いたることと病氣に罹かることと。又、年老いて病氣に罹かること。戸令「凡鰥寡・孤獨・貧窮・老疾、不レ能二自存一者」

らう‐じつ 老實 事に馴れて誠實なること。老功にして着實なること。

らうし‐とりしまりやく 浪士取締役 （名）江戸幕府にて、文久二年十二月置き、浪士の取締りに任ぜしめたる役。翌年四月新徵組支配と改稱せられたり。文久紀事（六、文久二年十二月廿日）「田安殿家臣窪田治郎右衛門、浪士取締役、右被二仰付一旨、於二躑躅間一渇防守申二渡之一」

らう‐しや 老者 （名）としより。老人。らうざ。儀制令「凡春時祭田之日、集二鄉之老者一、一行二鄉飲酒禮一」孟子（盡心上）「五母雞、二母彘、無レ失二其時一、老者足三以無二失レ肉」

らう‐しや 牢舍 ㊀らうや（牢屋）に同じ。書言字考節用「牢舍（ロウシヤ）」㊁入牢すること。憲教類典（四ノ五、寬保元年四月八日）「古來より牢舍又は過怠牢杯と申し、其の罪科を決斷し牢江入れ候事」

らう‐しやう 老將 （名）年老いて經驗ある將軍。宿將。史記「問二諸老將一」漢書（高帝紀）「懷王諸老將皆曰」

らう‐しやう 勞症 （名）結核性の肺病。勞咳。肺勞。肺結核。

らう‐しやう 勞傷 心勞して身をやぶること。庭訓往來（十二月）「愁歎勞傷」

らう‐じやく 老弱 老若 （名）老年と若年と。らうにやく。太平記（廿八、漢楚合戰）「丁壯は軍旅に苦しみ、老弱は轉漕に罷（つか）る」孟子（梁惠王下）「凶年飢歲、君之民、老弱轉二乎溝壑一」

らう‐じやく 狼藉 ㊀らうぜき（狼藉）に同じ。運歩色葉「狼藉（ラウジヤク）」㊁次條の略。假名曆略註「大くわ・らうじやく・めつもん（大禍・狼藉・滅門）大禍日は大惡日也、大禍・狼藉・滅門、これを三箇の惡日といふ」鸚鵡合戰物語「大禍・滅門・狼藉・沒日は四箇の惡日」

らうじやく‐にち 狼藉日 （名）大禍日・滅門日と共に三惡日の一にて、萬事に凶なりといふ日。下文を見よ。運歩色葉「狼藉日、正・五・九子日・二・六・十卯日・三・七・十一午日・四・八・十二酉日、天火亦六凶日」假名曆略註「狼藉日は通書に是れを天獸日といふ、天火日と同一にして、三箇の惡日の一つ也、若し是れを犯し用ふれば、百事皆散失す、故に萬事に用ふべからず」

らうしや‐にん 牢舍人 （名）牢舍せられたる人。囚人。囚徒。京都御役所向大概覺書（二、牢舍人之節）「籠屋近所火事之刻、牢舍人のけ候節は」

らう‐しゆ 老手 （名）老練なる手なみ。又、老練なる人。蘇軾詩「老手王摩詰、窮交孟浩然」

らう‐しゆ 老鬚 （名）老翁の鬚。老人の鬚。朗詠「霜蓬老鬢三分白、露菊新花一半黃」

らう‐じゆ 老壽 （名）長壽なること。ながいき。長命。後漢書「致二老壽之福一」

らう‐じゆ 老樹 （名）年を經たる木。おいぎ。古木。太平記（十二）「古松垂レ枝、老樹敷レ葉、皆下化衆生の相を表す」杜甫詩「層軒皆面レ水、老樹飽經レ霜」

らう‐じゆ 老儒 （名）年老いて學識高き儒者。老成なる儒者。宿儒。太平記（廿三）「上皇を奉レ始、舊臣・老儒」韓愈文「何必附二之于古一、使二老儒致一レ爭哉」

らう‐じゆう 郞從 （名）らうどう（郞等）に同じ。保元（白河殿攻落）「一家の郞從」著聞「源の有治が郞從なりけり」

らう‐じゆく 老熟 多年の經驗をつみて、物事に熟達したること。

らう‐しよう 老松 （名）年經たる松。古松。謠曲「老松既に風絶えて、問へども松は答へず」

らう‐しよう 朗誦 らうどく（朗讀）に同じ。

らう‐しようもん 牢證文 （名）入牢の證文。法曹後鑑（牢屋鋪に付囚人取計一件）「牢證文・溜證文等之寫」

らう‐しよく 老職 （名）幕府の大老又は老中などの稱。又、大名にて家老などの稱。

らう‐しよせい 老書生 （名）年よりたる書生。年齡の高き書生。

らう‐しん 老臣 （名）㊀年老いたる臣。又、老功の臣。太平記（一）「御前に候ひける老臣、皆悲喞を含まぬは無かりけり」杜甫詩「霖雨思二賢佐一、丹墀憶二老臣一」㊁からう（家老）に同じ。

らう‐しん 老身 （名）老いたる身。としより。老軀。老體。白居易詩「唯留二一部淸商樂一、月下風前伴二老身一」

らう‐しん 狼心 （名）殘忍なる心。むごたらしき心。宋書「念二秦關之百二一、難レ遏二狼心一」

らう‐しん 老親 （名）年老いたる親。史記「老親豈有レ不三自脫二溫厚肥美一、以適二飲食行成一乎」

らう‐しん 勞神 精神を勞すること。心配。莊子（德充符）「勞二君之神與一レ形」

らう‐じん 老人 （名）年老いたる人。としより。おきな。老者。續紀（一、十一年八月丙辰）「高年老人加レ恤焉」左傳（宣公十五年）「見二老人結一レ草以亢二杜回一」

（諺）**老人の子は影なし** 年寄の子は影なしに同じ。としより（年寄）の條を見よ。

らうじん‐しやう 老人星 （名）なんきよくせい（南極星）の異名。類聚國史（七十四、延曆廿二年十一月朔日）「老人星見、臣等謹案、元命苞曰、老人星者瑞星也、見則治平主レ壽」伊呂波字類「老人星祭（ラウジンシヤウサイ）」

らうじんしやう‐さい 老人星祭 （名）老人星をまつりて福壽を祈る祭。伊呂波字類「老人星祭（ラウジンシヤウサイ）」

らうじん‐すぎ 老人杉 （名）【植】せんにんすぎ（仙人杉）の異名。

らうじん‐せい 老人星 （名）らうじんしやう（老人星）に同じ。

らう‐す 勞す （自動サ變）骨をる。いたづく。はたらく。苦勞す。易經（繫辭）「勞而不レ伐、有レ功而不レ德」

らうして‐こうなし 勞して功なし 勞無功 骨折りても功果なし。莊子（天運）「猶二推二舟於陸一、勞而無レ功」管子（形勢）「强不レ能、告不レ知、謂二之勞而無一レ功」

らう‐す 勞す （他動四）㊀ほね折らす。はたらかす。わづらはす。史記（文帝本紀）「禮官議、毋二諱以勞一レ朕」㊁ねぎらふ。なぐさむ。慰問す。禮記（曲禮）「君勞レ之則拜」

らう‐ず 領ず （他動サ變）りやうず（領）に同じ。蜻蛉日記（下）「川のあなたに、按察の大納言のらうじ給ふ所ありける」源（松風）「自らららうずる所に侍らねど、又知り傳へ給ふ人も無ければ」

らう‐すゐ 狼燧 （名）ほうくわ（烽火）に同じ。運歩色葉「狼燧（ラウスヰ）」

らう‐すゐ 老衰 年老いて身のおとろふること。太平記（卅八、太元軍）「我れ已に老衰して、其の選に不レ當」

らう‐すゐ 老悴 老いおとろふること。老いて憔悴すること。謠（東岸居士）「老悴かげ沈んで（中略）變りける身の有樣ぞ悲しき」

らうすゐ‐びやう 老衰病 （名）らうびやう（老病）に同じ。

らう‐せい 老生 （名）老いたる書生。又、老人の自稱。謠（三笑）「老生と靜かなる山居」魏志（管輅傳）「此老生之常譚」

らう‐せい 老成 ㊀おとなびたること。左思文（吳都賦）「岐嶷繼レ體、老成奕レ世」㊁經驗を積みて成熟したること。老練。老功。

らう‐せい 朗晴 ほがらかにはれたること。快晴。

らう‐せい 牢晴 天氣の好く晴れたること。

らうせい‐じん 老成人 （名）おとなびたる人。老功の人。書經（盤庚）「汝無レ侮二老成人一」詩經（大雅）「雖レ無二老成人一、尙有二典刑一」

らう‐せう 老小 （名）老と小兒と。年よりと子供と。漢書「女子及老小千餘」

らう‐せう 老少 （名）老いたるとわかきと。年よりと若きものと。明月記（正治二年十一月八日）「老少分レ方被レ合」史記（貨殖傳）「不レ擇二老少一者、奔二富厚一也」

らうせう‐ふぢやう 老少不定 老いたるも若きも命數は豫定せられざること。人命のはかなきにいふ。平家（一、祇王）「老少不定のさかひなれば、年の若きを非レ可レ顧」

らう‐ぜき 狼藉 〔狼の草を藉（し）きて臥したる跡の亂れたるさまよりいふ〕㊀亂雜なること。散亂せること。太政官式「若所レ納物有二狼藉一者、勘二責出納諸司一」朗詠「落花狼藉風狂後」史記（滑稽傳）「履舃交錯、杯盤狼藉」㊁無法なる所行。亂暴。不

法。保元（新院御所各門々固）「鳥居頭聞、狼藉尤甚」平家（一、殿上闇討）「うつほ柱より內、鈴の綱の邊に、布衣の者の候は何者ぞ、狼藉なり」

らうぜき-にん〔狼藉人〕（名）狼藉に同じ。曾我（九、十番斬）「御所中に狼藉人ありて、祐經も討たれたり」

らうぜき-もの〔狼藉者〕（名）狼藉をする者。暴行をはたらく者。亂暴もの。謡（烏帽子折）「あの狼藉者ども、一一召し捕り候へ」

らう-ぜん〔朗然〕（副）ほがらかなるさまにいふ語。晉書（嵇康傳）「朗然照レ人」

らう-ぜん〔琅然〕（副）玉の鳴る音にいふ語。琅琅。

らう-せんせい〔老先生〕（名）年よりたる先生。老師。

らう-そう（名）〔濫僧（ランソウ）の訛りと〕ゑとり（餌取）に同じ。下文を見よ。塵袋（五、乞食等と云ふに何なる詞ぞ）「濫僧中らうそうとも云ふ、乞食等の沙門の形なれども、其の行儀僧にもあらぬを濫僧と名づけて、施行ひかるるをば濫僧供と云ふ（中略）らむそうと云ふべきをらうそうと云ふ」

らう-そう〔老叟〕（名）としより。老翁。後漢書（劉昆傳）「有二五六老叟、尨眉皓髮一」

らう-そう〔老僧〕（名）年老いたる僧。源（夕顏）「老僧のあひ知りて侍るに」王維詩「老僧四五人、追二逍遙松柏一」

らう-そく〔老足〕（名）老人の歩み。老脚。謡（遊行柳）「老足なりとも、今少し急ぎ給へ」菅原傳授手習鑑（三）「又参るのも老足なれば、お邪魔ながら是れに居ろ」

らう-ぞく〔老賊〕（名）年老いたる盗賊。又、物事に馴れたるわるもの。老黠なる賊。吳志（周瑜傳）「孤與二老賊一、勢不二兩立一」

らう-そだい〔老措大〕（名）年老いたる書生。仕學大乘「四十餘年老措大」

らう-たい〔老態〕（名）年とりたる容態。李綿詩「老態忽忘絲管裡」

らう-たい〔老體〕（名）老人のからだ。年寄りの身。盛衰記（四十一、三日平氏）「我が身は老體なれば（中略）不二下向一」李夢陽詩「老體幸強貴矍健、柳吟花醉莫レ辭レ從」

らう-だい〔老臺〕（名）書翰文にて、年長者をいふ尊稱。

らう-だい〔老大〕 少壯の時を過ぎて年寄りたること。老人になりたること。杜甫詩「杜陵有二布衣一、老大意轉拙」白居易詩（琵琶行）「老大嫁作二商人婦一」

らうだい-こく〔老大國〕（名）隆盛の時代は已に過去となりて、現今は衰へたる大國。

らう-たいじん〔老大人〕（名）㊀老いたる男子の敬稱。㊁他人の老いたる父の敬稱。

らう-たう〔莨宕〕（名）【植】はしりどころ（莨宕）に同じ。

らう-たう〔潦倒〕 物事にこせつかざるさま、又おちぶれたるさまにいふ語。朗詠「昔爲二京洛聲華客一、今作二江湖潦倒翁一」嵇康文（與山巨源絶交書）「足下舊知二吾潦倒麤疎不一レ切二事情一」

らう-だう〔郎黨〕（名）らうどう（郎等）に同じ。

らう-たがる（他動四）らうたく思ふ。かはゆがる。枕（三）「子どもわらはべをらうたがりて」源（夕顏）「三位の君のらうたがり給ひて」

らう-たげ（副）らうたきやう。らうたきさま。宇津保（俊蔭）「ありさまのらうたげなりしを思ひ出でつつ」枕（三）「かまつかの花らうたげなり」

らう-だけ〔羅宇竹〕（名）らう（羅宇）に同じ。玉川砂利「らう竹とほす蘆の芽の錐」武江年表（九、嘉永三年十二月）「近年烟草のらう竹短きを好み、總たけ五寸以下なり」

らう-たさ（名）らうたきさま。らうたき度合。

らう-たし（形二）かはゆし。愛らし。いたはし。可憐なり。宇津保（俊蔭）「らうたしと思ひし子供失ひて」源（花宴）「日比になれば、具してあらんとらうたく思しやる」

らう-だめ〔牢溜〕（名）獄につながるる者の病氣にて移しおかるる所。

らう-ちく〔老竹〕（名）年經たる竹。岑參詩「老竹移時小、新花舊處飛」

らう-ちゃう〔勞帳〕（名）勞によりて官に昇るべき人の姓名を書き連ねたる帳簿。除目の時、所所より提出す。西宮記（除目）「正月下（中略）內舍人（三人被奏、延喜十五年以後內舍人勞者）文章生（三人）（中略）散位（一人）、二度掾三度介（京官任二內官一）（中略）以上勞帳勾入レ莒、任二兩三人一」江次第（四、除目）「所所勞帳（大舍人、內豎、進物所、校書殿、文章生（中略）勞帳、內舍人勞帳）」

らう-ちゃう〔牢帳〕（名）入牢者を記入する帳簿。御仕置裁許帳（一、主人を殺し致二缺落一者之類）「右之角兵衞、兩類牢帳に無レ之」

らう-ちゃう〔老丁〕（名）大寶の制、六十一歳より六十五歳まで、孝謙天皇の天平寶字二年以後、六十歳より六十四歳までの男子の、丁役に服すべきものの稱。老。類聚三代格（一、天平寶字元年）「宜下告二天下諸國一、自レ今以後以二六十一爲二老丁一、以二六十五一爲中耆老上」

らうちゃう-ざん〔老丁殘〕（名）老丁にて殘疾に罹かるもの。調庸を全免す。老殘。主計寮式（下）「老丁殘・中男殘、全免」

らうちゃう-ちゃう〔老丁帳〕（名）大帳枝文の一。老丁に關する事項を記したるもの。政事要略（五十七）「私案大帳枝文（中略）老丁帳」

らう-ぢゅう〔老中〕（名）江戸幕府の制。政務を總理し、特に諸大名及び遠國の役人、樞要の官吏其の他、城普請・知行割等の事を支配する重職。四人或ひは五人を定員とし、月番にて事を行ふ。もと年寄また奉行といひ、又奉書に連署するより加判の列ともいふ。始めは五位に過ぎざりしが、後には拾萬石以下の譜代の城主を以て之に補し、四位の侍從に任ぜらるるを例とす。執政。宿老。職掌錄「老中、當職を奉書連判また加判の列といふ」同「老中、當職四員也、或は五員」明良帶錄（四）「御老中（從四位侍從、從四位少將）」

らうぢゅう-かく〔老中格〕（名）次條に同じ。御觸紙面「本多彈正大弼殿（中略）御老中格被二仰付一候處」

らうぢゅう-なみ〔老中並〕（名）老中の定員外にありて、これに準ぜらるるもの。有司勤仕錄「享保十五戌年七月十一日、松平右京太夫輝貞、老中並被二仰付一」

らう-ぢょ〔老女〕（名）㊀おいたる婦人。謡（關寺小町）「老女の庵を結びて候が」古樂府「老女不レ嫁只生口」㊁大寶の制、六十一歳より六十五歳まで、孝謙天皇の天平寶字二年以後、六十歳より六十四歳までの婦人の稱。東大寺正倉院文書（廿六、戸籍）「戸主姑古奈、年六十三、老女」㊂武家の奧向にて、侍女の長たる職。

らう-てがた〔牢手形〕（名）江戸時代、出獄の許可證。江戸政要「牢手形之事」

らう-てつ〔老耋〕 老いぼれたること。又、其の人。吳萊詩「韋布疑老耋、鄉里惟田疇」

らう-てつ〔朗徹〕 すきとほりて見ゆること。すきとほる程清きこと。晉書（王羲之傳）「神姿朗徹、當レ爲二名士一」

らう-ど〔老奴〕（名）おいたる奴僕。又、男子を賤しみていふ語。蘇軾詩「老奴但欲レ致二村酤一、小婢爭試二三斟一」

らう-どう〔郎等〕（名）わかもの。けらい。從者。郎從。郎黨。源（玉鬘）「はかばかしく身の助けと思ふらうどうども、皆ゐて來にけり」朝野群載（二十）「郎等之中、撰二定清廉勇士一」愚昧記（文治六年正月三日）「郎等六人、雑色四人」

らう-どう〔勞働〕㊀身體を働かし動かすこと。力わざ。はたらき。ほねをり。魏志（華佗傳）「人體欲レ得二勞動一」㊁【經】心力又は體力の秩序的活動。精神的勞働・肉體的勞働・有形的勞働・無形的勞働・自由勞働・不自由勞働・獨立的勞働・雇傭的勞働・生產的勞働・不生產的勞働等あり。

らうどう-うち〔郎等打〕（名）碁石にてする遊戯の一種。異制庭訓往來「郎等打」

らうどう-かはせ〔勞働爲替〕（名）【商】勞働一時間を單位として手形を發行し、其の手形には單に勞働時間のみを記入し、これによりて賣買・取引を決濟して貨幣を用ひざるもの。此の爲替に使用する手形を勞働爲替手形といふ。

らうどう-かはせてがた〔勞働爲替手形〕（名）【商】前條を見よ。

らうどう-くみあひ〔勞働組合〕（名）（英 Trade union）同種若しくは類似の事業に從事する勞働者が、自己の利益を保護・增進するを目的として組織せる組合。職工組合。

らうどう-くわいぎしょ〔勞働會議所〕（名）一定の區域內に於ける勞働者一般の利益を圖り、兼ねて勞働者に關する政府の諮問に應答する等を目的とする會議所。現今我が國にては未だ此の規定なし。

らうどう-げんか〔勞働原價〕（名）【商】雇主が勞働の報酬として勞働者に支拂ふ價格。

らうどう-さいばんしょ〔勞働裁判所〕（名）企業家と勞働者との間に起こる諸種の葛藤訴訟を審査・判決するために設くる裁判所。現今我が國にては未だ此の設けなし。

らうどう-しゃ〔勞働者〕（名）勞働に從事する人。

らうどうしゃ-うけおひげふ〔勞働者請負業〕（名）他人のために勞働者を供給するを目的とする營業。明治三十二年七月臺灣總督府令第七十四號清國勞働者取締規則（第十一條）「勞働者請負業」

らうどうしゃ-うけおひにん〔勞働者請負人〕（名）勞働者請負業を營む人。明治三十二年七月臺灣總督府令第七十四號清國勞働者取締規則「勞働者請負人」

らうどう-しょ〔勞働所〕（英 Work-house）（名）救貧院の一。勞働に堪ふる貧者を收容して、或る種類の勞働に從事せしむるもの。

らうどう-せいくわつ〔勞働生活〕（名）勞働によりて生活すること。力食。

らうどう-ひ〔勞働費〕（名）【經】貨物の生產に要する勞働の見積り價格。

らうどう-ほけん〔勞働保險〕（獨 Arbeiterversicherung）（名）【商】生命保險の一。勞働者の疾病・負傷・老癈及び其の他勞働より生ずる總ての危害を保險するもの。

らうどう-もんだい〔勞働問題〕（名）【經】勞働者と資本家及び企業家との間に起こる社會問題。

らうどう-をとこ〔郎等男〕（名）郎等なる男。十訓（十一）「郎等男の走り來て」

らう-どく〔朗讀〕 聲高くよみあぐること。李商隱文（與陶進士書）「有下默而視レ之、不レ暇二朗讀一者上」

らうどく-えんぜつ〔朗讀演說〕（名）草稿を控へて讀みながらする演說。

らうない-あらため〔牢內改〕（名）江戸時代、月に四五回、牢屋奉行などが牢內を巡視して、禁制の品若しくは破損所等の有無を檢すること。牢獄秘錄（牢內改）「五六日に一度づつ牢內改有レ之、此の節外ざやの內江石出帶刀・幷びに見廻り同心・牢屋同心・鎰役・平當番五六人扣へ居りて、科人不レ殘外ざやへ追出し、牢の中江は平當番三四人・張番六七人はいりて、牢內を改むる也」

らうない-なぬし〔牢內名主〕（名）らうなぬし（牢名主）に同じ。牢獄秘錄（大牢・武間牢入年寄）「牢內名主は罪之輕重に依らずして、名主役申付け候事也」

らうない-やくにん〔牢內役人〕（名）江戸時代、牢內の囚人中にて、牢內の雜事を行ふものの總稱。下文を見よ。牢獄秘錄（大牢・武間牢入年寄）「牢內役人と云ふは、名主・壹番役・貳番役・すみの隱居（是れは元入牢して名主も致し候者、又又入牢致し候節すみの隱居となる也）・つめの隱居（つめとは、牢內に而雪隱の事を云ふ、雪隱之邊に居る也）・牢之隱居と云ふも有り、次に三番役・四番役・五番役（此の外に頭（アタマ）かぞへ役とて、牢內の人數を改め候、何十何人と云ふ也、又朝夕之食物をつみうけ渡す役あるなり）是迄を牢內之役人と云也」

らう-なぬし〔牢名主〕（名）江戸時代、在牢の罪人中より選び、囚人の長として牢內の雜事を取り扱はしめたるもの。御川禁令考後聚（三）「牢內法度書之事（中略）牢名主人數相增し、以來在牢日順を以て、古きものを順順可二申付一候」

らう-なふ〔老衲〕（名）年老いたる僧。老僧。戴叔倫詩「老衲供二茶盌一、斜陽送二客舟一」

らう-に〔老耳〕（名）老人の耳。謡（關寺小町）「諸行無常と聞くなれども、老耳には益もなし」

らう-に〔老尼〕（名）老いたる尼。盛衰記（四十八、女院大原入御）「色黑うして疲れ衰へたる老尼」

らう-にゃく〔老若〕（名）老人と若者と。らうじゃく。老幼。運歩色葉「老若（ラウニャク）」謡（朝顏）「老若男女、貴賤都鄙」

らう-にん〔浪人〕〔牢人〕（名）㊀鄉土を離れて他所に漂浪する者。類聚三代格（七、大政官符、應レ檢二出浮浪人一送二附本貫一事）「宜下符二兩國一、所レ有浪人、尋二其本郡一、差レ使勒レ狀依レ貫送付上」㊁特に、主家を去りて秩祿を失ひたる武士。浪士。盛衰記（二十七、信濃橫田川原軍）「昔は信濃國の住人、今は牢人笠原平五頼直と云者也」康富記（寶德三年八月十九日）「被官人・牢人等多彼方並山名方被二隱置一」㊂一定の勤め先のなきもの。一定の職業なきもの。柳宗元文（李赤傳）「李赤江湖閒浪人也」

らうにん-あらため〔浪人改〕（名）浪人を調査すること。憲教類典（五、廿二、承應元年）「牢人改之覺」

らうにん-いしゃ〔浪人醫者〕（名）浪人にて醫を業とするもの。

らうにん-がわき〔浪人乾〕（名）浪人したるものの、多量に食すること。（俚言集覽）非常に缺乏を感じて、物を欲し求むること。

らうにん-さむらひ〔浪人侍〕（名）浪人なる士。嫗山姥（二）「浪人侍と口論し」

らうにん-しゅう〔浪人衆〕（名）本領を離れて他國に仕ふるものの稱。鈴錄（二）「浪人衆と云ふは、本領を離れて他國に仕ふる者を云ふ、當時無祿人をいふ類にはあらず」

らうにん-ずまひ〔浪人住〕（名）浪人となりて住ひ居ること。川中島合戰（三）「信濃の國に浪人住まひ」

らうにん-せんぎ〔浪人詮議〕（名）浪人の身上につきて取り調ぶること。傾城島原蛙合戰（三）「浪人詮議の在京の序で、禁中非常の守護仕れ」

らうにん-ひがみ〔浪人僻〕（名）浪人となりたるため心の僻むこと。風俗文選（嘲辭）「身は雲水の便りなき、浪人ひがみとぞおぼえける」

らうにん-ぶん〔浪人分〕（名）浪人の身分。浪人の分際。武家義理物語（三）「磯貝藤介といひて、是れも牢人分なり」

らうにん-もの〔浪人者〕（名）らうにん（浪人）に同じ。二代男（五）「浪人者、長山に馴れ初め」

らうにん-やしき〔浪人屋敷〕（名）浪人の住む屋敷。若風俗（三）「牢人屋敷へ忍び來て」

らう-ぬけ〔牢脫〕（名）牢を脫けて逃るること。らうやぶり。脫監。御定書百箇條「牢拔、手鎖外し、御構ひ之地江立歸り候もの御仕置之事」

らう-ねん〔老年〕（名）年老いたること。年寄りたること。朗詠「唯將二老年淚一、一灑二故人文一」晉書（何曾傳）「嘗以二老年一屢乞レ遜レ位」

らう-のう〔老農〕（名）久しく農事に從事して經驗を積みたる農夫。年老いて實際の知識に富める百姓。論語（子路）「樊遲請レ學レ稼、子曰、吾不レ如二老農一」

らう-ば〔老馬〕（名）おいたる馬。詩

經小雅「老馬反爲ㇾ駒、不ㇾ顧二其後一」

らうは の ち〔下文の管仲の故事より出づ〕 老馬智。物には各特長ある譬へ。韓非子說林上「管仲隰朋從二於桓公一而伐二孤竹一、春往冬反、迷惑失ㇾ道、管仲曰、老馬之智可ㇾ用也、乃放二老馬一而隨ㇾ之、遂得ㇾ道」

(諺)老馬道を知る 前條に同じ。

らうば〔老婆〕(名) 老いたる女。老嫗。おうな。ばば。盛衰記四十四、神寶劍、三「老公・老婆手を合せて悅ぶ」 寒山詩「東家一老婆、富來三五年」

らうはい〔老輩〕(名) 年よりたるともがら。老人ども。

らうはい〔老憊〕 年老いてつかるること。年寄りて身體の衰ふること。唐書陽城傳「城封二還詔一、稱二多病老憊、不ㇾ堪二奔奏一」

らうはい〔老廢〕 老いて役に立たざること。老朽。

らうばい〔老梅〕(名) ㊀年を經たる梅の木。㊁香の名。香古くあつく、甘く且つ酸く、位ありて風流なる匂ひなり。伽羅なりといひ、或ひは蘇門多羅なりと云ふ、二說あり。（香名祕錄）

らうばい〔狼狽〕〔らう(狼)は前足長く後足短き獸、ばい(狽)は狼の類にて、前足短く後足長し、二者相待ちて立ち、相離るれば進退するを得ずといふより出づ〕 あわてて措置を失ふこと。うろたふること。あわて騷ぐこと。荀悅漢紀論「周勃狼狽失ㇾ據」

らうはい-ほけん〔老廢保險〕(名) 生命保險の一。老年に達したるか、又は勞働の能力減少したる場合に、一定の金額を支拂ふことを約するもの。

らうばう〔老蚌〕(名) 老いたるどぶがひ。

(諺)老蚌珠を生む 鳶が鷹を生むに同じ。とび(鳶)の條を見よ。三輔決錄「孔融見二韋元將・仲將一、與二其父書一曰、不ㇾ意雙珠生二于老蚌一」

らうばう〔老耄〕 らうまう(老耄)に同じ。周禮秋官司刺「三赦之法、壹赦曰幼弱、再赦曰老耄、三赦曰惷愚」

らうはく〔老柏〕(名) 年經たる柏(かしは)。杜甫詩「孔明廟前有二老柏一、柯如二青銅一根如ㇾ石」

らうば-しん〔老婆心〕(名) 年老いたる女の、度を過ごして心添へをすること。くだくだしく世話をやくこと。傳燈錄「問學人根思遲廻、乞曲運二慈悲一開二一線道一、師曰這箇是老婆心」

らうばらひ〔牢拂〕(名) 牢屋の罪人を悉く解放すること。一代男四「御法事に付き、諸國の牢拂ひ」

らうばん〔牢番〕(名) 牢屋の番。監獄の監守。又、其の人。南撰要集（牢內掟書）「牢番一日一夜づつ、無二懈怠一相勤め可ㇾ申候事」 大概順（御目見以下勤役）「甲府牢番」

らうばん-どうしん〔牢番同心〕(名) らうやどうしん(牢屋同心)に同じ。市尹祕錄一（牢番同心役施行）「牢番同心貳拾俵貳人扶持宛、五十八人」

らうひ〔老婢〕(名) 年老いたる下女。晉書（顧愷之傳）「何至ㇾ作二老婢聲一」

らうひ〔勞費〕(名) 勞力と費用と。明治十八年六月內務省達甲二十一號「如何なる勞費あるも其償を下付することなかるへし」 漢書溝洫志「繕二完故堤一、增ㇾ卑倍ㇾ薄、勞費無ㇾ已、數逢二其害一、此最下策也」

らうひ〔浪費〕 無益に費やすこと。むだづかひ。浪(みだり)に金錢を費消すること。楊萬里詩「賜金眞浪費、喚取從二甘泉一」

らうびく〔老比丘〕(名) 老いたる僧。老僧。醒睡笑三「老比丘、うつけたる仲間に向かひ」

らうひ-しゃ〔浪費者〕(名) 浪費する人。浪費の性癖ある人。民法第十一條「浪費者は準禁治產者として之に保佐人を附することを得」

らうびつ〔牢櫃〕(名) 牢屋の櫃の飯を食ふこととなるべし。冥途飛脚中「詮議に逢うて牢びつの、繩かかるのと云ふ恥ぢ」

らうびやう〔老病〕(名) 老衰より起こる病。百合若大臣野守鏡二「老病甚だ重し」 禮記（曾子問）「老病不ㇾ止二酒肉一」

らうふ〔老父〕(名) 年老いたる父。おきな。又、其の謙稱。醒睡笑三「老父名代に總領を遣はす」 史記高祖本紀「有二一老父一過請ㇾ飮」

らうふ〔老夫〕(名) 年よりたる男。おやぢ。又、其の謙稱。易經上經「老夫得二其女妻一」

らうふ〔老婦〕(名) 年老いたる女。又、其の謙稱。老婆。史記趙世家「老婦恃ㇾ輦而行」 杜甫詩「老婦出ㇾ門看」

らうぶぎやう〔牢奉行〕(名) らうやぶぎやう(牢屋奉行)に同じ。

らうぶち〔牢扶持〕(名) 囚徒に與ふる食物。公裁祕錄四「牢扶持、甕味噌薪賄諸入用、牢內衣類藥代等、其村村入用に相立」

らうぶつ〔老物〕(名) ふるくさきもの。すたりもの。老朽。嘲りていふ語。晉書（宣穆張皇后傳）「后欲二自殺一、帝驚謝、乃止、曰、老物不ㇾ足ㇾ惜、慮ㇾ困二我好兒一耳」

らうぶつ〔老佛〕(名) 老子と釋迦と。道教と佛教と。

らうへい〔老兵〕(名) ㊀年とりたる兵士。世說「失二一老兵一、得二一老兵一」 ㊁軍事に經驗ある兵士。

らうへい〔勞兵〕 兵士に骨をらすこと。又、つかれたる兵。疲兵。太平記卅四、新將軍南方進發「野軍に敵を疲らかして、雌雄を勞兵の弊(つひえ)に決すべし」

らうべう〔廊廟〕(名) おほやけの政務を執る御殿。朝政を執る處。廟堂。史記貨殖列傳「賢人深謀二於廊廟一」

らうべう の うつは 廊廟器 廊廟に立ちて、天下の政事を執るほどの器量。宰相となるべき器量。陳書杜之偉傳「張纘深知ㇾ之、以爲二廊廟器一也」

らうほ〔老舖〕(名) 數世續きたる商家。しにせ。

らうほ〔老圃〕(名) 多年田圃の耕作に從事して、農事に老練なるもの。老農。論語子路「請ㇾ學ㇾ爲ㇾ圃、曰、吾不ㇾ如二老圃一」

らうぼ〔老母〕(名) 年寄りたる母。狂言生捕鈴木「老母を一人もって候が」 戰國策齊「孟嘗君問、馮公有ㇾ親乎、對曰、有二老母一」

らうぼく〔老木〕(名) 年ふりたる木。古木。老樹。鮑溶詩「老木寒更瘦」

らうぼく〔老僕〕(名) 年老いたるしもべ。史記（[illegible]）「老僕雖ㇾ棄、將軍雖ㇾ貴、寧可二以ㇾ勢奪一乎」

らうまい〔粮米〕(名) かて。糧米。飯米。著聞三「齋持の粮米・白米七升也」

らうまい-びつ〔粮米櫃〕(名) こめびつ(米櫃)をいふ。肥前國仙臺の方言。（物類稱呼）

らうまう〔老耄〕〔まう(耄)は八十・九十の老人の稱〕 老いぼれたること。らうばう。老耄。盛衰記六、小松殿敎訓父「老耄し給ひて、あらぬ振舞ひありとも」 同四十二、金仙寺觀音講「老耄の親祖父が杖に懸かるをも不ㇾ助」

らうむ〔勞務〕(名) 勞働の事務。民法第六百二十三條「雇傭は當事者の一方か相手方に對して勞務に服することを約し」

らうむ-うけおひげふ〔勞務請負業〕(名) らうどうしやうけおひげふ(勞働者請負業)に同じ。

らうむ-かぶ〔勞務株〕(名)【商】勞務を以て出資の目的としたる株式。我が商法は此の種の株式を認めず。

らうむ-しゃ〔勞務者〕(名) 勞務に從事する人。民法第六百二十四條「勞務者は其約したる勞務を終りたる後」

らうむしゃ〔老武者〕(名) おいむしゃ(老武者)に同じ。謠曲實盛「鬢鬚白き老武者」 狂言文藏「刀中の老武者ならば、口にくはへて拔くべきが」

らうむ-しゅっし〔勞務出資〕(名)【法】資本出資・信用出資に對して、勞務を以て會社又は組合の出資の目的とすること。

らうむしゅっし-しゃゐん〔勞務出資社員〕(名)【商】勞務出資の社員。

らうもつ〔粮物〕(名) 糧食。かて。糧米。糧。盛衰記十八、文覺流罪「國の土產、道の粮物にも所望し給へかし」 曾我五、淺間の御狩「らうもつ少し贈られけり」

らうもん〔牢問〕 江戶時代、囚人を訊問する一種の方法。始めは囚人を吟味所に呼び出だして口問をなし、服罪せざれば太繩にて面縛し、兩手を背上へ押上げしめて棒にて毆打し、猶服せざれば石抱(いしだき)などをせしめて白狀せしむるもの。法曹後鑑「牢問致し方は囚人江再應利解申し聞け相陳じ候得者、痛め可ㇾ申旨申威し候上、後ろ手に縛り申し候、其の上にも相陳じ候得者、帶尻にて兩肩を敲き申し候」

らうもん〔勞問〕 ねぎらひとふこと。いたはりたづぬること。後漢書竇融傳「前至二襄闕所一ㇾ未ㇾ及二勞問一」

らうや〔牢屋〕(名) らう(牢)に同じ。憲敎類典四、廿、元祿元年六月十九日「牢配多く候間、牢屋風吹きぬき候樣、所所格子可二申付一事」 書言字考節用「牢屋（ラウヤ）」

らうや〔羅宇屋〕(名) 羅宇(らう)のすげかへを業とする人。

らうや〔老爺〕(名) としより。おやぢ。老翁。

らうや-がかり〔牢屋掛〕(名) らうやくにん(牢役人)に同じ。

らうやく〔良藥〕(名) りやうやく(良藥)に同じ。御伽草紙さざれいし「らうやく嘗め給ふに」

(諺)良(らう)藥口に苦し 良藥口に苦しに同じ。りやうやく(良藥)の條を見よ。平家十一、腰越「らうやく口ににがし、忠言耳に逆ふ」

らうやくにん〔牢役人〕(名) 牢を守る役人。獄吏。

らうや-げなん〔牢屋下男〕(名) 牢屋奉行の屬僚。罪人の飮食、牢內の見張りなどに從事するもの。牢獄祕錄「牢屋下男張番といふ」 吏徵下「牢屋下男三十八人」

らうやしき〔牢屋敷〕(名) 牢屋を構へたる一區域の土地。牢屋の構內。御定書百箇條（御仕置仕形）「無宿ものは牢屋敷門前にて拂ひ遣す」

らうや-どうしん〔牢屋同心〕(名) 牢屋奉行の屬僚たる同心。罪人の取扱ひに從事するもの。牢番同心。吏徵下「牢屋同心五十八人、貳拾俵・貳人扶持高、御抱場」

らうや-ばん〔牢屋番〕(名) らうばん(牢番)に同じ。

らうや-ぶぎやう〔牢屋奉行〕(名) 江戶時代、町奉行の支配の下に、牢屋の事を總べ掌る職。囚獄。明良帶錄五「囚獄（三百俵、高同心五十八人、町支）俗に牢屋奉行といふ、都而罪人を取扱ふ事を司る」

らうやぶり〔牢破〕(名) 囚人の、牢を破りて脫走すること。又、其の人。らうぬけ。破獄。脫監。京都御役所向大概覺書三「牢破り御仕置の儀に付御書付」

らうゆう〔老雄〕(名) 年老いたる英雄。

らうらい〔老來〕 年よりて以來。老年になりてより此の方。陸游詩「老來舊學要二耘鋤一」

らうらう〔浪浪 牢浪〕 るらう(流浪)に同じ。梅松論「末葉等、皆皆牢浪仕り候うて」

らうらう(副) つかれたるさまにいふ語。傾城反魂香中「らうらうとつかれ侘びたる如くなり」

らうらう〔朗朗〕(副) ほがらかなるさま、あざやかなるさまにいふ語。世說容止「時人目二夏侯太初一、朗朗如二日月之入一ㇾ懷」 韓愈詩「朗朗鬧二街鼓一」

らうらう〔琅琅〕(副) らうぜん(琅然)に同じ。

らうらう〔老老〕(副) いたく老いたるさまにいふ語。盛衰記卅一（[illegible]）「景家が母、老老として庭に杖つき走り出で」

らうらうじ(形二) ㊀物に功者なり。枕七「かたくなにはあらで、さやうの事にらうらうしかりけるが」 源須磨「何事もらうらうしう物し給ふを」 ㊁けだかく愛らし。上品に美し。宇津保藏開下「顏かたち滑うなれば、あてにらうらうしき人といへど」 枕三「郭公（中略）夜深く打ち出でたる聲のらうらうしく愛敬づきたる」 源宿木「まみいとはづかしげにらうらうしう」

らうらうじげ(副) らうらうしきさま。らうらうしさう。

らうらうじさ(名) らうらうしきさま。らうらうしき度合。

らうらく〔牢落〕 まばらなるさま、又落魄したるさまにいふ語。司馬相如文上林賦「牢落陸離」 陸機文賦「心牢落而無ㇾ偶」

らうらん〔老懶〕 年老いて物うきこと。韓愈詩「老懶無二鬪心一、久不ㇾ事二鉛槧一」

らうり〔老吏〕(名) 年よりたる役人。又、老練なる官吏。後漢書光武紀「老吏或垂ㇾ涕曰、不ㇾ圖今日復見二漢官威儀一」

らうりょう〔老龍〕(名) 年へたる龍。老いたるたつ。謠曲玉井「宮主（中略）姿は老龍の雲に蟠まり、庬背杖にすがり」

らうりょく〔勞力〕(名) 生產のために用ひらるる人類の體力又は智力の活動。ほねをり。はたらき。

らうりょく-うけおひげふ〔勞力請負業〕(名) らうどうしやうけおひげふ(勞働者請負業)に同じ。明治二十九年三月法律第三十三號營業稅法第一條第十五號「勞力請負業」

らうりょく-しゃ〔勞力者〕(名) 勞力をなす人。民法第百七十四條第二號「勞力者及び藝人の賃金」 孟子滕文公上「勞ㇾ心者治ㇾ人、勞ㇾ力者治二於人一」

らうりょくてき-きかい〔勞力的機械〕(名) 織物機械・紡績機械などの如く、勞力者の勞力に代はる機械。

らうるゐ〔老淚〕(名) 年寄りてもろく出づる淚。おいのなみだ。白居易詩「寒波與二老淚一、此地共潺湲」

らうるゐ〔老羸〕 年おいて弱り衰ふること。老衰。孟子公孫丑下「老羸轉二於溝壑一、壯者散而之二四方一者幾千人」

らうれい〔老齡〕(名) 老いたるよはひ。老年。

らうれい〔狼戾〕 ㊀狼の性の如く貪欲にして、理に戾(もと)りねぢけたること。盛衰記十九、佐藤兵衛入道「狼戾返逆之徒、傳二首於京都一、天下遂に平定、海內永く一統せり」 戰國策燕「張儀曰、趙王狼戾無ㇾ親」 ㊁亂れ散ること。狼藉。孟子滕文公上「樂歲、粒米狼戾」

らうれう〔粮料〕(名) かて。糧米。食料。平家五、文覺被流「土產・粮料如きの物をも乞ひ給へかし」 同十一、腰越「金商人の所從になり、粮料背負うて奧州の方へ落ちまどひし、其の小冠者の事か」

らうれん〔老練〕 久しく經驗を積みて、物事に熟練せること。老功。

らうれん-か〔老練家〕(名) 老練なる人。

らうろう〔牢籠〕 ㊀一纏めにすること。纏めとること。淮南子本經訓「牢二籠天地一」 ㊁籠絡すること。唐玄宗詩「英髦既包括、豪傑自牢籠」 ㊂獄中に囚はれをること。おしこめおくこと。幽囚。㊃くるしむこと。困迫すること。又、驚ききさわぐこと。源若菜下「胸つぶれて、かかる折りのらうろうならずば、え參るまじく、けはひ恥かしく思ふも」 平家四、山門牒狀「佛法の衰微、王法の牢籠、將に此の時に當たれり」 盛衰記卅四、東國兵馬沙汰「義仲都にて狼藉不ㇾ斜、人民牢籠して安き事なし」

らうろせらすす(名)【植】薔薇科、櫻屬の常綠灌木。高さ凡そ十二尺に達す。葉は質厚く光澤を有し、楕圓形にて緣邊に鋸齒を具ふ。花は小形、總狀花序に排列す。地中海沿岸に自生す。葉を蒸溜してらうろせらすす水を採りて藥用に供す。

らうをう〔老翁〕(名) 年寄りたる男。おきな。朗詠「老翁年晚鬢相催」 盛衰記四、山王權現「（中略）俗形老翁の體にて、大比叡大明神と顯れ給へり」 張說詩「誰念

三千里、江湖一老翁」

らうをく 老屋 (名) 年を經たる家。ふるや。趙抃詩「雨久藏書蠹、風高老屋斜」

らうをん 老媼 (名) らうば(老婆)に同じ。溫庭筠詩「老媼寶二藥苙一、恩儒輸二通租一」

らえんでる 剌賢垤爾 (名) 【植】唇形科、剌賢垤爾屬の常綠小灌木。葉は狹披針形を呈し、青紫色の小唇形花を穗狀に排列す。地中海沿岸の原產。花を蒸溜して得たるらゐんでる油は强き芳香を有し、藥用又は香水料に供す。

らお (名) らう(羅宇)に同じ。

らおり 羅織 (名) 薄く織りたる絹布。令義解（職員令）「羅者綺之屬、織有二邪文一者也」

らかい 螺階 (名) 螺旋形の階段。

らかい 羅蓋 (名) うすものにて張りたるきぬがさ。竹取「飛ぶ車一つ具したり、らかいさしたり」

らかん 羅漢 (名) 〔梵 Arakan 譯して殺賊、煩惱の賊を殺す義〕 佛語。一切の煩惱を斷ち、永く涅槃に入り、人天の供養を受くべき小乘の極果の地位。阿羅漢。榮華（鳥邊野）「五百の羅漢、くれなゐの涙を流しき」

らかん 臘乾 (名) 〔臘乾の字の廣東音〕 鹽・硝石・砂糖等を混じたる水を煮たてて冷やしたる中に、豚の股の肉を漬けおき、取り出だし、水に漬して鹽分を去り、火烟に燻べたるもの。

らかんくわ 羅漢果 (名) 佛語。羅漢の證果。醒睡笑（五）「說レ法得二羅漢果一」

らかんしょう 羅漢松 (名) 【植】まき(羅漢松)に同じ。

らかんだい 羅漢臺 (名) 劇場の語。舞臺の後の高き見物席。（劇場新話）

らかんはく 羅漢柏 (名) 【植】あすなろ(羅漢柏)の異名。

らかんまき 羅漢槇 (名) 【植】㊀かうやまき(金松)の異名。㊁次條に同じ。

らかんまつ 羅漢松 (名) 【植】まき(羅漢松)の異名。

らかんまひ 羅漢舞 (名) 宴席にて、羅漢のまねをして囃し舞ふこととなるべし。矢の根鍛冶後集「釋迦の堂建てる木やりは羅漢舞」

らき 邏騎 (名) ものみの騎兵。史記（匈奴）「候騎至二雍甘泉一（註）候、邏騎」

らき 羅綺 (名) 羅(うすもの)と綺(あやぎぬ)と。綺羅。朗詠「羅綺之爲二重衣一、妬レ無レ情於機婦一」 太平記（廿、内侍）「羅綺にだも堪へざる貌は、春の風一片の花を吹き殘すかと疑はる」 魏志（夏侯尚）「皆得レ服二綾錦羅綺紈素金銀飾鏤之物一」

らぎやう 良行 (名) 五十音圖の第九の行の名。即ち、ら・り・る・れ・ろ。

らぎやうきゅう 羅形弓 (名) 八盤弓の一。白木の弓に籐を卷きたるもの。枕邊に置きて、妖魔を射るに用ふと。（武用辨略）

らぎやうへんかく 良行變格 (名) 【文法】不規則動詞の一。即ち、在り・居り・侍り・いますかりの如く、ら・り・り・る・れ・れと活用するもの。

らぎり 羅切 (名) 陰莖を斷ること。和漢三才圖會（人倫）「閹人（俗云、羅切）」

らく 洛 (名) みやこ。京都。諸藝太平記（三）「洛へ登り、相國寺の妙壽院に居ること四年」

らく 落 (名) らくだい(落第)の略。「及・落の判定」

らく 酪 (名) 牛・羊等の乳を製煉したるもの。みるく。にゅうのかゆ。美年岡白牛醫考序「獸乳作レ酪、牛羊馬駝、皆可レ食」 涅槃經（十）「譬如レ乳、綠覺如レ酪」

らく 樂 ㊀身又は心の安くして樂しきこと。やさしきこと。容易。「樂な仕事」 ㊁たやすきこと。大藏狂言（叔母酒）「一段と樂になった」 書經（大禹謨）「罔レ遊二于逸一、罔レ淫二于樂一」 ㊂らくやき(樂燒)の略。㊃せんしうらく(千秋樂)の略。

(諺)樂あれば苦あり　樂の後には苦痛來たる。苦樂の相伴ふをいふ。榮華（玉の臺）「樂ありて苦はありとのみ知りたりつるを」

(諺)樂は苦の種、苦は樂の種　苦樂の相伴ふこと。

(諺)樂は身の毒　安樂は却って身のために害となること。

らくあそび 樂遊 (名) たのしみあそぶこと、安樂に遊ぶこと。一代男（七）「末社樂遊び」

らくい 樂易 心の樂しく平かなること。唐書（李紳）「紓性樂易、寡レ接二後進一」

らくいち 樂市 (名) 昔時、市場の稅を徵收せずして、賣買するを得しめたる市ならんと。（牧事類苑）江州八幡古文書（安土山下町中定）「當所事、爲二樂市一被二仰付一候上者、諸座諸役諸公事等、悉免許事」

らくいん 烙印 (名) やきいん(燒印)に同じ。類聚名物考（船蔵二、船の刻印）「船に刻印うち並びに烙印する事」 好古日錄（古升）「古升に宣字烙印の者あり」

らくいん 落胤 (名) おとしだね。伊呂波字類「落胤（ラクイン）」

らくいんきよ 樂隱居 (名) 安樂に世を送る隱居。家計を子に讓りて、豐かに暮らす隱居。櫻陰比事（二）「萬事息子に渡して樂隱居」

らくいんばら 落胤腹 (名) 身分卑き人の腹に生まれたること。おとしだね。盛衰記（卅二、惟仁位）「一の宮は落胤腹、名虎が御女なり」 下學集（下）「落胤腹」

らくえい 落英 (名) 落ちたる花ぶさ。落花。楚辭（離騷）「朝飲二木蘭之墜露一兮、夕餐二秋菊之落英一」

らくえい 樂榮 (名) たのしみ榮ゆること。安樂と榮華と。盛衰記（八、讃岐院）「官位は春の夜見はてぬ夢と思ひ成し、樂榮は秋の夜の月西へと准へて」

らくえき 絡繹 人馬などの連なり續きて絕えざること。朗詠「行人征馬絡二繹於翠簾之下一」 王延壽文（魯靈光殿賦）「縱橫絡繹、各有レ所レ脇」

らくえふ 落葉 ㊀おちば(落葉)に同じ。太平記（四、呉越軍）「無二拂人一閑庭に落葉滿ちて蕭蕭たり」 陶潛詩「寒風拂二枯條一、落葉掩二長陌一」 ㊁薰物の名。沈香・丁子香・甲香・麝香・香附子・薰陸香・白檀香・蘇合香を煉り合はせて作る。（薰集類抄）

らくえふじゆ 落葉樹 (名) 【植】らくえふぼく(落葉木)に同じ。

らくえふしよう 落葉松 (名) 【植】ふじまつ(落葉松)の異名。

らくえふぼく 落葉木 (名) 【植】冬期に至りて落葉する木。櫟・梅の類。

らくか 落霞 (名) 夕方に低くたなびく霞。王勃文（滕王閣序）「落霞與二孤鶩一齊飛、秋水共二長天一一色」

らくか 落下 おちくだること。おつること。

らくかのていりつ 落下定律 【理】落體の速度・加速度及び落下する距離等と時間との關係を規定せるもの。今、重力の加速度を一秒に就き九八〇糎とし、之を g を以て表はすに、落下に要する時間を t 秒とし、距離を s 糎とすれば、以上の關係は次の如し。(一)落體の得る加速度は物質の如何に關せず一定にして、毎秒 g 糎なり。(二)落體の速度は時間に比例し、落下してより第 t 秒の終りに於ける速度は gt 糎毎秒なり。(三)落下の t 秒間に落下する距離は時間の自乘に比例し、次の式にて表はさる、即ち $s=\frac{1}{2}gt^2$ なり。(四)落體が毎一秒間に落下する距離は一、三、五、七、九……等の割合を以て增加し、第 t 秒目の一秒間に落下する距離を d とすれば、次の關係式にて示さる。即ち $d=\frac{1}{2}g(2t-1)$ なり。

らくがき 落書 (名) 〔落書(らくしよ)の轉〕 門又は壁などに、いたづら書きをすること。又、其の書畫。憲教類典（六ノ三、元和八年十一月十五日）「樂書之事、おとなは死罪、少人は流罪」 二代男（三）「なまぐさ寺と落書」

らくがみ 樂髮 (名) 安樂なれば毛髮の伸び方早しといふこと。らくげ。

(諺)樂髮・苦爪　苦爪樂毛に同じ。くづめ(苦爪)の條を見よ。

らくがん 落雁 (名) ㊀列をなして地に下る雁。謠曲（知章）「平沙に子を生みて落雁の、はかなや親は隱すとすれど」 狂言見物左（雁門）「平沙の落雁」 江總詩「翔鷗方怯レ凍、落雁不レ勝レ彈」 ㊁乾菓子の一種。炒粉(いりこ)に砂糖を加へ、型に入れて種種の形に作れるもの。書言字考節用（六）「落雁（ラクガン、食菓）」

らくき 落暉 (名) 入り日。夕日。落日。夕暉。李商隱詩「含レ烟惹レ霧毎依依、萬緒千條拂二落暉一」

らくき 落葵 (名) 【植】つるなさき(落葵)に同じ。

らくきやう 樂境 (名) 樂しき境涯。樂地。樂土。

らくきやう 樂鄉 (名) 樂しき鄉土。樂土。蘇軾詩「嗟哉此樂鄉」

らくきよ 落居 ㊀事の定まること。事のきまりのつくこと。おちつくこと。落著。十訓抄（上）「事落居の後、有國を召して」 明月記（天福二年八月廿八日）「腹病中路服二高郎香一聊落居」 ㊁裁判事件の落著。裁判の決定。

らくく 落句 (名) ㊀漢詩の結びの句。律詩の最後の二句。十訓抄（中）「古調四韻中の落句なり」 作文大概（第四、句名）「凡句者不レ論二五言・七言一、其首一韻謂二之發句一、其次一韻謂二之胸句一、其次一韻謂二之腰句一、其尾一韻謂二之落句一」 滄浪詩話「有二發端一、有二落句一、有二結句一也」 ㊁轉じて、終りの文句。おち。浮世床（上）「落句にをかしみを取る故、落話家といへばよいに」

らくくわ 落花 (名) 散り落つる花。朗詠「唯別二殘鶯與二落花一」 太平記（二、俊基朝臣再關東下向）「落花の雪に蹈み迷ふ、片野の春の櫻がり」 梁元帝詩「石闕題二書字一、金燈飄二落花一」

らくくわりうすゐ 落花流水 ㊀落花と流水と。㊁男女互ひに相思ふ情のあること。

(諺)落花枝にかへらず、破鏡再び照らさず　一たび破れたる男女の緣の、再び復することと難きに譬ふ。謠曲（八島）「落花枝にかへらず、破鏡ふたたび照らさず」 傳燈錄「落花離レ上レ枝、破鏡不二重照一」

(諺)落花情あれども流水意なし　一方には情あれども、一方に通ぜざる譬へにいふ。朗詠「落花不レ語空辭レ樹、流水無レ心自入レ池」

らくぐわい 洛外 (名) 都の外。京都の市外。(洛中の對) 太平記（一、賴員回忠）「京中・洛外の武士どもを、六波羅へ召し集めて」

らくぐわいしちや 洛外七野 洛外にある七箇所の野。即ち、内野・北野・紫野・上野・萩野・平野・蓮臺野の總稱。和漢三才圖會（五十六、野）「内野（右近馬場南北）・北野（天神宮所）・紫野（大德寺今宮之北）・上野（今宮之北）・萩野（上野之北）・平野（北野之西）・蓮臺野（船岡山之坤）謂二之洛外七野一」

らくくわしやう 落花生 (名) 【植】次條に同じ。

らくくわせい 落花生 (名) 【植】なんきんまめ(落花生)に同じ。

らくくわん 落款 (名) 書畫をかき終へたる後に、筆者自ら其の姓名・字號などを記し、若しくは其の雅號の印を捺したるもの。款識百例（題言）「夫印款識成レ文者也、古人只佩レ之耳、其後一變、印レ紙以爲レ證、謂二之落款一、後世又一變、書畫家者流、稱下記二其姓名字號一者上、直謂二之落欵一也」 米庵墨談（三、落款）「此の方の院畫、落款すべて某筆と題す」

らくくわん 樂觀 快樂なりと觀ずること。容易又は有望なりと觀ずること。樂天觀。(悲觀の對)

らくくわんせつ 樂觀說 (英 Optimism) (名) 〔原語は羅典語の optimus 即ち最善の意の語より出づ〕 【哲】此の世界を、色色の不完全あるに拘らず、全體としては最も完全最も善美にして、而して其の内に生棲する生物の幸福に適ふものと考ふる哲學說。とーます・あくいなす、の世界創造說及び、らいぶにっつ・の神正論などは此の思想の代表的のもの。樂天說。(悲觀說の對)

らくげ 樂毛 (名) らくがみ(樂髮)に同じ。「苦爪・樂毛」

らくけい 烙刑 (名) 火あぶりの刑。

らくけい 落慶 工事の落成したる祝賀。北條九代記（一、鶴岡八幡宮修造遷宮）「鶴が岡八幡宮を落慶す」

らくげつ 落月 (名) 沈まんとする月。西に傾く月。朗詠「數行暗淚孤雲外、一點愁眉落月邊」 張若虛詩（春江花月夜）「落月搖レ情滿二江樹一」

らくご 落語 (名) ㊀話しの結局。方洲雜言「始皆傾聽、以爲二正論一、及二落語一、莫レ不二絕倒一」 ㊁おとしばなし(落話)に同じ。寶曆見聞集「昔は中略落語を輕口・おどけ話といへり」 只誠埃錄（二百二、當時おとしばなし流行する來由）「近來江戶において落語中興の祖は、立川談州樓烏亭焉馬老人なり」

らくご 落後 人後に落つること。他に後るること。

らくご 落伍 隊伍よりはづること。團體に後れ離るること。

らくこう 落紅 (名) 紅色の落花。

らくごか 落語家 (名) はなしか(咄家)に同じ。

らくこく 樂國 (名) 樂しきくに。愉快なる土地。樂土。詩經（國風）「逝將レ去レ汝、適二彼樂國一」

らくごしや 落伍者 (名) ㊀落伍したる者。㊁人後に落ちたる人。競爭に負けたる人。

らくさ 落差 (名) すゐとう(水頭)に同じ。

らくさい 樂歲 (名) 豐饒にして樂しき年。豐年。孟子（梁惠王上）「樂歲終身苦、凶年不レ免二於死亡一」

らくさい 落䰅 らくはつ(落髮)に同じ。下學集（下）「落䰅（ラクサイ、剃髮之義也）」

らくさう 落想 (名) ちやくさう(著想)に同じ。

らくさうこう 落霜紅 (名) 【植】うめもどき(落霜紅)に同じ。

らくさく 落索 (名) 酒食の殘物。下學集（下）「落索（日本俗、呼二殘盃冷炙一爲二落索一也）」

らくさつ 落札 入札したる物事の、其の手に落つること。札の落つること。

らくさつしや 落札者 (名) 落札したる人。

らくさつにん 落札人 (名) 前條に同じ。警察犯處罰令（第二條、四號）「落札人に對し其の事業又は利益の分配若くは金品を强請したる者」

らくじ 落字 (名) 漏れおちたる文字。ぬけじ。脫字。

らくじ 樂事 (名) たのしき事。愉快なる事。謝靈運文（擬魏太子鄴中集詩序）「天下良辰・美景・賞心・樂事、四者難レ幷」

らくじつ 落日 (名) いりひ。夕日。謠曲（羽衣）「落日のくれなゐは、蘇命路の山をうつして」 謝靈運文（撰征賦）「望二新晴於落日一、起二明光於躋月一」

らくしや 絡車 (名) 絲をまく車。絲まきぐるま。

らくしや 洛叉 落沙 (梵 Laksa) (助數) 數量の名。十萬。盛衰記（十二、院鳥羽殿居）「十六洛叉の底までも答へつつ」 如意輪陀羅尼經「一洛叉、唐云二十萬數一也」

らくしやう 酪漿 (名) 牛又は羊などの乳汁。酪。洛陽伽藍記「齊王肅歸レ魏、初不レ食二羊肉及酪漿一」

らくしやう 落掌 らくしゆ(落手)に同じ。

らくじやう 落城 ㊀城の陷ること。愚耳舊聽記「大佛・かさぎ落城し」（武家名目抄） ㊁物事を維持する能はずして投げ出すこと。支へきれずして他の手に渡すこと。

らくしゆ 落首 (名) 〔落書の一首の義。一說、落書の音轉。（和訓栞）〕 嘲弄又は諷刺の意を含めたる、作者匿名の戲歌など。

らくしゆ 落手 手に請け取ること。落掌。入手。

らくしゆつけ 樂出家 (名) 勤行・修行などせず、逸樂に日を送る僧侶。若風俗「御心安き出入の者・不斷醫者・樂出家」

らくしよ 樂處 (名) 樂しき處。樂土。吳融詩「路岐無二樂處一、時節倍思レ家」

らくしよ 落書 ㊀嘲弄又は諷刺の意を含めたる匿名のふみ。おとしぶみ。本朝文粹（十三、嵯峨天皇御時落書多多）「櫻島忠信落書（依二此落書一、拜二任大隅守一）」 江談抄「嵯峨天皇御時、無善惡と云落書世間多多也、篁讀云、无惡（さがなくば）善（よかりなまし）と讀む」 ㊁らくがき(落書)に同じ。

らくしよく 〔落飾　髮を剃りおとして佛門に歸すること。剃髮。後紀（八、延暦十八年二月乙未）「天皇落飾」紀略（十三、寛仁元年四月廿九日）「三條院太上天皇、依二不豫一落飾」因果經「捨二飾好一剃二鬚髮一」

らくじん 〔樂人　(名)　心身の苦なくして氣樂なる人。ひまじん。櫻陰比事「輕い浮世の樂人、我れなり」

(諺)**樂人樂を知らず**　辛苦を解せざる人は、安樂を知らず。

らくすけ 〔樂助　(名)　氣樂なるものを人名にとりなしていふ語。傾城色三味線（京上）「信濃の國の住人脈生殿の御内に、下六・藤六とて兄弟の樂助有りしが」

らくずゐ 〔落蘂　(名)　落ちたる花のしべ。落ちたる花。楚辭（離騷）「擥二木根一以結レ茝兮、貫二薜荔之落蘂一」

らくせい 〔落成　工事の成就したること。できあがりたること。左傳（昭公七年）「楚子成二章華之臺一、願下與二諸侯一落上レ之」（注）宮室始成祭レ之、曰二落成一」東觀友聞「新居落成」

らくせいしき 〔落成式　(名)　落成を祝ふ儀式。

らくせう 〔落照　(名)　入り日の光り。落日。梁簡文帝詩「落照暎日晩、落照映二空簷一」

らくせき 〔絡石　(名)　【植】ていかかづら(絡石)に同じ。

らくせき 〔落籍　□一名籍を除くこと。名籍を除かれたること。大學衍義補「軍士落籍者衆、皆聚二山澤一爲レ盜」□二特に、妓女の、妓籍より名前を除きて身を引くこと。妓女の廢業すること。西湖志「杭州營妓周韶能レ詩、子容過レ杭述レ古飲レ之、韶求二落籍一」

らくせつむげべん 〔樂説無碍辯　(名)　佛語。しべん(四辯)を見よ。

らくせん 〔洛川　(名)　若衆をいふ、僧侶の隱語。よだれかけ（六）「販ぎ若衆を（中略）洛川といふは所化方より出で、野郎といふは町方より言ひ出だしたる略名にぞ侍る」

らくせん 〔落選　選擧におちたること。當選せざること。

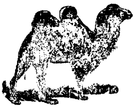
らくせんしや 〔落選者　(名)　落選せる人。

らくそ 〔酪素　(名)　哺乳動物の乳の中に含有する蛋白質。

らくそう 〔落僧　(名)　墮落したる僧侶。佛戒を破りたる僧。甲陽軍鑑（廿八）「濟僧・落僧の隔てには今の書立、落墮僧達裘帶役と申す物をいたせ」

らくそん 〔落蹲　(名)　なっそり(納蘇利)の異稱。宇津保（藏開上）「らくそんにもなく舞ひ給ふ」枕（九七、ひは）「らくそんは二人して、ひざふみて舞ひたる」樂家錄（廿八、）「高麗壹越調、納蘇利（舞出）一名、落蹲」

らくだ 〔駱駝　(名)　□一【動】哺乳類中、有蹄類の一種。大なるは高さ一丈餘に達す。體軀大きく、四肢長くして、其の各に二趾を有し、趾底は厚く且つ膨大なるを以て、砂漠の旅行に適す。胃腑の一部なる瘤胃には、二三十箇の小嚢附屬し、此の中に約三四升の水を貯へ、必要に應じて之を胃中に出だすを得。背部には脂肪を貯ふる肉峰あり。之がために食を採らず、又水をも飲まずして、よく久しきに堪ふるを得。背部の肉峰は種類によりて其の數を異にし、一箇を有するものを單峰駱駝といひて、あふりか及び印度にて多く畜養せられ、二箇を有するものを雙峰駱駝といひ、たうるす及び雪山以北の中央亞細亞に產し、前種より少しく大きく、色も稍美麗なる褐色なり。今は野生のものなく、孰れも飼養せられ、負荷・運搬に使役せらる。肉は食すべく、乳よりは、ばた及び乾酪を製すべく、毛は織物に、糞は燃料に用ひらる。後漢書「南單于衆稱レ臣、遣レ使上書、獻二駱駝二頭馬十匹一」□二(駱駝芋)の略。□三すべて形大きく粗雜なる物にいふ語。「駱駝炭」□四夫婦連れ立ちて行くこと。京阪の方言。



らくだ（一）

らくだ 〔落墮　墮落すること。僧侶の、戒を破りて妻帶すること。運歩色葉「落墮（ラクダ）」醒睡笑（六）「僧の落墮して居けるを（中略）女房の内外ありくあり」

らくたい 〔落帶　(名)　びは(琵琶)の名所。びは(琵琶)を見よ。盛衰記（卅一、青山琵琶流泉啄木）「琵琶（中略）白心のふくしゆに、虎の皮の撥面、落帶なり」

らくたい 〔落體　(名)　【理】重力の作用を受けて自由に落下する物體。

らくたい 〔落胎　自然の出產期に先だち、人爲によりて胎兒を母體より分離せしむること。又、其の胎兒。紀略（四、天德三年二月十三日）「襄レ袋置二落胎一」

らくだい 〔落題　(名)　題意に添はざる詩歌。題の趣旨を詠み落としたる詩歌。庭訓往來（二月）「和歌者（中略）落題之體」下學集（下）「落題（ラクダイ　詩歌所レ言）」

らくだい 〔落第　試驗に合格せざること。不第。扶桑集（九）「落第後贈二吏部藤郎中一、被レ病無才頻落第、明時獨自滯二殷憂一」都氏文集（五、文章生詩）「右高望等詩、或備レ恩相善、或用レ韻不レ類、落第之恨、各自取レ之」唐詩紀事「進士唱レ第、向二書省一、落第者、至レ省門一散去」

らくだいせい 〔落第生　(名)　落第したる學生。

らくだいも 〔駱駝芋　(名)　【植】やまのいも(薯蕷)の異名。

らくだがひ 〔駱駝貝　(名)　【動】軟體動物中、腹足類の一種。形、水字貝に似たるも、指狀の突起は前後に一本、左右に五本づつあり。我が國、小笠原島・臺灣などに產す。くもがひ。

らくたく 〔落託　落魄　らくはく(落魄)に同じ。

らくだずみ 〔駱駝炭　(名)　どがまずみ(土窯炭)に同じ。

らくたん 〔落膽　力を落とすこと。がっかりすること。文同詩「職事有二出入一、長抱二落膽驚一」

らくち 〔樂地　(名)　安樂なる土地。樂境。晉書（樂廣傳）「名教内自有二樂地一、何必乃爾」

らくちしやう 〔落地生　(名)　【植】なんきんまめ(落花生)に同じ。

らくちやう 〔落丁　(名)　書物を綴づるとき綴ぢ漏らしたる紙、書物のページの脱け落ちたるもの。脫葉。缺頁。

らくちやく 〔落著　□一物事の決著すること。おちつくこと。まとまり。完結。決局。太平記（一、）「句の優美遠長なる體、殺のみあって其の趣向落著の所を難レ知」新可笑記（四）「暫く落著せずして、御思案めぐらし給ふに」朱子語類「卻有二一箇落著一」□二江戸時代、吟味の事件の裁決の稱。閑訟秘鑑「裁許と落著差別之事。是れは御奉行所に而（中略）人殺・喧嘩之類は吟味物と、落著と唱へ候由」

らくちやわん 〔樂茶碗　(名)　樂燒の茶碗。雍州府志（七、土產門）「豐臣秀吉公在二聚樂城一時、千利休招二朝鮮人之造二陶器一者上、使レ燒二茶碗一（中略）其底樂字突起、取二聚樂之樂字一者也、依レ是號二樂燒一、又稱二樂茶碗一」

らくちゆう 〔洛中　(名)　都の内。京都の市中。京中。太平記（一、武家）「洛中に兩人の一族をすゑて（中略）京都の警衞に備へらる」

らくちゆうけいゑい 〔洛中警衞　(名)　京都守護を輔佐して、洛中・洛外の警衞に任ぜし職。將軍家の家人を以てこれに充つ。東鑑（六、文治二年三月廿四日）「洛中警衞事者、示二付平六時定、内内二品仰付也」

らくちゆうしゆご 〔洛中守護　(名)　きやうとしゆご(京都守護)に同じ。東鑑（六、文治二年二月廿七日）「洛中守護者、已可レ被レ仰二左典廐一之故也」

らくちゆうはらひ 洛中拂　(名)　江戸幕府の輕追放の一。洛中の地に入るを禁ずるもの。御仕置例類集（三、二、寛政八年六月）「人之惡事に成り候品を數多拵立て賣捌き候始末不屆に付、一同洛中拂」

らくちゆうらくぐわいはらひ 洛中洛外拂　(名)　江戸幕府の輕追放の一。洛中・洛外の地に入るを禁ずるもの。張紙留「京都御仕置、御當地に而江戸拂に當たり候ものは洛中洛外拂」

らくちゆかりうむ 刺苦丟葛僧謨　(名)　【植】菊科、にがな屬の二年生草本。形狀にがなに似て高さ凡そ三尺に達す。上部の葉は無柄、葉脚を以て莖を抱く。花は皆黄色の舌狀花冠を具ふ。歐羅巴の原產。莖より採りたる白色乳漿液を乾かしてらくちゆかりうむと稱し、痲醉性の成分を含むを以て藥用とす。とくちしや。

らくてう 〔落潮　(名)　おちしほ。ひきしほ。退潮。劉長卿詩「落潮迴二野艇一」

らくてつ 〔烙鐵　(名)　やきごて(燒鏝)に同じ。

らくてん 〔樂天　天命を樂しむこと。自己の境遇に滿足すること。世の中を樂觀すること。易經（繫辭上）「樂レ天知レ命、故不レ憂」孟子（梁惠王下）「樂レ天者保二天下一、畏レ天者保二其國一」

らくてんか 〔樂天家　(名)　樂天なる人。樂天主義の人。

らくてんくわん 〔樂天觀　(名)　人世を快樂なりと觀ずる見解。世の中を樂觀する見解。

らくてんしゆぎ 〔樂天主義　(名)　前條に同じ。

らくてんせつ 〔樂天説　(名)　【哲】らくくわんせつ(樂觀說)に同じ。

らくてんてき 〔樂天的　樂天なるさまにいふ語。

らくてんまんしうらく 〔落天萬秋樂　(名)　まんしうらく(萬秋樂)の異稱。體源抄（十三、廿五萬秋樂次第（中略）落天萬秋樂、五六帖計りを連れて吹く」

らくど 〔樂土　(名)　らくち(樂地)に同じ。詩經（魏風）「樂土樂土、爰得二我所一」

らくとこ 〔樂床　(名)　安樂なる寢床。安樂なるふしど。二代男（八）「引舟の女郎までも爰にあらはれ（中略）頭北面西の樂床」

らくね 樂寢　(名)　樂に寢ること。心をくつろげて寢ること。一代男（四）「女、樂寢をすれば、ろてんの通ふ程落とし穴あり」小町踊（冬）「水鳥のらくねや波の高枕」

らくのう 〔酪農　(名)　獸類などの乳汁搾取・乳酪・煉乳・乳油の製造を業とする農夫。

らくのりもの 樂乘物　(名)　安樂なる乘物。一代女（二）「毎日、樂乘物つらせて出でられしに」

らくば 〔落馬　馬上より落つること。平治（中）「先日の落馬の事を思し出で」盛衰記（十五、宇治合戰）「六箇度まで御落馬あり」宋書（沈慶之傳）「託レ病落レ馬」

らくばい 〔落梅　(名)　花の散り落ちたる梅。散り落ちたる梅の花。朗詠「白片落梅浮二澗水一、黄梢新柳出二城墻一」江總詩「滿酌金巵催二玉柱一、落梅樹下宜二歌舞一」

らくばう 〔落帽　帽子を落とすこと。又、其の帽子。晉書（孟嘉傳）「有レ風吹二嘉帽一墮落、嘉不レ之覺」

らくばうず 〔樂坊主　(名)　氣樂なる坊主。三代男（三）「誠に餘念の樂坊主や」[illegible]歌加留多（三）「刀もやめて樂坊主、隱居領とて下さるる十人扶持も寺參りに」

らくはく 〔落魄　〔魄は音たくなれど習慣音による〕おちぶるること。志を得ずして沈淪すること。零落。史記（酈生傳）「家貧落魄、無二以爲一衣食業一」南史（杜驥傳）「驥少落泊、不レ爲二時知一」落泊。

らくはく 〔落剝　はくらく(剝落)に同じ。

らくばく 〔落莫　落寞　さびしきさまにいふ語。王褒文（甘泉宮頌）「徑落莫以差錯」韓愈文（送二楊少尹一序）「不二落莫一否」

らくはつ 〔落髮　らくしよく(落飾)に同じ。紀略（一、弘仁元年十月廿四日）「太上皇落髮入道、權大僧都益信、奉レ授二三歸十善戒一」北史（魏宗室）「南王、遂自落髮爲二沙門一」

らくひつ 〔落筆　筆を下すこと。揮毫。李白詩「興酣落レ筆搖二五嶽一、詩成嘯傲凌二滄洲一」

らくびんのがく 洛閩學　(名)　〔程頤は洛陽の人、朱熹は閩中の人なるよりいふ〕ていしゆがく(程朱學)に同じ。

らくへんげてん 〔樂變化天　(名)　けらくてん(化樂天)に同じ。謠（泰山府君）「天つ御空は雲晴れて、らくへん化天は顯はれたり」佛地論（五）「樂變化天、樂自變化、作二諸樂具一、以自娛樂」

らくぼく 〔落木　(名)　葉の散りおちたる木。落葉せる木。庾信文（哀江南賦）「辭二洞庭一兮落木、去二涔陽一兮極浦」杜甫詩「古城疎二落木一」

らくめい 〔落命　いのちを落とすこと。死ぬること。川中島合戰（五）「我が國にての落命、他國の聞こえ雖レ儀至極」

らくやう 〔洛陽　(名)　〔支那の唐代の帝都は洛陽(今の河南省河内府)なりしよりいふ〕みやこ。京都。朝野群載（三、洛陽田樂記）「洛陽、大有二田樂之事一」和漢三才圖會（七十二本）「都（中略）油小路之東爲二左京一（洛陽）西爲二右京一（長安）」

(諺)**洛陽の紙價貴し**　〔下文の晉書の故事より出づ〕著書の盛んに世に行はるるをいふ。晉書（文苑傳）「左思字太冲（中略）欲レ賦二三都一、構レ思十稔、及二賦成一、時人未二之重一、張華見曰、班張之流也、於レ是競相傳寫、洛陽爲レ之紙貴」

らくやう 〔落陽　(名)　ゆふひ。入日。夕陽。落日。

らくやうくわ 〔洛陽花　(名)　【植】□一ぼたん(牡丹)の異名。群芳譜「唐宋時、洛陽花冠二于天下一、故牡丹竟名二洛陽花一」□二なでしこ(瞿麥)の異名。

らくやき 樂燒　(名)　〔豐太閤が聚樂の第に在りし時、朝鮮の陶師朝四郎を召し、利休の法式に從ひて燒かしめ、聚樂の字を底に印せしめたるよりいふ。（雍州府志）〕手づくねにしたる土燒の陶器。多く茶碗にして、赤・黑の二種の釉を用ひ、火入（クワンニフ）細かく、質脆くして色白し。

らくらい 〔落雷　【理】空中電氣の放電が雲と地球との間に起こりたる時の現象。時としては樹木・家屋を倒し或ひは之を燒き、人畜をも死傷せしむることあり。之を防ぐには避雷柱を用ふ。

らくらく 〔落落　(副)　□一まばらなるさま。さびしきさまにいふ語。劉禹錫文（詩序）「今來落落、如二晨星之相望一」左思詩「落落窮巷士」□二胸襟の闊豁にして、小節に拘泥せざるさまにいふ語。晉書（石勒載記）「大丈夫行レ事、當二磊磊落落、如二日月之皎然一」□三志大にして相合はざるさまにいふ語。後漢書（耿弇傳）「嘗以爲落落難レ合、有レ志者事竟成也」

らくらくらいらい 〔落落磊磊　石などのごろごろと落ち來るさまにいふ語。謠（鵺）「賴政が矢先に中たれば、變身失せて落落磊磊と地に倒れて」

らくらく 〔樂樂　(副)　安樂なるさま、又、容易なるさまにいふ語。大藏狂言（靱猿）「樂樂と旅を致いて通る事で御座る」荀子（儒效）「樂樂兮其執レ道不レ殆也、炤炤兮其用レ知之明也」

らくらく 〔犖犖　(副)　すぐれて人に超絶せるさまにいふ語。韓愈文（代二張籍一與二李浙東一書）「中丞二惟閣下心事犖犖、與二俗殊一不レ同」

らくるゐ 〔落涙　なみだをおとすこと。流涕。盛衰記（一、別當院補師）「落涙まことに難レ押」魏文帝詩「妻子牽二衣袂一、落涙霑二懷抱一」

らくわ 〔裸花　(名)　【植】植物學上の用語。むひくわ(無被花)の異名。

らくゑん 〔樂園　(名)　愉快なる庭園。安樂なる場所。樂土。

らくん 〔羅裙　(名)　うすもののすそ。陳後主詩「翠帶羅裙人爲解」

らけい 〔蘿徑　(名)　蔦かづらの生ひ茂りたるこみち。高適詩「蘿徑垂二野蔓一」

らげつ 〔蘿月　(名)　薜蘿を照らす月。つた葛を照らす月。太平記（卅九、光嚴院禪定法皇行脚）「廷臣常に參って、蘿月の寂を妨げける」沈佺期詩「相留且待雞黍熟、夕臥深山蘿月春」

らけっと (英 Racket)　(名)　ろーんてにすにて、球を打つに用ふる具。木にて楕圓形に枠を作りて緣とし、腸を以て枠の内側に網を張り、之に把手を附けたるもの。

らこ 枋　(名)　あふご(朸)をいふ、肥前國長崎の方言。（物類稱呼）

らーご 亂碁　(名)　らんご(亂碁)の略。圓融院扇合「らごとらせ給ひて、勝たせ給へる勝ちわざ」

らごーあしゆらわう 〜羅睺阿修羅王　(名)〔梵 Rāhu-asura 障持と譯す〕佛語。四阿修羅の一。身長七百由旬、其の手にて日月を執りて光を障ふといふもの。論經卷一「妙法緊那羅中略羅睺阿修羅王」法華經序品「有二四阿修羅王一中略羅睺阿修羅王」

らーこく 〜羅國　(名)　香木の産地なる暹羅國の名より轉じて、香合せに用ふる香木の名。七種の香の一。（名香目錄）

らーこく 〜羅穀　(名)　うす物とこめ織りと。太平記（三、主上御三）「十善天子中略羅穀の御袖をほしあへず」晉書（石崇）「蘊二蘭麝一被二羅穀一」

らごーしやう 〜羅睺星　(名)　次條に同じ。運歩色葉「羅睺星」

らごーせい 〜羅睺星　(名)　九曜の星の一。らごしやう。

らーさう 〜蘿窻　(名)　蔦かづらのはびかかりたる窻。隱者の家の窻などにいふ。太平記（廿七、直義朝臣隱遁）「蘿窻・草屋の庭に塵來して、羅袂を挽たる隙も無かりけり」

らーざう 亂雜　(名)　らんじやう(亂擾)に同じ。宇津保（祭使）「らざうして舞ひつ」

らし (形ニ)　名詞・代名詞の下に屬きて、其の物ならんと思はるる意、又、いかにも其の物にふさはしき意を表はす。「男らしき振舞ひ」「馬鹿らしき事」

らしく・す 其のものらしきさまをなす。其れに相應したる狀をなす。

らし (助動)〔上古・近世はらし・らしきと活用すれど、中古はらしの活用のみ〕推量の意を表はす。記下「ながみこや、つひにしらむとかりは子む良斯」萬二「いにしへもしかなれこそ、うつせみも妻を爭ふ良思吉」同十「み雪ふる冬は今日のみ、鶯の啼かむ春べは明日にしある良之」

らーしう 〜羅袖　(名)　うす物のそで。朗詠「羅袖不レ遮廻二火數一」王翰詩「羅袖舞娟似レ無レ力、行拾二落花一比二容色一」

らーしき 〜羅織　らしよく(羅織)に同じ。

らしーしよくぶつ 〜裸子植物　(英 Gymnospermae)(名)【植】植物學上の用語。顯花植物中、胚珠が子房内に生ぜずして裸出せるものの總稱。花被を有するものと然らざるものとあり。蘇鐵・麻黃の類。

らーしや 〜羅紗　(葡 Raxa)(名)　羊毛にて薄く密に織りたる一種の毛織物。御當家令條十六、（異國船入津留物覺）「羅紗」博多小女郎波枕上「らしや・すためん」明史「概賜二大紅紵絲羅紗一」

らーじやう 〜羅城　(名)　城のそとぐるわ。外郭。天武紀下「難波築二羅城一」通鑑（唐紀、胡注）「凡大城謂二之羅城一、小城謂二之子城一」

らしやうーもん 〜羅城門　(名)　一古昔、京都の外郭の正南に設けたる門。續紀十七、天平十九年六月己未「於二羅城門一雩」同卅四、寶龜八年四月戊戌「大使今毛人到二羅城門一」二【植】次條の略。

らしやうもんーかづら (名)【植】唇形科、蓮錢草屬の多年生草本。莖は方形、地上に臥す。葉は心臟形にして先端尖り、縁邊に粗鋸齒を有し、下部の葉は葉柄長く、上部の葉は殆ど無柄にして莖を抱く。花は葉腋毎に一箇づつ生じ、紅紫色の脣形花冠を有す。我が國、深山の陰地に自生す。きりんさう。

らしやーで 羅紗手　(名)　革の名、銀地に鐵印にて模樣を打ち出し、其の模樣の所柔かに脹らみて羅紗の如きもの。ほくちで。

らしやーのり (名)【植】きやうのひものの異名。

らしやーはけ 羅紗刷毛　(名)　次條に同じ。

らしやーはらひ 羅紗拂　(名)　羅紗の塵を拂ふはけ。ぶらし。

らしやーめん 〜羅紗綿　(名)　一【動】めんやう(綿羊)に同じ。二日本婦人にて西洋人の妾となれる女を卑しみていふ語。

らーしゆつ 〜裸出　物に蔽はれずして、あらはれ出づること。むきだし。露出。

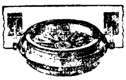
らーしよく 〜羅織　種種に造り構へて、無罪の人を罪に陷ること。無辜の人を羅織して、其の罪を織成すること。舊唐書（來俊臣）「與二侍御史侯思止王弘義等一同惡相濟、招二集亡賴數百人一、令二其告事一、共爲二羅織一」

らーしん 〜裸身　(名)　はだかみ。はだか。すはだか。裸體。

らーしん 〜羅針　(名)　細長き鋼にて造りたる磁石。針先等にて中央部を支へ、水平面内を自由に動き得るやうになしたるもの。常に南北を指して靜止するより、方位を知るに用ふ。磁石針。

らしんーしごせん 〜羅針子午線　(英 Magnetic meridian)(名)　羅針盤の磁針の軸を通過する平面。即ち、磁氣子午線。

らしんーばん 〜羅針盤　(名)【理】航海等に際し、方位を知るための裝置。輕き圓板の周を三十二等分して方位を記せるものを磁針の上に貼り、之を船體の動搖に係らず、常に水平の位置を保たしむるやうに裝置したる器内に支へたるもの。通常、船の進む方向と一致せる向きに標針を出だし置き、之に對する圓板上の方位によりて船の進む方位を知る。



らしんばん

らせいた 羅背板　(葡 Raxta)(名)　往古、西洋より舶來したる毛織物の一種。經に梳毛絲、緯に紡毛絲を用ひ、緯絲二本毎に綿絲の梭を通して織りたるもの。普通、赤又は藍の無地とす。御當家令條十六、（異國船入津留物覺）「羅背板」和漢三才圖會廿七「羅世板、似二羅紗一而薄也」

らせいたーさう (名)【植】蕁麻科、からむし屬の宿根草本。高さ二三尺、質硬くして灌木狀を呈す。葉は橢圓形にて鋸齒を有し、對生す。花は葉腋より出づる花莖に穗狀花序に排列し、淡黃色を呈す。海邊の砂地に自生す。

らーせち 〜羅刹　(名)　次條に同じ。

らーせつ 〜羅刹　(名)〔梵 Rakshasa 暴惡可畏と譯す〕佛語。人を食ふといふ暴惡なる魔。男・女あり。今昔七「寺の外に立出でて遊行する程に、羅刹女に値ひぬ」翻譯名義集「羅刹此云二惡鬼一也、食二人血肉一、或飛レ空或地行、捷疾可レ畏也」

らーせつ 〜羅切　陰莖を切り去ること。らぎり。（剃勢）

らせつーてん 〜羅刹天　(名)　佛語。十二天の一。白獅子に乘り、身に甲冑をつけ、右手に刀を持して之を立て、左手は大指にて中指・小指をおさふ。

らせつーにち 〜羅刹日　(名)　陰陽家にて大凶なりといふ日。運歩色葉「羅刹日、日胃・月鬼・火翼・水參・木氐・金奎・土柳、大凶日」

らーせん 〜羅扇　(名)　うすぎぬにて張りたる扇。

らーせん 〜羅氈　(名)〔羅紗の毛氈の義〕舶來の毛織物の一種。花文を染め出したるもの。卓の敷物などに用ふ。

らーせん 〜螺旋　(名)　一螺の殼の線の如く旋回せる筋。二ねぢ(捩子)に同じ。

らせんーけい 〜螺旋形　(名)　螺旋の如きかたち。

らせんーさう (名)【植】田麻科、らせんさう屬の一年生草本。高さ二尺餘に達す。葉は長卵形、心臟狀の基部を有し、長き葉柄を具へて互生す。花は小形、葉腋に簇生し、黃色の五花瓣を具ふ。果實は球形、鉤狀の刺毛を密生す。我が國、原野に自生す。

らせんーすゐしんき 〜螺旋推進機　(名)【理】螺旋の理を應用し、其の廻轉によりて船を前後に進退せしむる裝置。

らーそつ 〜邏卒　(名)　一見まはりの卒。巡邏の卒。唐書「夜醉、爲二邏卒一擊二折其齒一」二明治の初め、各府縣に置き、警察事務に從事せしめたる職。明治六年六月廿四日、取締組・補亡吏等と共に總て番人と改稱し、同八年三月七日再び舊名に復し、同年十月廿四日巡査と改稱せられたり。明治四年十月廿三日太政官沙汰「府下取締として邏卒三十人被二備置一候」

らーたい 〜羅帶　(名)　うすもののおび。李偉林詩「微風動二羅帶一」

らーたい 〜裸體 倮體 躶體　はだか。はだか。まるはだか。御伽草紙（あか）廿四「裸體になり、我が身を蚊に喰はせて」管子「桓公不レ歛、裸體紐胸稱レ疾」吳志（薛綜）「日南郡、男女倮體、不二以爲一レ羞」

らたいーぐわ 〜裸體畫　(名)　裸體の姿を畫ける繪。人體美を描ける畫。

らたいーびじん 〜裸體美人　(名)　美人の裸體なるもの。

らーたけし (形ニ)　らふたけくあり。和訓栞「澤菴和尚東關記「賤の男が心づくしにもる小田は、らたけし人の知らぬわざ哉」

らち 〜埒　(名)　馬場の周圍に結べる垣。其の高きものを雄埒、低きを雌埒といふ。宇津保（祭使）「らちにむかひて、馬の毛申し給へり」和名抄四「埒、良知」

らち・あく 埒明　物事の運びはかどる。かたづく。きまりがつく。狂言「如何樣の六つかしい算が有る共、埒明くることで御座る」若風俗四「太刀先にて埒明けん」諺草「埒明くと云ふ詞は古き詞なり。南都にて春日大明神祭禮の時、一夜神輿を外に遷す。其のまはりに埒を結ひて、人の猥りに近づき觸れん事を愼む。其の翌朝今春氏の猿樂幣を持ち來て、埒を發いて祝言を讀む、始めて獨り神輿の前に詣でて、是れより諸人共に入る。此の故に物の屈塞の開きたるを埒明くと云ひ來たれり」

らち・も・なし 埒無　らっしもなし(臈次無)に同じ。源氏烏帽子折（烏帽子折の名盡）「倮ひて何の埒もなし」

らち・を・あける 明埒　はかどるやうにす。

らち・を・つける 附埒　きまりをつく。はかどるやうにす。處分す。

らーち 〜羅致　鳥を網にて捕る如くにして引きよすること。韓愈文（送溫處士序）「羅而致二之幕下一」

らぢうむ (英 Radium)(名)【化】白色の光輝ある金屬元素。融點七百度、空中にて表面に銹を生じ、水及び酸に溶解す。臭素又は鹽素との化合物、最も普通なり。原子量は二二六、五。ぺひぶれんて・と稱する鑛物中より採取せらる。らぢうむ及び其の化合物は透過能頗る強き放射線を射出し、徐徐に變脫してらぢうむ遊散物となり、更に變脫してらぢうむA・B・C・D・E等となり、且つへりうむ・と稱する元素をも成生す。

らぢうむ・の・はうしやせん (英 Radiations from Radium)〔――放射線〕【理】らぢうむ・の放射線はべくーれる線にして、α・β及びγの三線より成る。α線は毎秒二萬哩の速度を以て射出する陽電氣を帶びたる微粒の流、β線は毎秒十萬哩の速度にて射出する陰電子の流れにて、陰極線に相當す。γ線はα線及びβ線の射出の際、他原子に衝突し、ためにえーてる内に起こる脈動にして、X線に相當す。

らぢうむーいうさんぶつ (英 Radium emanation)〔――遊散物〕(名)【理】らぢうむ及び其の化合物が、其の體中より三種の放射線以外のものを放散す。是れ即ち遊散物なり。一種の氣體にして、特有のすぺくとる・を表はし、液體空氣の寒冷により液體となり又固體となる。自發的に絶えず變脫して、放射性の固體並びにへりうむ・に分解す。

らちくちーなし 埒口無　(形ニ)　らちもなし(埒無)に同じ。らち(埒)の條を見よ。

らーちやう 〜羅帳　(名)　うすもののとばり。庾信詩「紗窻獨掩、羅帳長垂」

らーちゆう 〜裸蟲　(名)　はだかむし。家語（執轡）「倮蟲三百有六十、而人爲二之長一」

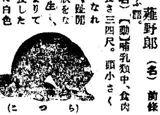
らーちん 〜羅陳　つらなりならぶこと。韓愈詩「光芒相照燭、南北爭羅陳」

らっーきやう 薤　(名)【植】百合科、葱屬の多年生草本。高さ一尺餘に達す。葉は細長くして平行脈を有す。花は繖狀に排列し、紫色の花被を具ふ。圃圃に栽培せらる。特種の臭氣を具へ、鱗莖を食用に供す。おほみら。さとにら。たまむらさき。やまむらさき。

らっきやうーづら 薤面　(名)　一額廣く頤細くして色白き顏。二〔むきてもむきても皮ある義〕鐵面皮の人を嘲りいふ語。

らっきやうーやらう 薤野郎　(名)　前條二の人を罵りていふ語。

らっーこ 臘虎　(名)【動】哺乳類中、食肉類の一種。體の長さ三四尺。頭小さく體軀肥え、前肢小なれども後肢は大に、趾間に蹼を張りて鰭狀をなす。全身長毛を密生し、其の色は老幼によりて異なれども、成長したるものは濃褐色に白色の斑あり。陸上の運動は甚だ拙なれども、水中にありては游泳極めて巧みにして、常に海流の衝激する場所にあり。多數群泳して、或ひは睡眠し或ひは嬉戯す。聽覺及び嗅覺は極めて銳敏なるを以て近づき難し。小魚・貝などを嗜食す。著明なる群棲地は亞米利加のぷりびろーふ群島及び露西亞のこんまんだーすきー諸島にして、我が國にては千島群島なり。毛皮は外套の襟・帽子・手袋などに製して價貴し。



（らっこ）

らっこ・の・かは 臘虎皮　上下何れへ對しても從順なる人を譬へいふ語。吾吟我集「一方に靡きも果てずあだなるは、獵虎の皮の撫でつけにして」

らっーこ 〜蝲蛄　(名)【動】ざりがに(蝲蛄)に同じ。

らっーさい 〜辣菜　(名)　つけもの(漬物)に同じ。運歩色葉「辣菜漬物之事」

らっーし 〜臈次　(名)　順序。次第。庭訓往來（十月）「云二點心一云二布施物一、糺二臈次一可レ注二給上下之品一也」運歩色葉「臈次」醒睡笑七「氣が短慮に、酒に醉うては人とからかひ中略らっしがなかった」

らっしくちーもーなし 臈次口無　(形ニ)　次條に同じ。膝栗毛五上「らっしくちもない女どもだ」

らっしーもーなし 臈次無　(形ニ)　順序立たず。次第も無し。亂雜なり。らちもなし。久保之取蛇尾（後上）「らっしもなきといふは、物の次第なきことなり」

らっーしよ (名)　らっし(臈次)の訛り。（かた言）

らっーそく 蠟燭　(名)　らふそく(蠟燭)の音便。今川大雙紙「移徙の時赤き色を用ひず、らっそく・盃等までも白きを本とす」運歩色葉「蠟燭」

らっちーもーなし 埒無　(形ニ)　らち(埒)の條、らちもなし(埒無)の音便。膝栗毛（下一）「らっちもないこんだ」

らっーちや 蠟茶　(名)　茶及び二三種の藥品を粉末にして練り、型に入れて固めたるもの。運歩色葉「蠟茶」

らっーちや 磚茶 團茶　(名)　たんちや(磚茶)の訛り。運歩色葉「團茶」

らっーぱ 亂波　(名)　戰國時代、大名諸家にて、野武士・强盜などの中より召出し、扶持を與へて間諜などに用ひたるものの稱。北條五代記（五、廿八）「其の國國の案内をよく知り、心横道なるくせ者多かりし、此の名を亂破と名付け、國大名衆扶持し給へり、夜討の時は彼れらを先立つれば、知らぬ所へ行くに燈を取りて夜行くが如く道に迷はず中略敵國へ忍び入りて、或時は夜討・分捕・高名し、或時はさかひ目へ行き、藪原・草村の中に隱れゐて毎夜敵をうかがひ、何事にもあはざれば、曉がた敵に知らせず歸りぬ、是れをかまり共、しのび共、くさとも名付けたり」同九「或文に亂波としるせり、但し正字おぼつかなし、俗にらっぱといふ」

らっーぱ 〜喇叭　(名)　一管樂器の一種。金屬にて造り、吹く方は細く、末端は大きく開きて、聲の遠く達するやうにしたるもの。唐人笛。二代男八「喇叭・ちやるめら」正字通「喇叭、軍中吹器、俗呼二號筒一、見二戚繼光新書號令篇一」二酒の入りたる德利・瓶などを口に當てて飲むこと。其の狀、喇叭を吹くに似たればいふ。

らっぱーくわん 〜喇叭管　(名)【醫】女子の生殖器の一部。卵巢より卵珠を子宮に輸する筋肉質の細管。太さ凡そ三分、

長さ三寸餘、形喇叭に似たり。輸卵管。

らっぱしゅ 〔喇叭手〕(名) 喇叭を吹く人。

らっぱそつ 〔喇叭卒〕(名) 軍隊に屬して喇叭を吹く兵卒。

らっぱふき 〔喇叭吹〕(名) 一らっぱしゅ(喇叭手)に同じ。二虚言をいふ人。大言を吐く人。ほらふき。

らっぱむし 〔喇叭蟲〕(名)【動】原生動物中、纖毛蟲類の一種。顯微鏡的の細微なるもの。形、喇叭狀をなし、時に柄部にて他物に附著す。水中に產す。

らっぴらくくわい (副) 〔亂飛落花の意か、一說、らっぴは亂破(ラッパ)の訛りと。嬉遊笑覽〕 亂暴なること。亂脈なること。松の葉(三、長歌)「らっぴ。我れは都のらっぴらくくわい賣藥師」

らっぴらんくわい (副) 前條に同じ。師門物語「向かふ者をばらっぴらんくわい」

らっぴらんごく (副) 〔亂飛亂國の義か〕 前條に同じ。

らっぷ 〔亂舞〕(名) らんぶ(亂舞)二に同じ。一說、らくぶ(樂舞)なりと。(俚言集覽) 狂言記、二千石「御一門の參會にも中酔すはらっぷ也なりますると、下座へ下がらしやりまするのが見づらう存じて」

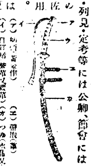
らつわん 〔辣腕〕 すごき腕前。うでき。敏腕。

らてい 〔裸裎〕 衣を脫して身をあらはすこと。あかはだか。孟子(公孫丑上)「爾爲レ爾、我爲レ我、雖レ袒ニ裼裸ニ裎於我側一、爾焉能浼レ我哉」

らでぃあん (英 Radian) (名)【數】弧度法に於て、角を測る單位。半徑に等しき弧の上に立つ中心角の大さを一らでぃあん・と云ふ。

らでん 〔螺鈿〕(名) 屋久貝・鸚鵡貝などの殼の眞珠光ある部分を採り、種種の形に切り、漆器などの面に嵌め込みて飾りとするもの。色白く紫綠を帶びて美麗なり。あをがひ。宇津保(藏開上下)「らでんすりたる箱」源(東屋)「まきゑ・らでんのこまやかなる心ばへまさりて見ゆる物」欒城遺言「以ニ螺鈿一作ニ茶器ニ」

らでんのたち 螺鈿劒 鈿劒の一。行幸・列見・定考等には公卿、節會には諸衞の將佐佩用す。鞘は紫檀又は沈の木地にて、金貝を以て飾る。飾劒に次ぎて貴重す。木地螺鈿劒。西宮記(四)「螺鈿劒、東宮帶常、公卿二宮大饗・行幸・列見・定考時、凡隨レ便著レ之、諸衞次將、節會時同用レ之」



(らでんのたち)

らでんのだち 螺鈿野劒 鞘に金貝を摺りたる野劒。小右記(寛弘二年八月廿三日)「螺鈿野劒納レ袋」

らてんくわへいどうめい 〔羅甸貨幣同盟〕(名) 貨幣同盟の一。西暦千八百六十五年、佛蘭西・白耳義・瑞西・伊太利の四國が締結し、後希臘も加入し、金銀兩本位制を採用して、金一、銀一五・五の比價を以て貨幣を製造し、互ひに共通せしむることを約せるもの。

らてんけうくわい 〔羅典教會〕(名)【宗】ろーまかとりっくけうくわい(羅馬加特力教會)に同じ。

らてんご 〔羅甸語 拉丁語〕(名) 羅甸(Latin)民族の語。今は死語となりたれど、學術語として萬國に通用す。

らでんこう 〔螺鈿工〕(名) 螺鈿の細工をなす工人。山槐記(元暦元年八月廿二日)「螺鈿工右兵衞府生源重直」

らてんめい 〔羅甸名〕(名) がくめい(學名)に同じ。

らと 〔羅斗〕(名) すゐなう(水嚢)に同じ。

らどう 〔蘿洞〕(名) 蔦などのはひかかれる洞窟。太平記(卅七、身子聲聞一角仙人志賀寺上人事)「蘿の枕を並べ苔の莚を友として、夜もすがら蘿洞の夢に契りを結ばれば」

らに 蘭 (名)【植】一次條に同じ。源(藤袴)「らにの花のいと面白きをも給へりけるを」二らん(蘭)二に同じ。躬恒集「らに。秋風に香をのみぞふる花なれば、匂ひからにぞ人に摘まるる」

らにのはな 〔蘭草〕(名)【植】ふぢばかま(蘭草)の異名。

らば 〔騾馬〕(名)【動】哺乳類中、有蹄類の一種。牝馬と牡驢馬との間種。よく困難に堪ふるを以て、力役に用ひらる。通常、子を產まず。

らば (英 Lava) (名)【地】ようがん(熔岩)に同じ。

らはい 〔螺盃〕(名) 屋久貝にて造れる盃。政事要略(廿八、十一月下、賀茂臨時祭)「螺盃・瑪瑙盞各賜一巡(踏歌宴料八寸料、銅盞臨時祭料)」江次第(六、石清水臨時祭)「說ニ螺盃・銅盞ニ」

らはい 〔羅拜〕 つらなりて拜すること。とりまきて拜すること。唐書(薛仁貴傳)「突厥相視失レ色下レ馬、羅拜遁去」

らぼうし 〔羅望子〕(名)【植】てらせんもだま(羅望子)に同じ。

らばん 〔羅幡〕(名) 古へ朝廷にて大射の時、射場の標に樹つる旗。兵庫寮式「凡大射、建ニ羅幡一者」

らばん 〔羅盤〕(名) 磁針と分度圈とより成り、磁針子午線に對し、或る一線の方向・方位・角度を計るに用ふる器械。測量用羅盤・船用羅盤の二種あり。

らばんぎ 〔羅盤儀〕(名) じしやくばん(磁石盤)に同じ。

らぴす (羅 Lapis infernalis の略) (名)【化】せうさんぎん(硝酸銀)に同じ。

らふ 〔蘿蔔〕(名)【植】だいこん(大根)の異名。

らふ 〔﨟 臘〕(名) 僧侶が安居の功を積みたる年を數ふるにいふ語。轉じて、一般に年功を積むこと。「上﨟」「一﨟」「極﨟」「らふたく」

らふ 〔臘〕(名) 陰暦、十二月の異稱。臘月。「舊臘」松風村雨東帶鑑(二)「臘を送り春を迎ふ」

らふ 〔蠟〕(名) 一【化】脂肪酸と一價のあるこーる・とより成るえすてる・の一種。脂肪に類し、常溫にては滑かなる軟き塊をなすも、熱すれば融けて油狀となる。蠟燭製造等に供せらる。二らふそく(蠟燭)の略。(諺)蠟を嚼む如し 旨味なき詩文などに譬ふ。楞嚴經「味如レ嚼レ蠟」

らふ 〔鑞〕(名) 鎔かして金屬を接(ツ)ぐに用ふるもの。はんだ・らふ・鉛らふ・錫らふの類。

らふ 〔羅布 羅敷〕 つらなりしくこと。あまねく行き渡ること。晉書(庾亮傳)「遣ニ諸軍、羅ニ布江沔ニ」

らふいろ 〔蠟色〕(名) 黑漆にて塗り、研ぎ上げたるもの。狂言(六、塗師平六)「蠟色の漆」

らふうちがみ 〔蠟打紙〕(名) 蠟地の鳥の子紙。年を經て蠹魚にかかる患へなしと。(紙譜)

らぶか (名)【動】かぐらざめの異名。

らふく 〔蘿蔔〕(名)【植】だいこん(大根)二に同じ。

らふぐわ 〔臘畫〕(名) あぶらゑ(油畫)に同じ。春波樓筆記「名山勝景を寫眞にして、阿蘭陀の法を以て臘畫に畫き」

らふけち 〔﨟纈〕(名) 古への染方の一種。縮緬其の他の絹物等に出すべき模樣に、蠟を塗りつけて地を染め、模樣だけを白く染め拔くもの。內藏寮式(諸祭幣帛)「夾纈・﨟纈帛、各二疋二丈」

らふげつ 〔臘月 﨟月〕(名) 陰暦十二月の異稱。下學集「臘月(支那十二月之祭名レ臘、故云ニ臘月一也、臘與レ﨟同字也)」最明寺殿百人上﨟「旣に今年も臘月下旬」漢書(陳勝傳)「臘月、莊賈殺レ勝」

らふこう 〔蠟工〕(名) 蠟にて細工する工人。內匠寮式「蠟工二人」

らふざいく 〔蠟細工〕(名) 蠟にて種種の細工をなすこと。又、其のもの。

らふじ 〔﨟次〕(名) 一﨟を積みたる年次。出家後の年數。砂石集(五下)「大小の戒相も知らず、犯制の行儀も辨へず、僅に﨟次を數へ空しく供養を受くる」二次第。順序。らっし。

らふじつ 〔臘日〕(名) 一年の最終の

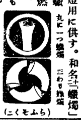
日。おほみそか。おほつごもり。書言字考節用「臘日(ラフジツ)說文、冬至後三戌爲レ臘、風俗通、夏曰ニ嘉平ニ、殷曰ニ清祀ニ、周曰ニ大蜡ニ、漢改爲レ臘、臘者獵也、言田獵取レ獸、以祭ニ祀其先祖ニ也」後漢書(陳寵傳)「後常以ニ臘日ニ祀レ竈、而薦ニ黃羊ニ焉」

らふせき 〔蠟石〕(名)【鑛】成分は水を含めるあるみにうむ・の硅酸鹽類。質柔軟にして、油樣の感あり。白・黃・赤等の諸色を呈す。備前國三石鑛山に產し、石筆の原料とす。石筆石。青田石。

らふせきひつ 〔蠟石筆〕(名) 蠟石にて造りたる石筆。

らふせつ 〔臘雪〕(名) 臘月にふる雪。朗詠「漸薰臘雪新封裏」

らふそく 〔蠟燭〕(名) 一紙又は木綿絲を心とし、之に蠟又はすてありん酸に少許のぱらふぃん・を混じたるものを塗りて得たるもの。點燈用に供す。和名(十二)「蠟燭」太平記(三、陶山小見山夜討)「蠟燭數多所所被レ燃て」二紋所の名。蠟燭に象りたるもの。まるにひとつらふそく・みつわりらふそく等あり。(諺)蠟燭は身を減らして人を照らす 人のために身を犧牲にするに譬ふ。


丸に一つ蠟燭
三わり蠟燭
(らふそく)

らふそくだい 〔蠟燭臺〕(名) しよくだい(燭臺)に同じ。庭訓往來(五月)「燈臺・火鉢・蠟燭臺」

らふそくたて 〔蠟燭立〕(名) 前條に同じ。一代女(三)「蠟燭立の鶴龜を轉ばせ」

らふそくのき 蠟燭木 (名)【植】やまぐるまの異名。

らふそくや 蠟燭屋 (名) 蠟燭を製造し、又は賣るを業とする家、また人。新永代藏(一)「蠟燭屋に立ち寄って」

らふだけ (名)【植】うんもんちく(雲紋竹)の異名。

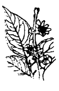
らふぢ 〔蠟地〕(名) 布又は紙などの、蠟をひきたるが如く光澤ありて滑かなる地質。胸算用(五)「十枚つぎの蠟地の紙に、御免筆の名印までしるしたる」

らふづけ 鑞附 (名) 鑞にて金屬製の器を接ぐこと。又、其の接ぎたる物。

らふにんぎやう 〔蠟人形〕(名) 蠟にて固め造りたる人形。

らふのき 蠟木 (名)【植】はぜのき(櫨)の異名。

らふばい 〔蠟梅〕(名) 一【植】臘梅科、臘梅屬の落葉灌木。高さ十尺餘に達す。先端の尖れる卵形、全邊の葉を對生す。花は香氣强し。花被は多數の片より成り、內層の片は帶紫色にして短く、外圍の片は黃色なり。


(らふばい)

有毒なれども、觀賞用として庭園に栽培せらる。からうめ。なんきんうめ。梅譜「蠟梅、本非ニ梅種ニ」蘇軾詩「天公點レ酥作ニ梅花ニ、此有ニ蠟梅禪老家ニ」二香の名。質は伽羅、珍らしき薰りあり。火末らららしくさびたり。(名香目錄)

らふばいくわ 〔臘梅科〕(名)【植】顯花植物、雙子葉類の一科。灌木。方莖を有し、油細胞を具ふ。葉は全邊の單葉にて對生し、托葉を具へず。花は整齊、兩性、花被の數多く、螺旋狀に排列して花瓣狀をなす。雄蘂は十箇乃至三十箇。心皮は凡そ二十箇ありて分離し、各一室の上位子房を有し、二箇の倒生胚珠を具ふ。花柱は各心皮に一箇づつ存し、果實は瘦果、一箇の種子を含む。種子は殆ど胚乳を有せず。一屬五種より成り、我が國に栽培せらるるもの二種。藥用或ひは觀賞用に供す。

らふはち 〔臘八〕(名) 陰暦十二月八日の稱。此の日、釋迦成道の日とて、禪家にては一日よりこの前日まで成道會を行ふ。尺素往來「寒更紅糟者、臘八之佛供」

らふはちがゆ 臘八粥 (名) 〔臘八の日、禪家にて食するよりいふ〕 うんざうがゆ(溫糟粥)に同じ。俳諧歲事記(四、十二月)「溫糟の粥(八日、釋迦成道の日也、本朝の五山にても、十二月八日都の諸寺に於いて此の義あり、又曆山七寶五味の粥を贈る、これを臘八粥といふ由所見あり)」

らふび 〔臘尾〕(名) 年末。歲尾。張船山詩「臘尾春頭放ニ幾枝ニ」

らふびき 蠟引 (名) 一蠟を表面にひきたること。又、其のもの。二らふぢ(蠟地)に同じ。

らふふ 〔蠟布〕(名) 蠟引きの布。

らふふう 〔蠟封〕 手紙などを、蠟にて封ずること。

らふまっち 蠟燐寸 (名) 普通のまっちの軸木の代りに、ぱらふぃん・を浸み込ませたる燃絲を用ひ、其の一端に黃燐及び鹽酸加里の混合物を膠にて附著せしめたるもの。粗なる面にて摩擦すれば忽ち發火す。

らふもめん 蠟木綿 (名) 木綿地に蠟をひきたるもの。蠟びきの布。

らぶらどるかいりう (名) 〔——海流〕(英 Labrador flow)【地】寒流の一。北あめりかの東岸を流るるもの。

らふり 〔臘裏〕(名) 陰暦十二月の內。朗詠「看無ニ野馬ニ聽無レ鶯、臘裏風光被ニ火迎ニ」太平記(十二、神泉苑)「臘裏風光、宛如ニ春三月ニ也」

らへい 〔邏兵〕(名) らそつ(邏卒)一に同じ。

らべい 〔羅袂〕(名) うすものの衣の袂。江淹文(爲蕭太尉上ニ便宜ニ表)「羅袂從レ風而棄」

らべいか 羅面紋 〔葡 Rubeca〕(名)

樂器の名。三絃にして、馬の尾を弦にしたる弓にて鳴らすもの。古く葡萄牙より渡來せり。

らほち 〔螺髮〕(名) 次條に同じ。

らほつ 〔螺髮〕(名) 釋迦の像にある如く、縮み渦きて螺文をなす頭髮。砂石集(下二)「螺髮は出家の形也」

らま 〔喇嘛〕(名) 喇嘛敎の最上位の僧。

らま 〔蘿藦〕(名)【植】ががいも(蘿藦)に同じ。

らま (接尾) 古語。名詞・代名詞の下に屬きて、何何ぞと、其の意をたしかに言ひ聞かする語。([illegible]) 武烈紀「臣(ヤツコ)らま」續紀(一)「天皇大命良麻(ラマ)止詔大命乎」

らまう 〔羅網〕(名) 一鳥を捕るあみ。運步色葉「羅網(ラマウ)」淮南子(主術訓)「鷹隼未レ摯、羅網不レ得レ張ニ於谿谷ニ」二佛語。寶珠を連綴して網とし裝飾とするもの。榮華(音樂)「池のめぐりに植木あり、枝每に皆羅網かかれり」法華經「眞珠羅網、張ニ其上ニ」

らまうとう 〔羅網燈〕(名) 羅網二にて飾りたる燈。榮華(御裳着)「羅網燈とては或ひはむらごの組み色色にして結び渡したり」

らまくわ 〔蘿藦科〕(名)【植】ががいもくわ(蘿藦科)に同じ。

らまけう 〔喇嘛敎〕(名) 西藏に起りたる佛敎の一派。北印度の巴特瑪織巴幹(パトマサンブハヴ)の入藏して創始せしもの。支那、明の頃、紅敎・黃敎の二派に分かれ、後、紅敎亡び、黃敎のみ西藏・蒙古・滿洲地方に行はる。その最上位の高僧を喇嘛といひ、政・敎の兩權を掌握す。

らまそう 〔喇嘛僧〕(名) 喇嘛敎の僧侶。

らまに (名)【植】いちゐ(一位)をいふ。北海道土人の稱。

らみー 〔辣美〕(馬來 Rami)(名)【植】苧蔴(カラムシ)に似たるもの。東印度地方の原產。良質の纖維を有するより、魚網及び布帛を製造する材料に用ふ。

らみーいと 辣美絲 (名) 辣美より製したる絲。

らむ (英 Rum)(名) 糖蜜を醱酵せしめ、蒸溜して製したる火酒。多く西印度諸島に產す。

らむ (助動) 推量の意を表はす語。記(上)「若草の妻持たせ良米(ラメ)」孝德紀「かなきつけあが飼ふ駒はひきでせず、あが飼ふ駒を人見つ羅武(ラム)か」萬(二)「たまきはるうちのおほぬに馬なめて朝踏ます等六(ラム)その草ふけぬ」

らむね (名) 〔英 Lemonade の訛り〕 水に炭酸瓦斯・酒石酸又は枸櫞酸等の如き酸を溶解し、少量の砂糖と、れもん・の如き香料とを調味したる夏季の飲料。

らもん〔羅文（名）立蔀・板垣などの上に、※の如く菱形に細き木を組み違へたるもの。（禎和）枕「すいがい・らもん・すすきなどの上に、かいたる蜘のす」盛衰記（卅九、資盛）「中門の羅門より有ニ叡覽一」羅門。

らもん〔羅紋（名）㊀うすぎぬの綾紋。北史（孤獨）「婦人以ニ羅紋白布一爲レ帽」㊁波のあやあること。李群玉詩「沉水羅紋海燕回、柳條牽レ恨到ニ荊臺一」

らやく（名）かんさう（疳瘡）に同じ。醒睡笑（七）「没のらやくを煩ひ、さんざんなるを、裏方のかなしがりて」

らりこくたい（副）次條の訛り。膝栗毛（四）「膝箱も何もらりこくたいになった」

らりこっはい〔亂離忽敗（副）散散に離れ散ること。めちやめちや。さんざん。膝栗毛（五）「亭主を羅利骨灰にしやあがる」羅利骨灰。

らりこはい（副）前條の略。（享保）貞節用「落拉灰（コハヒ）」

らりよう〔蘭陵（名）らりようわう（蘭陵王）の略。

らりよう〔羅綾（名）うす物とあやと。庭訓往來（八月）「翻ニ羅綾之袂於陣頭一」宋史（食貨志）「成都梓州福建、路市ニ羅綾紗一」

らりようわう〔羅陵王 蘭陵王（名）㊀りようわう（陵王）の誤稱。扶桑略記（廿六、康保三年十月七日）「殿上有ニ侍臣舞一（中略）羅陵王、小舍人藤原親光、著ニ舞衣幷天冠一」江次第（三、賭弓）「奏ニ勝負舞一（中略）左羅陵王（必舞ニ賜序一）右納蘇利（依ニ時宜一不ニ舞、又亂聲依ニ人數一無舞）」㊁次條の異稱。

らりようわうにふぢんきよく〔蘭陵王入陣曲（名）下例を見よ。近代、此の舞は傳はらず。體源抄（十二上、破陣曲）「蘭陵王入陣曲は、序者陣中敵に向かひて中レ之」通典（百四十六、散樂）「大面出ニ於北齊一、蘭陵王長恭才武而貌美、常著ニ假面一以對レ敵、嘗擊ニ周師金墉城下一、勇冠ニ三軍一、齊人壯レ之爲ニ此舞一、以效ニ其指麾擊刺之容一、謂ニ之蘭陵王入陣曲一」

らる 被 所 見（助動下二）㊀他より動作を仕向けられて、己れ受身となる意を表はす語。「見らる」㊁敬語の意に用ふる語。古今（秋下）「同じ御時せられける菊合に」

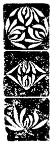
らる 得（助動下二）己れが力にて能くなし得る意を表はす語。「遂げらる」

られつ〔羅列 つらなりならぶこと。つらねならぶること。杜甫詩「粉黛亦解包、衾裯稍羅列」

られる（助動下一）らるの口語。

らん〔卵（名）たまご（卵）に同じ。

らん〔蘭（名）㊀【植】蘭科に屬する植物の汎稱。らに。謙資王母集「前栽の中にらんのかをり出でたるに」易經（繫辭）「同心之言、其臭如レ蘭」㊁紋所の名。蘭に象りたるもの。みつらんのまる・むかひらんびし・らんのはななど種種あり。


三らんの丸
向ひらんびし
らんのはな
(こん　ら)

㊂【植】きやうじやにんにく（茖葱）の異名。㊃【植】ふぢばかま（蘭草）の異名。㊄おらんだ（阿蘭陀）の略。梯航（言例）「和蘭は其の一なり、吾が邦單へに蘭と唱へ、蘭學・蘭書・蘭人などと稱するは上略の辭にして」

らん〔欄（名）㊀てすり。欄干。おばしま。和名（十）「欄（ヲバシマ）」㊁書籍・新聞紙などの紙面にある周圍のわく。「欄外」㊂新聞・雜誌などの記事を、種類に應じて區分したる各部分。「小說欄」「廣告欄」

らん〔襴（名）縫腋（ホウエキ）の袍又は直衣の裾の左右に取り附けたる横幅の帛。すそつき。はう（袍）を見よ。和名（廿）「襴、唐韻云、襴（音闌、衣加之字）襴衫也」作人司式「凡元日即位及蕃客入朝等儀（中略）自餘隼人皆著ニ大横布衫一（布袴緋帛肩巾）」

らん〔鸞（名）らんてう（鸞鳥）に同じ。

らん〔亂 ㊀みだるること。辨別のなくなること。「亂に終はる」論語（郷黨）「惟酒無レ量、不レ及レ亂」㊁世の亂るること。騷動。戰爭。騷亂。門出八島（二）「亂は太平の始め」易經（繫辭）「存而不レ忘レ亡、治而不レ忘レ亂」

らんをはらふ 撥亂 亂を除く。太平記（三、長崎新左衛門尉意見）「亂を撥らて治を致すは武の一德なり」公羊傳（哀公十四年）「撥ニ亂世一、反ニ諸正一、莫レ近ニ於春秋一」

らん（助動）らむ（助動）の音便。

らんあ〔亂鴉（名）亂れ飛ぶ多くのからす。耿湋詩「柳巷向レ陂斜、回塘噪ニ亂鴉一」

らんあう〔亂鶯（名）彼方此方にみだれ鳴く鶯。陳克詩「亂鶯啼破夢起多時」

らんあく〔亂惡 濫惡 みだれてあしきこと。亂暴に惡しきこと。秩序なくあしきこと。盛衰記（四、涌泉寺喧嘩）「衆徒ニ濫惡一者、魔緣の所行」太平記（廿三、上杉畠山流罪死刑事）「亂惡の習俗にて、衞護の神もましまさぬかとこそおぼゆれ」

らんい〔襤衣（名）やぶれごろも。つづれ。敝衣。

らんい〔蘭醫（名）蘭方の醫者。

らんいう〔亂遊 みだれあそぶこと。禮儀をみだして遊び興ずること。禁秘抄（上）「亂遊之時」

らんうめ（名）【植】らふばい（臘梅）の異名。

らんうん〔亂雲（名）みだれとぶ雲。

らんえう〔攬要 要をつまむこと。摘要。「通鑑攬要」

らんか〔爛柯〔下文の王質の故事より出づ〕閑碁に耽けること。斧の柄の朽つること。述異記「晉時樵者王質、逢ニ二童子棊一、與ニ質一物、如ニ棗核一、食レ之不レ飢、置ニ斧于坐一而觀、童子曰、汝斧柯爛矣、質歸ニ鄉閭一、無ニ復時人一」

らんが〔鸞駕（名）天子の乘物。鸞輅。龍駕。鳳駕。

らんかい〔亂階（名）㊀騷亂のきざし。禍梯。詩經（小雅）「無レ拳無レ勇、職爲ニ亂階一」㊁位階の順序によらず、越えて進め敍すること。越階。本朝文粹（六）「今年之春敍位、亂階不レ次之賞不レ見」太平記（十九、本朝將軍補任兄弟無其例事）「亂階の賞に依って、庸才立ちどころに臺閣の月を攀づ」

らんかう〔蘭膏（名）蘭の香をこめたる一種の油。太平記（廿七）「楊貴妃（中略）白く妙なる御はだへに、蘭膏の御湯を引かせければ」楚辭「蘭膏明燭、華容備些」註「以ニ蘭香一練レ膏也」

らんかう〔蘭交（名）きんらんのまじはり（金蘭交）に同じ。きんらん（金蘭）の條を見よ。

らんかう〔濫行 みだりなる行ひ。不都合なる所爲。大鏡（中）「明理の濫行に、行成が醜名およぶべきにあらず」

らんかうげ〔亂高下（名）物價の上りドりの變化の極めて頻繁なること。

らんかうはぐま（名）【植】菊科、きっかふはぐま屬の多年生草本。高さ一二尺餘。葉は花莖の下部に簇生し、掌狀に深裂して長き葉柄を有す。花は帶紅白色の筒狀花冠を有す。我が國、遠江に多く自生し、又、觀賞用として栽培せらる。えいざんしらはぐま。おにのからかさ。かさくさ。

らんかく〔卵殼（名）卵のから。

らんがく〔蘭學（名）和蘭の學問。又は語學。蘭學階梯（例言）「蘭學とは卽ち和蘭の學問と云ふことにて、阿蘭陀の學問をすることとなり」

らんかん〔闌干 欄干（名）〔らん（闌）は遮る、かん（干）は盾の義〕橋又は緣側などの邊に臨む所に、縱横に木を亘して人の墜落を防ぎ、又は裝飾とするもの。てすり。おばしま。欄楯。易林本節用「欄干」狂言記（花子）「橋の欄干に倚りそうて」李白詩「沈香亭北倚ニ闌干一」欄檻。

らんかん〔闌干 欄杆（副）㊀縱横に散り亂るるさまにいふ語。左思文（吳都賦）㊁涙の盛んに流れ出づるさまにいふ語。保元（三、爲義最後）「涙欄干として魂飛揚す」白居易詩（長恨歌）「玉容寂寞涙闌干」㊂星・月などの光の鮮かなるさまにいふ語。太平記（十七、山門攻事）「篝（中略）其の光ニ三里が間に續いて、一天の星斗落ちて欄干たるに不レ異」岑安卿詩「高梧脫レ葉金井寒、璧月夜挂珠闌干」

らんかんづくり〔欄干造（名）船の艤の一種。垣立（カキダチ）を欄干に造るもの。

らんき〔嵐氣（名）山中に立つ氣。江淹詩「嵐氣陰不レ極、日色半虧天」

らんき〔鸞旗（名）天子の御旗。

らんき〔亂氣 らんしん（亂心）に同じ。公裁祕錄（三、亂氣御仕置）「亂氣にて人を殺し候者、本性之者とは違ひ候間」

らんぎく〔亂菊（名）紋所の名。きく（菊）（六）を見よ。

らんぎく（名）【植】だんぎくの異名。

らんきやう〔鸞鏡（名）背に鸞鳥を刻みたる鏡。駱賓王詩「龍飈去去無ニ消息一、鸞鏡朝朝減ニ容色一」

らんぎやう〔亂行 みだりなる所行。みだりなる行跡。盛衰記（二、某窓打ニ殿下御隨身一）「是れぞ平家の亂行の初めとは聞こえし」

らんぎやく〔亂逆 むほん。反逆。

らんきよく〔亂曲（名）獨吟などにする、短き文句のみの一種の謠曲。

らんぎり 卵切（名）らんめん（卵麵）に同じ。

らんぐーんまい 蘭貢米（英 Rangoon rice）（名）下緬甸（Lower Burma）の首府、蘭貢より產出する米。

らんぐひ 亂杙 亂杭（名）秩序を亂して繁く地に打ち込みたる杙。川又は壕などの水底に繁く打ち込み、繩を張りて敵の障害物とする杙。平家（九、宇治川先陣）「水の底には、亂杭打って大綱張り」盛衰記（卅四、東國兵馬汰）「河中に亂杭・逆茂木打ち」

らんぐひば 亂杭齒（名）亂杭の如く不揃ひに生えたる齒。齒なみの惡しき齒。浮世床（中）「齒は亂杭齒」

らんくわ〔亂火（名）亂れ飛ぶ火。國姓爺（五）「火繩を筒に差しつくると齊しく飛んだる亂火の仕掛け」

らんくわ〔蘭花（名）水に浸してふやかしたる蠶豆の頭に小刀めをつけ、胡麻油にて揚げたるもの。はぜて蘭の花の如くなるよりいふ。

らんくわ〔蘭科（名）㊀和蘭國より傳來したる醫科。通市中取締類集（九、七十八、蘭科醫者御別之儀に付上申書付）「既に官醫にも蘭科專門之者も御座候上は、蘭科にて治驗有レ之候藥方、漢土之醫術には有用之書にも有レ之間數候得共、蘭科專門之者に於ては、極め而有益之書に可レ有レ之も難レ計」㊁【植】顯花植物、單子葉類の一科。陸地・沼地或ひは樹上に生じ、稀に寄生する多年生草本。花蓋は二層にて、三片づつより成り、概ね美し。雄蘂は一箇或ひは二箇あり、多數結合せる花粉塊を有す。花柱は雄蘂と結合し、其の前面に粘著性の柱頭を有す。果實は蒴、無胚乳種子を有す。殆ど四百十屬七千二百種より成り、我が國に自生又は栽培せらるるもの凡そ八十屬二百種。藥用或ひは觀賞用に供す。

らんぐわ〔蘭畫（名）〔蘭人によりて始めて傳はりしよりいふ〕西洋畫。油畫。春雨樓叢書（三、畫論）「阿蘭陀の地方は唐日本の如く圖畫なし、皆花油にて畫す、日本に是を油畫と云ひ、又蘭畫と云ふ」

らんくわい〔亂魁（名）亂賊の巨魁。謀叛人の張本。

らんくわい〔亂潰 みだれつひゆること。隊伍の秩序を亂して逃げ散ること。潰亂。易林「鎗飛中退、舉事不レ進、宋人亂潰」

らんくわい〔爛壞 ただれやぶるること。

らんぐわい〔欄外（名）㊀欄干の外。庾信文（??）「欄外將レ花、居然俱笑」㊁書籍・文書の輪廓の外。罫引の外。

らんくわう〔嵐光（名）山の氣の日に映ずるひかり。

らんくわう〔卵黃（名）たまごのきみ。

らんくわうしよく〔卵黃色（名）たまごいろ（卵色）（二）に同じ。

らんぐん〔亂軍（名）入り亂れたる戰ひ。

らんけい〔蘭蕙（名）春蘭と秋蕙と。共に香草の名。十訓（中）「蘭蕙苑嵐摧レ紫後、蓬萊洞月照レ霜中」後漢書「被レ褐懷ニ金玉一、蘭蕙化爲レ芻」

らんけい〔蘭契（名）きんらんのちぎり（金蘭契）に同じ。きんらん（金蘭）の條を見よ。

らんけい〔濫刑（名）みだりに行ふ刑罰。無法の刑罰。

らんけい〔卵形（名）縱截せる雞卵の外形。下部は上部よりも膨潤なり。たまごなり。

らんけい〔鸞鏡（名）㊀らんきやう（鸞鏡）に同じ。太平記（十八、比叡山開闢事）「百錬の鸞鏡の如し」㊁十二律の一。じふにりつ（十二律）を見よ。

らんけいでう〔鸞鏡調（名）鸞鏡の調子。じふにりつ（十二律）を見よ。徒然草「其の次に鸞鏡調をおきて」拾芥抄（上、末、十二律）「七月鸞鏡（ランケイ）調」

らんけう（名）【植】らっきやう（薤）の異名。

らんげき〔亂逆 らんぎやく（亂逆）に同じ。盛衰記（廿六、宇佐公通脚力）「承平に將門、天慶に純友、東西に鼻を並べて亂逆せしに少しも不レ違事かな」

らんげき〔亂擊 みだれうつこと。秩序なく擊ち合ふこと。亂戰。津國女夫池（二）「兄弟天下を爭ひ、亂擊となるべし」

らんけん（名）らーけん・の訛り。博多小女郎波枕（上）「金にあかした衣裳つき（中略）かるさい・らんけん・繻子・天鵞絨」

らんこ（名）【植】かつら（桂）（一）の異名。

らんご〔蘭語（名）おらんだ語。梅里餘橋（祭典記事、先師梅里先生を祭るの文）「先生は（中略）蘭語・蘭文には甚だ熟し給へりとぞ」

らんご〔亂碁（名）碁子を指につけて取りて、多く得たるを勝ちとする戯れ。（豐〓）碁盤の筋の上に石をならべ、その筋を順に石をとりて、筋違ひにはとらぬ事あり、此れ等の戲の類か。（嬉遊笑覽）らご。ちきり。拾遺（雜秋）「さざれ石まきて、まけわざを」今鏡（すり川）「らんごとらせ給ひけるに、らんご拾ふ音など聞こえけるをぞ」

らんご〔亂後（名）騷亂のありたる後。戰後。

らんごく（名）らっぴらんごくの略。膝栗毛（四）「樂屋さあへ跳ねこんで、らんごくをやると思ひなさろ」

らんごく〔亂國 國を亂すこと。國の亂るること。亂れたる國。盛衰記（四、山王垂跡）「今度の御輿に矢の立つ事、亂國の基か、あさまし」荀子（君道）「有ニ亂君一、無ニ亂國一、有ニ治人一、無ニ治法一」

らんざ〔亂座 秩序を亂してすわること。打ち混りてすわりたる座席。

らんさう〔蘭草（名）【植】ふぢばかま（蘭草）の異名。

らんさう〔卵巢（名）【醫】女子生殖器の一部。左右一對あり、骨盤の側壁に位し、卵珠ここに產出せらる。

らんざう 亂聲（名）らんじやう（亂聲）に同じ。源平（?）「勝ち負けのらんざうども、ののしるも」

らんざう〔濫造 みだりに製造すること。粗末に製造すること。

らんさく〔濫作 みだりに多作すること。

らんざつ〔亂雜 みだれまじること。混雜。雜亂。梁簡文帝文（明明賦）「明金亂雜、細寶交陳」

らんさん〔爛粲（副）さんらん（粲爛）に同じ。詩經（唐風）「角枕粲兮、錦衾爛兮」

らんざん〔亂山（名）高さの不揃ひなる多くの山。

らんざんせい〔亂散星（名）兜の星の一。あられぼし（霰星）に同じ。

らんし〔籣矢 韉矢（名）矢を盛るる籣。高野御幸記「天治元年十月廿一日（中略）騎馬隨身六人著ニ烏帽子一、負ニ籣矢一」史記（趙公子）「平原君負ニ韉矢一、爲ニ公子一先引」

らんし〔蘭芝（名）〔芝は靈芝〕蘭と芝と。共に瑞草として賞する草。禮斗威儀「其政平、則蘭芝常生」

らんし〔亂絲（名）みだれたる絲。こぐらかりたる絲。

らんし〔卵子（名）母體より分離せる一箇の細胞。精子とあひて受精すれば新なる動物體を發生す。

らん-し〔亂視〕物を正しく明かに見るを得ざること。又、其の目。

らん-し〔爛死〕火に燒けただれて死ぬること。

らん-しつ〔蘭質〕（名）蘭の如く美しき質。盛衰記（十七、祇王・祇女・佛前）「心を蘭質の手に移せば、秋の露屋晩し」王勃文（七月賦）「金聲玉振、蕙心蘭質」

らん-しや〔鸞車〕（名）天子の御車。鸞輅。鸞輿。元萬頃詩「鳳輦迎風乘紫閣、鸞車避日轉彤闈」

らん-しや〔亂射〕矢・彈丸などをむやみに發射すること。

らん-じや〔蘭麝〕（名）蘭花と麝香との香。よきかをりの香。十訓抄（上）「身には蘭麝を薰じ、口には和歌を詠じ」晉書（石崇傳）「崇婢妾數十人、皆蘊蘭麝、被羅縠」

らん-しやう〔蘭省〕（名）太政官の唐名。後には辨官の異稱。江吏部集（中）「久陪蘭省東方朔、再入翰林白樂天」職原抄（上）「太政官（唐名尚書省、都省、蘭省）又」白居易詩「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」

らん-しやう〔濫觴〕〔水源の流れ微にして、觴を濫（ウカ）ぶる程の義〕物事の始め。物事の起源。盛衰記（廿四、南都燒失）「東大寺（中略）濫觴を尋ぬれば」太平記（十七、山門牒南都）「寔是以佛法守王法濫觴、以王法弘佛法根源也」家語（三恕）「江始出於岷山、其源可以濫觴、及其至江津也、不舫舟不避風、則不可以渉」

らん-しやう〔濫賞〕みだりに賞を行ふこと。又、其の賞。書經（旅獒）「有德不濫賞、賞必加於賢人」

らん-しやう〔卵生〕らんせい（卵生）に同じ。運歩色葉「卵生（ランシヤウ）」浦島年代記（三）「卵生の御子」

らん-じやう〔亂聲〕（名）㊀舞樂の始め、又、行幸の時、又は事を始むる時などに、笛・太鼓にて先づ奏するあやなき曲。文德實錄（十、天安二年七月浚辰）「左右相撲司、率樂人、於新成殿前、發奏亂聲、即使左右相撲」榮華（初花）「左右の亂聲などの勝負の程も、いと聞き苦しう」㊁ときのこえ（鬨聲）ならんと。扶桑略記（廿二、寬平五年九月五日）「嚳友立稱令調箏、亦令亂聲、時凶賊隨亦亂聲、即射戰、其箭如雨」竹崎五郎繪詞「色色の旗を立て並べて、らんじやうひまなくしてひしめきあふ」

らんじや-たい〔蘭奢待〕（名）〔蘭奢待は西竺の語にて、物を褒譽する語。三字の中自ら東大寺の三字を含むより、特に珍重せられしといふ〕奈良東大寺の正倉院御藏の名香。谷響集（五）「東大寺寶藏香木名蘭奢待（中略）蘭奢待者胡國語也、指物之善者、稱爲蘭奢待（中略）聖武帝御宇、自異國至、以蘭奢待中、自有東大寺之三字、帝感名實冥稱、置諸寶藏（中略）王導嘗謂胡僧曰、蘭奢、僧悅、蘭奢、胡語之褒譽也」

らん-しゆ〔亂酒〕㊀宴會にて、入りみだれて酒を飲むこと。武雜記「參會の時、亂酒に成り候らてすあら引きの事、常に有之義にて候」㊁酒をみだりに飲むこと。度を超えて酒を飲むこと。醒睡笑（五）「大酒老翁出來、飲酒爲醉、唯亂酒」二代男（二）「宵は亂酒の與左衞門」

らん-じゆ〔藍綬〕（名）〔じゆ（綬）は印をつなぎとむる組紐〕藍色の印綬。齊己詩「藍綬乍授新學士、白衫初脫舊神仙」

らん-じゆく〔爛熟〕㊀實の入りすぎて、うみただれたること。蘇軾詩「櫻桃爛熟滴階紅」㊁よくのみこみたること。北齊書（王晞）「非不愛作熟官、但思之爛熟耳」

らん-しゆつ〔濫出　闌出〕みだりにいだすこと。史記（酷吏）「愚民安知市買長安中物、而文吏繩以爲闌出財物于邊關」

らんじゆ-はうしやう〔藍綬褒章〕（名）學術技藝上の發明・改良・著述、教育・衞生・慈善・防疫の事業、學校・病院の建設、道路・河渠・堤防・橋梁の修築、田野の墾闢、森林の栽培、生產の繁殖、農商工業の發達に關して公衆の利益を興し成績著明なる者、又は公同の事務に勤勉し勞效顯著なる者に賜ふもの。藍色の綬を以て左肋に佩ぶ。褒章條例（第一條三號）「藍綬褒章」

らん-じゆん〔欄楯〕（名）らんかん（欄干）に同じ。南史（梁宗室、正德）「北固有小亭、登降甚狹、正德南廣其路、旁施欄楯」阿彌陀經「七重欄楯、周匝圍繞」

らん-しよ〔蘭書〕（名）和蘭國の書籍。和蘭語の書。蘭學階梯（發例）「和蘭（中略）蘭學・蘭書・蘭人などと稱するは上略の辭にして、其の本義を失ふに似たれども、惟其の唱へ易きに取るなり」

らん-しよ〔亂緒〕みだれたるいとぐち。

らん-じよ〔亂序〕（名）能舞にて、獅子の出づる際に奏する囃子。

らん-しよう〔亂鐘〕（名）つづけざまに打つ鐘の聲。馬戴詩「亂鐘嘶馬急、殘日半帆紅」

らん-しよく〔卵色〕（名）たまごいろ。殷堯藩詩「小泛鷗汀畔、輕搖卵色天」

らん-しよく〔藍色〕（名）あゐいろ（藍色）に同じ。

らん-しん〔亂臣〕（名）國を亂す臣。逆臣。太平記（二、長崎新左衞門尉意見）「俊基・資朝以下の亂臣」孟子（滕文公下）「孔子成春秋、而亂臣賊子懼」

らん-しん〔亂心〕心の狂亂すること。ものぐるひ。きちがひ。狂氣。老人雜話（下）「病氣甚しく、殊に亂心の體也」公裁祕錄（三、亂心御仕置）「本性に而人を殺し候も、亂心に而殺し候も、同然之御仕置に候間」

らん-じん〔亂人〕（名）㊀國をみだす人。反逆人。㊁心の亂れたる人。きちがひ。狂人。五人女（二）「つきづきの女も自づから友亂れて後は皆皆亂人となりにけり」二代男（二）「昨日まで子を抱きし乳母（中略）神を恨み佛に歎き亂人となって」

らん-じん〔蘭人〕（名）和蘭國の人民。蘭學階梯（發例）「和蘭（中略）蘭學・蘭書・蘭人などと稱するは上略の辭にして、其の本義を失ふに似たれども、惟其の唱へ易きに取るなり」

らんしん-もの〔亂心者〕（名）狂氣の人。きちがひ。狂人。

らん-ず〔蘭子〕（名）香の名。質は眞南蠻（ナンバン）にて、香古し。（名香目錄）なでしこ。

らん-すゐ〔嵐翠〕（名）みどりの色をなせる山のもや。翠色の嵐氣。白居易詩「三十六峰晴、雪消嵐翠生」

らん-すゐ〔濫吹〕みだりなること。亂暴。狼藉。古事談（二）「亂入后宮中、見物濫吹殊甚」東鑑（四十、建長二年八月廿六日）「御下知違背濫吹也、儘可停止」

らん-すゐ〔爛醉　亂醉〕甚だしく醉ふこと。へとへとに醉ふこと。泥醉。大醉。韋碣詩「輸他得路蓬洲客、紅綠山頭爛醉歸」蘇軾詩「應須爛醉答雲烟」

らん-せい〔亂政〕（名）亂暴なる政事。不法なる施政。左傳（隱公五年）「不軌不物、謂之亂政」

らん-せい〔亂世〕（名）みだれたる世。騷亂の世。太平記（廿七、雲景未來記）「亂世の媒の爲に遣したるなり」禮記（樂記）「亂世之音怨以怒、其政乖」孟子（離婁下）「顏子當亂世、居於陋巷」

らんせい の えいゆう〔亂世英雄〕騷亂の時における英雄。後漢書（許劭）「淸平之姦賊、亂世之英雄」

らん-せい〔蘭省〕（名）らんしやう（蘭省）に同じ。

らん-せい〔欄井〕（名）井桁ある井。謠曲（錦木）「らんせいのせいの錦の面かげに、いほりかなしき秋の村雨」

らん-せい〔濫製〕妄りに製造すること。粗末に製造すること。粗製。

らん-せい〔卵生〕卵のまま母體より出で、孵化して生まるるもの。即ち、鳥・魚・蟲の類。禮記（樂記）「胎生者不殰、卵生者不殈」

らん-せう〔蘭蕉〕（名）【植】だんどく（曇華）に同じ。

らんせつ-た〔蘭 Lanceta〕（名）昔時、醫療器械の一。針の如く扁平にして尖り、諸刃あるもの。はばり。

らん-せん〔亂戰〕敵・味方雙方入り亂れて戰ふこと。亂軍。

らん-せん〔亂前〕（名）騷亂のありたる前。高啓詩「亂前相別亂餘逢」

らん-ぜん〔爛然〕（副）物のあざやかなるさまにいふ語。燦然。漢書（王褒）「功德爛然」

らん-そ〔濫訴〕みだりに訴訟をおこすこと。台記（久安三年七月四日）「頭辨持來史注進感神院濫訴文」御成敗式目「勝不實企濫訴者」

らん-そう〔亂僧〕（名）亂暴なる僧。盛衰記（四十四、副將被斬）「かやうの亂僧なればとて、心さへ拙かるべきに非ず」

らん-そう〔濫僧　亂僧〕（名）㊀亂行の僧。㊁寺院に住まざる僧。臨時祭式「凡鴨御祖社南邊者、雖在四至之外、濫僧屠者等、不得居住」人車記（久安五年十二月十日）「濫僧供十石」

らん-そく〔蠟燭〕（名）らふそく（蠟燭）の訛り。東寺古文零聚（二）「らんそく」

らん-ぞく〔亂賊〕（名）國を亂すもの。むほんにん。

らん-だ〔亂打〕むやみに打つこと。めったうち。林寬詩「樵童亂打金吾鼓」

らん-だ〔懶惰〕なまけ怠ること。なまけ。ぶしやう。陶潜詩「阿舒已二八、懶惰固無匹」

らん-たい〔爛體〕（名）肉の久しくなりてただるること。謠曲（羽衣）「爛體霧深し、古松下の陰」

らん-だい〔蘭臺〕（名）㊀太政官の唐名。三代實錄（卅、元慶元年正月九日）「右大臣基經抗表、請罷大將職、詩（中略）伏望、補武辨於蘭臺、專愚忠於槐署」職原抄（上）「太政官（唐名尚書省、蘭臺）」㊁べんぐわん（辨官）の稱。元亨釋書（十七、平時範）「時範（中略）辭辨（中略）職、歸蘭臺、入佛家」太平記（一、後醍醐天皇御治世）「官蘭臺に至り、職職事を司り」

らん-だい〔鸞臺〕（名）鸞の姿の如く美しき樓臺。美しく結構を施せる樓臺。盛衰記（廿四、南都燒失）「東大寺（中略）鸞臺雲に構へて、一片の霞を隔てたり」

らん-だい〔亂題〕（名）からだい（交題）に同じ。

らん-だつ〔爛脫　亂脫〕紙などすたれ敗れて、字句・篇章などの脫落すること。釋紀（三）「亂脫」江談抄（五、詩事）「史記爛脫は只荀子序也」荀子（序）「荀子未有註解、亦復編簡爛脫、傳寫謬誤」

らん-たふ〔卵塔　蘭塔〕（名）㊀層級なく、圓くして鳥卵の形をなす塔。太平記（卅三、將軍御逝去）「骨は空しく留まって、卵塔一掬の塵となりにけり」龍湫和尙行狀「卵塔曰鏡像、不安木像」㊁卒堵婆。墓。

らんたふ-ば〔卵塔場〕（名）卵塔などのある場所。墓所。

らん-たん〔獨 Lanthan〕（名）【化】稀有元素の一。原子量一三九、原子價三。あるみにうむ・に幾分類似する金屬元素。

らんち〔英 Launch〕（名）軍艦に附屬する端艇。小蒸汽船。

らん-ちき（名）入り亂るること。いさかひ。混亂。喧嘩。

らんちき-さわぎ（名）前條に同じ。

らん-ちく〔闌畜〕（名）飼主の繫養を脫して、妄りに放逸する家畜。廐牧令「凡國郡所得闌畜、皆仰當界內訪主」

らん-ちつ〔亂帙〕（名）書帙のちらばりたること。

らん-ぢやう〔藍靛〕（名）【化】$C_{16}H_{10}N_2O_2$ 古へより知られたる青色の植物性染料。日光及び洗濯等のために褪色することなし。水に溶け難く、木綿を染むるには之を還元して白藍となす。硫酸と共に煮れば可溶性の青色物となる。從前は植物藍より製したりしが、現時はこーるたーる中に存する、なふたれん・を原料として人造せらる。

らん-ちゆう〔蘭蟲〕（名）〔和蘭の蟲の義。一說に蘭蟲の漢語龍睛魚の支那音 Lanzeching yü の轉訛と〕【動】まるこ（丸子）の異名。

らん-てう〔鸞鳥〕（名）支那にて想像の鳥。赤き雞の身にて、色は五采を具へ、聲は五音に中るといふ。山海經「鸞鳥自歌、鳳鳥自舞」

らん-でう〔亂調〕（名）次條の略。吉野都女楠（天皇かちの御幸）「神樂堂の大太鼓、らん調に打ち立て給はば」

らん-でうし〔亂調子〕（名）亂れたる調子。秩序なき調子。國姓爺（九仙山）「太鼓を打って亂調子」

らん-てん〔藍靛〕（名）らんぢやう（藍靛）に同じ。本草集解「波斯青黛、亦是外國藍靛花」

らんてん-くさり（名）細かなる鎖の上に枚鎖を入れたるもの。八重鎖。（安齋隨筆）

らん-とう〔亂鬪〕混亂して爭鬪すること。入り亂れてたたかふこと。

らんどう-くわう〔藍銅鑛〕（名）【鑛】成分は含水炭酸銅。小柱狀の結晶又は塊狀・土狀をなす。質脆弱、藍青色にして光澤あり。孔雀石と共に銅鑛脈に出づ。

らん-どく〔亂讀〕順序をたてず、むやみに讀むこと。

らん-どせる〔蘭 Ransel〕（名）はいなう（背囊）に同じ。

らん-どり〔亂取〕（名）㊀亂れ入りて敵地のものを掠め取ること。掠奪。甲陽軍鑑（廿）「こやねとし・亂取り致し、かつだを仕り、下下勇むこと限りなし」㊁柔道の語。危險のなき程度にて相手を制して、之を押へ又は投げなどする方法の練習の稱。柔術生理書（心得）「亂捕は往昔戰場にて甲冑を著したる者を取り押へんが爲め、始めて其の法を設けたるものなり」亂捕。

らん-な〔蘭菜〕（名）【植】はぼたん（甘藍）の異名。

らん-ない〔欄內〕（名）書籍・文書の輪廓の內。罫引きの內。（欄外の對）

らん-にふ〔亂入〕みだれ入ること。亂暴に押し入ること。保元（爲義最後）「左右なく亂入の條、狼藉なり」平家（一、禿髮）「彼の家に亂入し、資財・雜具を追捕し」闌入。

らん-にふ〔濫入〕みだりに入ること。無法に入ること。後漢書（黨錮傳序）「諸爲鉤黨者、因相陷害、睚眦之忿、濫入黨中」

らん-にふ〔闌入〕故なくして、入るべからざる所に擅に入ること。法曹至要抄（上）「闌入宮門」衞禁律（云）「闌入宮門、徒一年」

らん-にや〔蘭若〕（名）〔梵、阿蘭若（Araṇya）の略。閑寂・遠離處と譯す〕寺院の稱。てら。孟浩然詩「結交指松柏、問法尋蘭若」

らん-にん〔亂人〕（名）らんじん（亂人）に同じ。

らん-の-はな〔蘭花〕（名）紋所の名。らん（蘭）（二）を見よ。

らん-ば〔藍婆〕（名）佛語。羅刹女の一。藍婆鬼。釋迦如來誕生會（三）「らんば・びらんば、惡風となって」慧琳音義（五）「藍婆」法華經中、十羅刹女有、藍婆。法苑珠林「藍婆者其形如蝮、此鬼能著諸小兒、令其驚怖」

らん-ばい〔亂盃〕（名）順盃の後、順序なしに獻酬すること。下文を見よ。家中竹馬記「著坐ありて、初めは次第に參るを順盃と申す、後はかへてさきるを亂盃と申す」

らん-ばい〔爛敗〕ただれくさること。晉書（王祥）「帳下甘果爛敗」

らん-ばい（名）【植】むしかりの異名。

らん-ぱう〔亂邦〕（名）みだれたる國。亂國。論語（泰伯）「危邦不入、亂邦不居」

らん-ぱう〔蘭方〕（名）和蘭より傳へたる醫方。西洋の醫術。近世名醫傳（二、緒方洪庵）「偶讀某氏所譯和蘭內科書、論病理及治法甚悉、乃試之果驗、於是始講究蘭方」通市中取締類集（九、七十八、醫科醫術之儀に付中上候書付）「蘭方醫者加彫劑不相成と申すも、事實偏倚に相聞こえ可申」

らん-ばう〔蘭房〕（名）美人のねま。美人の房室。閨房。宋玉文（諷賦）「女（中略）於蘭房芝室之中、止臣於其中」

らん-ばう〔亂暴〕あらあらしき所行をなすこと。無法なることをなすこと。あばれること。あれまはること。東鑑（十五、建久六年八月六日）「致濫妨狼藉之由」太平記（十、高重最後合戰）「谷谷に亂れ入り、火を懸け物を亂妨し候」濫妨。亂妨。

らんばう-にん〔亂暴人〕（名）次條に同じ。

らんばう-もの〔亂暴者〕（名）亂暴なる所行をする人。あばれもの。亂暴人。

らんば-き〔藍婆鬼〕（名）らんば（藍

婆)に同じ。盛衰記十一、(入道州答)「藍婆鬼といふ鬼、京中に充ち滿ちて、十歳以前の小者、十が八九は取失はれ」

らんぱく〔卵白〕(名) 卵のしろみ。

らんばこ〔覽箱〕(名)〔御覽箱の略〕宣旨などを納るる箱。藤蔓にて編みて蓋あるもの。盛衰記卅三、(康定)「宣旨奉二請取一、良久しくあつて、覽箱の蓋に沙金十兩入れて返す」運歩色葉「卵箱(ランバコ)院宣入レ之」

らんぱつ〔亂髮〕(名) みだれたる髮。亂鬢。太平記卅一、(笛吹峠軍)「亂髮を額へ颯と振り懸け」後漢書(劉盆子傳)「入則亂髮壞レ形、出則窈窕作レ態」

らんぱつ〔爛發〕 あざやかに現はるること。爛然と發現すること。江淹文(御賦)「秀色爛發」

らんぱつ〔濫發・亂發〕 みだりに出だすこと。みだりに發布又は發行すること。「紙幣濫發」

らんばつ〔濫罰〕 みだりに罰すること。吳鈞詩「濫罰獨如レ此」

らんばつ〔濫伐〕 みだりに伐ること。妄りに山林の木などを伐ること。

らんぱふ〔蘭法〕(名) 和蘭の方法。和蘭風の療法。「蘭法醫」

らんはんしや〔亂反射〕(名)〔理〕光が表面粗なる物體の面に當たりて反射するときは、種種なる方向に反射す。斯る反射の稱。

らんぴ (名) 鷹の頭部の名所。たか(鷹)を見よ。

らんぴ〔濫費〕 みだりに費やすこと。むだづかひ。

らんび〔藍尾・婪尾〕(名) 一 古昔、饗宴にて、漸次杯を巡らし來たり、最尾に至る時、三盃連飲すること。北山抄七、(列見)「廻二自南座末一更逆上至二北第一人一、飲二三盃一、謂二之藍尾一」江次第五、(列見)「上卿飲レ之、次第西行勸レ之、入レ自二公卿座末一北行勸二最末人一、次第東行、到二北面第一座人一、頻勸二三度一(以上皆有巡唱)平鮮二之濫尾一、畢校二杓於史一復坐」白居易詩「三盃藍尾酒」湘素雜記「酒巡匝爲二藍尾一、南朝有二異國進一貢藍牛尾長三丈、人傚レ之以爲二酒令一」 二 最後。散末。楊萬里詩「破却梵尾饗、領略打頭淸」

らんびき〔蘭引〕(葡 Alambique)(名) 酒類などを蒸溜せしむる器。多くは陶製の深き鍋の上に同じ深さの鍋を蓋とし、其の上に冷水を盛り、下より火を燒きて蒸溜せしむるもの。

らんぴつ〔亂筆〕 みだりに書くこと。書體の亂れたること。みだれがき。

らんびやうし〔亂拍子〕(名) 猿樂・能舞などにてなす拍子の一。十訓抄(十)「鼓を打ちて亂拍子の次第をとる」猿樂傳記(上、四(京井始尾))「金春が家傳の道成寺(中略)其の亂拍子は、大臣公卿の束帶の時、練足といふ足取の法を寫したる物也」

らんびん〔亂鬢〕(名) らんぱつ(亂髮)に同じ。

らんぷ (英 Lamp)(名) 燈火器の一種。石油を容れたる器に金屬製の口金を附し、綿布製の燈心を插入して火を點じ、硝子製のほやにて覆ふもの。洋燈。

らんぶ〔亂舞〕 一 古昔、五節・豐明節會などに、殿上人などの、びんたたらなどいふ歌を唄ひて舞ふこと。公事根源(下)「帳臺におはします程、亂舞あり、びんたたらなど唄ふ。大歌・小歌などいふ事あり。寅の日は殿上の淵醉あり、朗詠・今樣など歌ひて、三獻はてて亂舞あり」 二 亂れて舞ふこと。十訓抄(十)「京より上日の輩下りて、遊宴・亂舞の程なり」明月記(建保五年十一月廿一日)「遊女列座、亂舞如レ例」 三 能樂の演戲の間に行ふ舞。らっぷ。陰德太平記(四十七、輝元・隆景・元春開陣)「鼓舞の堪能共多ければ、亂舞可二相催一」

らんぷあたま〔洋燈頭〕(名) はげあたま(禿頭)の異名。

らんぷげい〔亂舞藝〕(名) 亂舞三の藝。雪女五枚羽子板(下)「親のしつけし亂舞藝」

らんぷじん〔洋燈心〕(名) らんぷに火を點ずるに用ふる心(シン)。木綿絲にて造る。丸きを丸じんといふ。

らんぷだい〔洋燈臺〕(名) らんぷを載する臺。

らんぷつり〔洋燈吊〕(名) らんぷをつるす鐵製の自在鈎。

らんぶん〔蘭文〕(名) 和蘭國の文字にて綴りたる文章。梅里餘稿(祭典紀事、先師梅里先生を祭るの文)「先生は蘭人に面談し給ひしことはなかりし由なれども、蘭語・蘭文には甚だ熟し給へりとぞ」

らんぺき〔藍碧〕(名) あゐの如きみどり色。

らんぽう〔亂峰〕(名) 高さの不揃ひに峙てるみね。亂山。朱熹詩「一榻窗間眺、高旻盡二亂峰一」

らんぽう〔鸞鳳〕(名)〔鸞と鳳と、共にめでたき鳥の名〕君子・正人に譬へいふ語。又、同士の友又は夫婦の契りなどにいふ語。後漢書(劉陶傳)「公卿所レ擧、率黨二其私一、所レ謂放二鴟梟一而囚二鸞鳳一」盧綸詩「早敎二鸞鳳下二壯樓一」

らんぽん〔藍本〕(名)〔靑出二於藍一の語より出づ〕げんぽん(原本)に同じ。居易錄「今修二一統志一似當下以二舊通志一爲中藍本上」

らんま〔欄間〕(名) 天井と鴨居との間を、格子又は透し彫りのある板にて飾りたるもの。狂言(連歌盜人)「欄間の透しなどは、扨さてよい細工ではないか」天花板。

らんま〔亂麻〕(名) 亂れもつれたる麻。元稹詩「初到櫻二珍木一、多來比二亂麻一」

らんまく〔卵膜〕(名) 卵をつつむ膜。

らんまん〔爛漫・爛熳〕〔らん(爛)は鮮かに光る義〕 花の咲き亂れたるさま、光の輝くさまにいふ語。天神記「爛漫と花開け、匂ひ四方に芬芬たる」王延壽文(魯靈光殿賦)「流離爛漫」

らんまん〔亂漫〕 世の亂れたるさまにいふ語。盛衰記廿七、(天下餓死)「濁世亂漫の折りと云ひながら、心うかりける事どもなり」

らんみやく〔亂脈〕 亂れて筋の立たざること。亂れて條理のなきこと。亂雜。

らんみん〔亂民〕(名) 秩序を守らざる民。國法を亂す民。

らんめん〔卵麵〕(名) 雞卵を加へたる蕎麥切り。玉子入りのそばきり。らんぎり。

らんもん (名) 馬の庭乘の一種。屈折して乘り廻はすこととなるべし。大鏡(下)「御隨身四人と、我れもらんもんにあげさせ給はりしは、きやうきやうしかりし」

らんもん〔欄門〕(名) すかし模樣のある門か。又は、らもん(羅文)なるべし。平家(三、少將都歸)「家はあれ共、欄門破れて、蔀・遣戸も絶えてなく」

らんもん〔亂紋〕(名) 種種の模樣。太平記(廿七、田樂)「銀の亂紋打つたる下濃(スソゴ)の袴」

らんよ〔鸞輿〕(名)〔鸞鳥の聲の和するに象りて鈴を備へたればいふ〕 天子の召さるる輿。乘輿。鳳輦。三代實錄十二、(貞觀八年閏三月朔日)「鸞輿幸二太政大臣東京染殿第一、觀二櫻花一」西宮記(臨時十、朝賀及拜賀(謂元正朝、幸二上皇母后宮一))「五月五日、九月九日、御二鸞輿一、自餘御二葱花輿一」班固文(西都賦)「乘二鸞輿一、備二法駕一」

らんよ〔籃輿〕(名) やまかご(山駕籠)に同じ。和名二「籃轝、晉書云、陶元亮所レ乘乃是、籃轝(竹輿也)」晉書(陶潛傳)「王弘問二其所レ乘、答曰、素有二脚疾一、向乘二籃輿一、亦足二自反一」

らんよう〔濫用〕 みだりに用ふること。民法(第八百九十六條)「親權を濫用し」船員法(第十七條)「其職權を濫用し」

らんよう〔懶慵〕 ものうきこと。ぶしやう。ものぐさ。懶惰。

らんらん〔爛爛〕(副) 光りかがやくさま、鋭く光るさまにいふ語。きらきら。つやつや。つややか。浦島年代記(三)「花畠(中略)手燭に照らす色色は、枝枝爛爛と咲く中にも」世說(容止)「眼爛爛、如二巖下電一」

らんり〔亂離〕 國みだれて人人の離散すること。左傳(宣公十八年)「亂離瘼矣、奚其適歸」

らんりつ〔亂立〕 不揃ひにたつこと。亂雜に立ちならぶこと。

らんりよう〔蘭陵〕(名) 次條の略。

らんりようわう〔蘭陵王〕(名) らりようわう(蘭陵王)に同じ。

らんりん〔亂倫〕 人倫をみだすこと。人倫の道に背くこと。世說(方正)「玩雖二不才一、義不レ爲二亂倫之始一」

らんりんばう〔蘭林坊〕(名) 御物及び御書等を納むる所。だいり(内裏)を見よ。

らんる〔襤褸〕(名) やぶれごろも。ぼろきれ。つづれ。ぼろ。揚子方言「南楚、凡人貧、衣被醜弊、謂二之襤褸一」同「無緣之衣曰レ襤、紩レ衣謂二之褸一」

らんろ〔鸞輅〕(名) 天皇の召させ給ふ御車。禮記(月令)「孟春之月、天子乘二鸞路一、駕二蒼龍一」鸞路。

らんゐ〔闌遺〕 牛馬などが飼主の繫鞶を脱して妄りに放逸すること、財物の遺失すること。又、是れ等のもの。職員令(贓贖司)「正一人(掌二贓贖簿斂(中略)闌遺雜物事一)」廐牧令「凡闌遺之物、五日內申二所司一」

らんゐもつ〔闌遺物〕(名) 闌遺したる家畜・財物。捕亡令「凡得二闌遺物一者、皆送二隨近官司一」唐律「諸得二闌遺物一、滿二五日不レ送レ官者、各以二亡失罪一論」

らんゑ〔爛壞〕 らんくわい(爛壞)に同じ。諸安達原「膚膩ことごとく爛壞せり」